
LuLu ～風の軌跡～ ? 幻の天空竜

篠原勇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L u L u 風の軌跡 ～ ？ 幻の天空竜

【Nコード】

N 8 3 3 7 F

【作者名】

篠原勇

【あらすじ】

二人乗りの小型飛空船『エア・ライド』で世界中を駆け巡る何でも屋の少女ルルカと、相棒のおしゃべりネズミのこんにやく。仕事もなく、万年金欠病の彼女たちだったが、街でゴロツキたちに絡まれていた苦勞人ジャーナリスト、アドル・レイナーズを助けたことから状況が一変する。

成り行きで彼から、『一緒にビッグスクープを探してほしい』という依頼を引き受けたルルカたち。

久し振りの仕事……だが格安の依頼料。

完全にやる気ゼロ状態で適当に仕事を進めていたが、いつの間にやら『天空竜』を研究する偏屈考古学者と、彼の研究を付け狙う空賊団との抗争に巻き込まれ……。

その1

「ぎゃああああああつ　！！

ひつ……人殺しいiiiiiii　！！」

閑静な街中に、緊迫感に満ちた大絶叫が響く。

およそ事件や騒動などとは無縁の、小さな小さな山間の街の大通りに、突然出来上がった黒い人だかりの山。

その中心部には、ぽつかりと空間が空き、騒動の渦中の人物と思われる二人の人間が取り囲まれていた。

一人は、男。

どういうわけか、真昼間だというのに、道のと真ん中に大の字になって倒れ込んでいる。

そして……もう一人は、少女。

一見まだあどけなさの残る、ごくごく普通の少女なのであるが、倒れた男の側に佇む彼女の右手には、その容姿とは不似合いの『凶器』が握られていた。

「だつ……誰が人殺しよつ　！　失礼なこと言わないでよね、おっさん　！」

いきなり見ず知らずの人間に『人殺し』呼ばわりされ、少女は額に青筋を浮かべながら、自分を取り囲んだ群集に向かって怒鳴り返

す。

しかし、

「バ……バカ野郎っ！ 白昼堂々こんな大衆の前で人をぶった斬っておいて、誤魔化せると思ってたんじゃないよ！」

「だから、違ってたの！ よく考えてもみなさい！ こんな清楚可憐な美少女が人を殺せると思う？」

「（えっ、美女？！ どこどこ？）」

「あんたは引っ込んで！ いま面倒なことになってるんだから」

「（何だよ……美女なんてどこにもいねえじゃん）」

「ほほう……。あとでちょっと話し合いましょうか」

「な……何一人で喋ってるんだ……？」

「ま……まあいい。と……とにかく、役人だ！ 誰か役人を呼んでくれ！」

「げっ……！ ち……ちょっと待ちなさいってば！」

『ぎゃああああああああっ！！』

徐に、凶器を無防備にぶら下げつつ群集に歩み寄る少女。

つい先程起こったばかりの惨劇を目の当たりにしていた人々は恐れ慄き、一斉に後ずさった。

その2

遡ること、ほんの数分前……。

それは、突然の出来事であった。

「く……食い逃げだ　　っ　　！！」

切迫した叫び声が街中に響くとともに、一軒の小さなレストランから人相の悪い小太り中年男が飛び出してくる。

店の外に出ると同時に、迷うことなく猛疾走。

その体型からは想像もできないような俊敏な動きで、大通りを行き交う人ゴミの間を縫うように走り抜け、みるみるうちに店から遠ざかって行った。

そんな男に少し遅れて、数人のエプロン姿の従業員たちが憤怒の形相を浮かべながら飛び出してくるが……時既に遅し。

「だあゝっはっはっはっはっは　　！！」

あばよ、間抜けな店員ども　　！　　安っぽい味だったが、なかなかうまかったぜ　　！！」

食い逃げ男の背中では既に通りの遥か遠く。

とてもではないがもう追い付くことは出来ないだろう。

神経を逆なでするような捨て台詞だけが遠く響いた。

「クソがあ　　っ　　！！」

「戻って来やがれ、このブタ野郎　　！！」

「おめーが食ったのは、一番安い山菜定食だ　　！　　安っぽくて当たり前だろ　　！！」

耳を劈かんばかりの怒号が轟く。

しかし、まんまと食い逃げを許してしまったレストランの従業員たちは、結局はただガツクリと頂垂れて、逃げ行く男の後ろ姿を見送ることしか出来なかった。

「……………ついに出了たわね」

大通りの騒ぎを聞きつけ……………小さなオープンカフェでくつろいでいた少女はニヤリとほくそ笑んだ。

山間の平和な街で相次いで発生する凶悪な食い逃げ事件。

噂を聞き付け、犯人を捕まえんと張り込むこと三日。

ついに…… たった今、その犯人が姿を現したのだ。

三日間ずっと同じ店で、しかも朝からジュース一杯のみで一日中張り込んでいたため店員からは嫌な目で見られっぱなしであったが、少女はいちいちそんなことは気にしなかった。

大慌てで勘定をすませると、勢い勇んで颯爽と大通りの中央へと歩み出る。

「（なあ……、やっぱやめといた方がいいんじゃないのか？
どうせまた骨折り損のくたびれ儲けになるだけだぜ）」

すると……。

少女のすぐ耳元で、周りの人間には聞こえないような小さな囁き声が届く。

口調は大人びているが、声の質はまだ子供のものだった。

…しかし、声の主の姿はどこにも見当たらない。

「分かんないわよ。もしかしたら大物賞金首なのかもしれないじゃない」

姿なき声の主に返答する少女。

端から見れば完全に独り言。

周囲から奇異の視線が集まるが、今の少女の視界には食い逃げ男の姿しか入っていない。

「（そうかなあ……。大物賞金首は食い逃げなんてショボイことしないと思うんだけどなあ……）」

「いいの。ほら、来たわよ」

通りを行き交う人々は、少女が左手に携える『それ』の存在に気づくやいなや、関わり合いになるのはごめんと言わんばかりに彼女の周りを大きく避けて通り始める。

少女と、迫り来る食い逃げ男とを遮るものは何もなくなった。

食い逃げ男は走りながら小首を傾げる。

人々が群がる大通りに、突然ぱかりと空間が空いたのだ。

「お？ お？！ おおお！！」

何だ、何だあ？！ おめえら、この俺様のために道を空けてくれたってのかあ！！？

だあゝはっはっはっはっは！！！！

ついにこの『ただ食い雑食王』ゲリー様の名声も天下に轟いてき

たつてわけかあ　　！！」

有頂天になって疾走しながら高笑いを上げ始める食い逃げ男。

しかし、そこで彼は気付く。

一人だけ、ぽっかり空いた空間の中に身動き一つせず佇む一人の少女の姿に。

「オラア、その小娘！道をあげやがれ　　！！　天下のゲリー様のお通りだあ　　！！！！」

しかし、少女の姿が間近に迫って来た時、ようやく男は彼女が放つ異彩に気付いた。

左手に……刀　　？！！

気付いた時には既に手遅れ。

彼はもう完全に少女の刀の間合いに入っていたのである。

男が刀の間合いに入ったと判断した後の少女の動きは、実に俊敏なものであった。

右手を刀の柄に掛け、どっしりと腰を落として低く構える。

刹那、目を見張るようなスピードでその刀が抜き放たれた。

一体、その光景を見ていた何人の者が少女の剣筋を目に映すことができたであろう。

恐るべき速さの居合抜きであった。

「ぐ……えっ……」

手ごたえは、十分。

苦悶の呻きを漏らし……走る勢いそのままに、男は二、三步たたらを踏んで、少女の後方に前のめりに倒れ込んだ。

きん……

抜き放ったときの超スピードとは対照的に、今度はゆっくりと刀を鞘に収めると、少女は倒れた食い逃げ男の方を振り返る。

「ありや？」

気付けば通りに行く人々は足を止め、少女と倒れた食い逃げ男の周りに群がり、呆氣にとられたような表情や、慄きの表情で少女の方を見つめていた。

「（いらん注目集めちまったみたいだな）」

「……だね。まあいいじゃんか」

見事獲物を仕留め上機嫌な少女は、ざわつき始める周囲にも気にすることなく呑気に呟いた。

しかし……

「ぎゃあああああああつ！！

ひつ……人殺しいiiiiiiiiっ！！」

こうして……時間は元に戻る。

その3

「だ〜から！ 私は人殺しじゃない、つつてんでしょ！
ちよつとは人の話を聞きなさいっての！」

「ひいひいひいっ！！

こ……こつち来んなっ！！」

何とか誤解を解こうと少女はがなり立てるが、脅える群集は一向に聞く耳持たない。

歩み寄ろうとすればするほど、捕まれば一巻の終わりとはかりに勢いよく後ずさって行く。

「だあああああつ、もうっ！！ 面倒臭いわねっ！！」

業を煮やした少女は頭をボリボリ掻きむしると、逃げ惑う群集の一人の胸倉を素早く引っ掴んだ。

そして、その眼前に刀を突き付ける。

「ぎゃあああああああつ！！

こ……殺されるっ！！」

「に……逃げて！ 早く逃げて！！」

「おい、役人はまだか！ 誰か早く役人を呼んでくれ！」

ますます大きくなる、周囲の騒ぎと混乱。

「落ち着いて、何もしないっての」

そんな群集などまるつきり無視し、先程とは打って変わって、彼らを落ち着けようと、少女は今度はやりわりした口調で語り掛けた。

「ほら、よく見て。この刀」

「え……？」

捕えられた男はしばらくギョツと目を固く閉じてガタガタと体を震わせていたが、いつまで経っても少女が襲って来ないと気付くと、恐る恐る目を開けた。

そして、言われるがままに目の前に突き付けられた刀をまじまじと見つめる。

「あ……あれ……？ 刃が……ない……」

「……何だって？」

男の呆けた表情が聞こえたのか……周りで騒いでいた群集たちの視線も、少女の持つ刀の刀身に集まった。

少女が手にする刀の、本来なら鋭利な形状をしているはずの刃部は丸く潰れていた。

こんな刀ではよっぽど強く叩き付けないかぎり、人は殺せない。

しかし、少女のか細い腕では、そんなことは常識的に考えて到底

不可能である。

その証拠に、少女の一撃をくらった男は倒れたままピクピクと体を痙攣させていた。

「ね？……もっとも、打撲が骨折くらいしてるかもしれないけどね」

ようやく誤解を解くことを出来た少女は再び刀を収めると、安堵の息をつきつつ、未だどよめいている群集に向けてパチツとウィンクして見せた。

その4

夕暮れ色に染まる空。

山間の街の日没は早い。

眼下には、既に一面朱色の世界が広がっていた。

「はあ~~~~」……………」

そんな景色を見つめつつ、狭い機内に大きな……大きな溜め息が漏れた。

食い逃げの男を倒した、あの後……少女は群集の中の誰かが呼んで来たらしい街の役人に必要以上に念入りに事情を説明し、失神した食い逃げ男を引き渡した。

「ご協力ありがとうございました。それでは、こちらが報奨金の一万リードになります」

「うっわ、安っ　！　冗談でしょ？」

役人の言葉と、受け取った報奨金の額に少女は愕然とする。

驚愕の表情を浮かべるとともに、あからさまに不満げな声が漏れ

た。

「いえ、一万リードです」

しかし、明らかに御堅い面構えをしている役人の言葉は変わらな
い。

表情一つ変えることなく、きっぱりと言いつ放たれた。

「……そんなもんなの？ これでも結構頑張ったのよ？」

「E級賞金首ゲリー・ジョーンズ。

犯歴は食い逃げばかりで十二件。被害総額は七六二 リード……。
賞金首としては最下級クラスですね。懸賞金が掛けられたのが不
思議なほどの軽犯罪者です。正直、最低額の一万リードでも報奨金
を支払うのは高いと思われます」

手元の手配書と捜査資料をパラパラとめくりつつ、役人は淡々と
した口調で言葉を並べていく。

要するに、正真正銘ただの小物だったわけである。

「そ……そんなあ……」

役人の言葉に完膚なきまでに叩きのめされた少女は、ガックリと
肩を落とした。

「等級によって懸賞金の上限は決められていますし、どちらにせ
よ増額は望めませんね。

重犯罪の増え続けている近年では、食い逃げくらいの軽犯罪はこ

の程度の額にしかありません。どうかご理解下さい」

人間世界の統治機関である世界政府によって定められた、犯罪者の階級制度。

罪種や犯罪の凶悪性によって階級は五段階に分けられ、上位階級になるにつれてその首に掛けられた懸賞金の額は上がるという。

最高位のA級ともなれば、その懸賞金の額はウン千万にもウン億にもなるらしい。

そんな事実を知っていただけに、少女の落胆も大きかった。

「どうせ狙われるのであれば、もっと上級の賞金首を狙われてみては？」

こんな田舎町にはそうそういないかもしれませんが、少し大きな街へいけば、D級……まれにC級の賞金首だって潜んでいます。

懸賞金を稼がれるんですしたらその方が確実ですよ。危険度は増しますが、その分報奨金の額もグンと上がりますし。役所まで一緒に来ていただければ、最新の指名手配リストを差し上げますよ」

「おあいにく様。私、賞金稼ぎじゃないの」

役人の言葉に、ようやく諦めのついた少女は受け取った報奨金を財布に収めつつあっさりと背を向けた。

「何でも屋、ルルカシエル。

犯罪者を相手にするような血生臭い争い事よりも、もっと庶民的なお悩み解決事を引き受ける方が好きなの。

役所でも手を焼くような困り事があつたら、何でも引き受けるか

ら、いつでも連絡してね」

その5

「はあああああ~~~~……。宛がハズれちゃったなあ……………」

狭い機内にこぼれ落ちる、大きな……大きな溜め息。

確かに……諦めはついていた。

ついてはいたが、ここ三日間の行動を振り返ってみると、やはり後悔の念だけが胸の中に蟠る。

操縦桿を気だるげに操るルルカから出て来るのは愚痴と溜め息ばかりであつた。

「あゝあ、所詮噂話なんて宛にならないわね。

それにしても、一万リードはないわよね。一万リードは。

三日も張り込んで、あんだだけ苦労したつてのに……………」

「何を落ち込んでんだ。だから最初に言っただじゃねーか。

食い逃げなんてシヨボイことするヤツが、大物賞金首なわけがねーってよ。

やつぱり、やめときゃよかったのに……………」

すると、意気消沈で落ち込むルルカの耳元で、またあの子供の声が聞こえた。

今度はちゃんと姿がある。

ルルカの右肩にちょこんと乗っているそれは…………小さく白い、も

こもことした毛の塊。

彼女の相棒で、おそらく世界で唯一人語を操ることができるネズミの『こんにやく』（ルルカ命名）である。

機内で二人っきりの今はちゃんと姿を現しているが、人前では、『喋ることがバレたら、サーカス団に売り飛ばされる！』と勝手に思い込み、ルルカの着ている白いパーカーのフードの中に隠れている。

ただ、普段姿を隠していることに安心しているのか、彼は人前でも平気でルルカに話し掛けくる。

そんな彼に対して、ルルカもバカ正直に受け答えしているため、独り言を喋っているように勘違いされることも多かった。

「だって、しょうがないじゃん。仕事は来ないし、お金はないし……」

「だからって、たまたま通りがかりで耳にただけの食い逃げなんて捕まえて、がつつり賞金がもらえるわけねーじゃんか。

もうちつとよく考えてから行動しろよな。行き当たりばったりにもほどがあるぜ」

「んああっ？！」

宛がハズれたせいでルルカの機嫌はとことん悪かった。

「文句ばかり言ってるんだったら、ここから命綱なしのスカイダイビングにでも挑戦してみる！？」あの一万リードがなかった

ら、『フライド・チキン』の燃料だって補給出来なかったんだからね！

大体あんた、いっつも横槍入れてばかりだけど、たまには仕事する私の身にもなってみてよね！」

ギロリッ、と鋭い眼光一閃。

ひいつ、と小さく悲鳴を上げ、こんにゃくはサッとフードの中に身を隠した。

……十五年前。

世界政府の科学者たちよって起こされた科学技術の飛躍的發展『技術革新』によって航空技術は劇的に発達した。

それまで地を這うことしか知らず、『空の国』に住まう者たちを羨むことしか出来なかった人々は、ずっと悲願であった大空を羽ばたく手段を手に入れた。

小型飛空船『エア・ライド』の発明に始まり、より大型の『エア・シップ』、戦闘用の『エア・バスター』、大型戦闘艦『バトル・シップ』と、次々に新しい飛空船が開発され、空の交通網は大いに賑わいを見せるようになった。

先程ルルカが口にした『フライド・チキン』というのは、彼女が十五の誕生日に母親に買ってもらい、現在操縦している自身のエア・

ライドにつけた愛称である。

『ニワトリが空を飛ぶなんて、ステキじゃない！』

……と、彼女はフライド・チキンとは『空飛ぶニワトリ』という
意味であると思い込んでいる。

「ででで……でもよ……、ルル力は賞金稼ぎなんかじゃないだろ
？」

剣だつて護身用程度に教わったもんだし……。
危険犯してまで楽に儲けるより、地道に本業でコツコツ稼いでい
った方が建設的だよ」

「でも先立つ物は必要よ。お金がなきゃ人探しだつてできやしな
いわ」

ビビりながらも指摘するこんにやくに、依然として機嫌の悪いル
ル力はぷうつと頬を膨らませた。

ただ、態度には怒りを滲ませてはいたが、ルル力は心のどこかで
彼の指摘を冷静に受け止めていた。

確かに、こんにやくの言うことも、もつともである。

彼女の剣は、自分自身を……そして、ほかの誰かを守るために教
わったものだ。

人を傷付けるため……ましてや金儲けの道具にするために教わっ
たものではない。

そのことはよく分かっていたが……彼女にはやらなければなら
ないことがある。

そのためには、何はともあれ最低限のお金が必要なのである。

だが……大空に飛び上がってから始めた何でも屋の仕事はなかな
か来ない。来たとしても、格安の依頼ばかり……。

思うようにはいかない現状に、彼女も葛藤と苛立ちを感じざるを
得ないでいた。

「あ……、見えて来たわよ。今日はこの辺りにしましょうか」

夕焼け色に染まる窓の外、眼下に小さな川が流れているのに気付
き、ルル力はとりあえず怒りを鎮め、ゆっくりとフライド・チキン
を降下させ始める。

「はあ~~~~……。今日も今日とてサバイバル生活か……」

「……文句言わないでよね。私だってたまにはあったかいベット
で寝てみたいわよ」

二人の口から揃って大きな、大きな溜め息が漏れた。

宿に泊まる持ち合わせなど、もちろんあるわけがない。

今夜は……いや、今夜も野宿である。

その6

肌身に刺さるような、冷たい風が肩を震わせる。

夕暮れ時ともなると、昼間の陽気はすっかり身を潜め、周囲には次第に肌寒い空気が立ち込め始めていた。

標高が高い山間の、しかも水辺ともなると、その寒さも尚更だった。

「あゝあ、結局今日も野宿かあ……」

河原の少し大きな石の上で丸くなり、呟くこんなにやくの口調は無気力そのものだった。

寒さにめげることなく、素足で川の中に入り水を汲むルル力の姿を、どうしてもよさそうにぼんやりと眺めている。

「そ……外で寝るよりまだマシでしょ！」

そんな彼をよそに、ガタガタと身を震わせながら声を荒げるルル力。

水中に浸かる両足の感覚は既がない。水を汲み終え一刻も早く陸に戻ろうとするが、足がいうことを聞かず、全身を紅潮させ悶えていた。

「くっそー！ この文明社会の中、なんだっておれたちはこんな過酷なサバイバル生活を強いられなきゃなんないんだ？」

「お……お金がないんだから……。我慢してよね……！
大体、あんたは何にもしてないでしょーが！」

ようやく……どうにか陸に帰ることが出来たルル力は、愚痴ばかりこぼすこんにやくに目をくれることもなく、タオルで足を乱暴に拭い始めた。

真っ赤になった足は完全に悴み、しばらく温めてからでないと歩くこともままならないだろう。

それでも仕方がない。朝夕の食事の準備、片付けや洗面等には水が必要不可欠なのである。必要最小限の量は確保しておかなければならない。

先程の街で買うという選択肢もあったのだが、エア・ライドの燃料補給や数日分の保存食を優先し買っていたら、手持ちのお金は一気に尽きてしまった。

幸い、この辺りの川はまだ文明に汚されることなく、清い状態を保っている。水は透通っているし、魚も住んでいる。飲料水として十分に利用できるだろう。

「あれ？」

……と、足を温めながらぼんやりと川の流れを眺めていたルル力の視界の片隅で、不意に何かきらりと輝いた。

視線の焦点をそちらに集めると、川岸の、先程ルル力が上がった場所で、キラキラと小さく淡い輝きを放つ物が映っているのが見え

た。

手を伸ばし、水の中に突っ込んでそれを拾い上げるルルカ。

「へえ、何これ！キレイな石！」

思わず声が漏れた。

上流の山の方から流れ着いて来たのか、ルルカが拾った小さな石はエメラルド色の淡い輝きを放つ、半透明の何とも珍しい石だった。それが夕焼け空の光を反射し、思わずうつとりと見とれてしまうほどの美しさを醸し出している。

「ねえ！見て見て、こんなにやく！キレイだと思わない？」

「キレイ？！キレイだって！！」

興奮気味に問い掛けるルルカの声を聞いた途端、ずっとダレていたこんにやくが、やおら勢いよく身を起こした。

そして、目をカツと見開いてキョロキョロと周囲を見回し始める。

「何だ何だ、こんな森の中に絶世の美女が現れたってのか？！どこだ？！どこにいるんだ、スイートマイハニー！！」

「……んなわけないでしょうが。石よ、石。ほら！」

一人で盛り上がるこんにやくに呆れた視線を送りつつ、ルルカは

自慢げに拾った石を見せつけた。

途端、

「……………っ！！！」

驚愕の表情を浮かべるとともに、絶句するこんにやく。

ルルカの持つ石を見つめたまま、まるで自分が石にでもなったかのように、ピクリとも動かなくなる。

「ど……………どうしたの？」

突然、明らかに様子のおかしくなったこんにやく見て、心配げに問い掛けるルルカ。

そんな彼女をよそに、こんにやくはやがてヨロヨロと石の上でふら付き始めると、ガツクリとその場に崩れ落ちた。

「はあああああああ……………」

何だよ何だよ……………。美女じゃねーじゃん。ただのゴミじゃん。大袈裟な言い方してくれちゃって……………。

お前、一体どこまでおれをガツカリさせりゃ気が済むんだよ……………」

「あ……………あっそう……………。そりゃ悪かったわね」

勝手に落ち込むこんにゃくに、ルルカはヒクヒクと頬を引き攣らせた。

「でも、本当にキレイな石ね。こんな石、見たことがないわ……。
もしかして……新種の宝石の原石か何かだったりして！」

「……はあ。おめでたいヤツ」

「……何ですって？」

「い……いや、あのその……おめでとう！……って言ったんだよ！」

新種の宝石ゲットおめでとう！」

「ふん……どうだか。」

……ま、いいわ。ふっふっふっふ……。もしもこれが本当に新種の宝石だったとしたら……宝石店に売り捌いて、夢の一獲千金間違いなし！」

う……うわ　　っ　　！！

「売り捌くつつつても、さっきの街に宝石店なんてありやしねえ

ぞ。

宝石店があるような都会に行くにゃ、相当飛ばねえと……」

だ……誰か　　っ　　！！

「そ……それもそうね……。燃料費を稼ぐためにも、また近くの街で仕事を探さないとね……」

た……た……たす……助けっ……

「……夢の一獲千金までの道のりは遠いな」

じふっ……。だ……誰か……　　！

「……ん？　こんにゃく、いま何か言った？」

「いや、言っ
てねえぞ」

「だ……誰か……助けてくれ　　っ　　！！」

『助けて　？』

はつきりと聞き取れたその言葉に声を八もらせ、二人揃って顔を
見合わせる。

弾かれたように声が聞こえた川の方を振り返ると、対岸との調度
中央付近で、勢いよくしぶく白い水飛沫。

そして……水飛沫の中で両手をバタバタさせてもがく、一人の男
の姿。

「た……助けてくれー　　！　　ぼっ……僕は泳げないんだー　　！！」

「げえっ　　！！」

ようやく異変に気付いたルルカは思わず声を上げた。

「何だよ、こんな寒いのに水泳なんかして。変わったヤツだなー」

「馬鹿ね　　！　　あれは溺れてる、っていうのよ　　！」

呑気に呟くこんにやくに対して、声を荒げる。

一体どういうわけで、こんな山奥の川で人が溺れているのか分か

らないが、今はそれどころではない。

川の中央付近の水深はかなり深い。溺れている男性の身長は判然としないが、少なくとも彼の足が着くような深さではないのだろう。激しく手足をバタつかせながら、必死で顔を水の上に上げようとしている。

水温の低さは彼女自身も体感済みだ。

さらに、川の流れはかなり早いときている。こうしているうちにも、男性の体力はどんどん奪われているだろうし、その体もみるみるうちに下流へと流されて行く。

「い……急いでフライド・チキンに戻るわよ！」

口調に緊迫感を漲らせながら立ち上がるルルカ。

……が、悴んだ足はまるでいうことを聞かず、盛大にその場にズッコケてしまった。

その7

幸い、フライド・チキンを停めていたのは、川岸からほど近い林の中だった。

本当は川辺に停めることができれば一番よかったのだが、川辺に敷き詰められた大小様々な砂利にそれを阻まれたのだ。

ルルカは未だ言うことを聞かない足を引きずりつつ、どうにかフライド・チキンまでたどり着く。

コクピットに飛び乗ると同時に、即座にエンジンを始動。

機体全体が、緩やかな振動とともに徐々に熱気を帯び始めた。

そして、

「行くわよ……！」

静かな気合いとともに、一気に操縦桿を倒す。

次の瞬間、轟音、暴風とともにフライド・チキンは大空へ舞い上がった。

朱の中に次第に闇色の混じり始めた空を、風切り音とともに疾走する。

そして、あっという間に先程の川へ。

「おい、いねえぞ」

「流されたのよ。どこに行ったのかな……」

しかし、先程の男性の姿は既にどこにもなかった。

ルルカは川の流れとともに、フライド・チキンを下流へ向ける。

最初に男性に気付いてから、こうして戻ってくるまでに、時間的にはほんの数分しか経っていないが、川の流れはかなり早い。

既にかなり下流の方まで流されてしまっているおそれがある。

それに、男性が一体どこから、どのくらい流されて来たのかは定かではないが、既に力尽き、沈んでしまったという可能性だってあるのだ。

フライド・チキンの高度を水面近くまで下げ、川底まで注意深く見回すルルカ。

仮に沈んでいたとしても、この短時間で引き上げることが出来れば、まだ助かる可能性はあるはずだ。

「こんにやく……あんたもちゃんと探してよ。美女じゃないからって、知らんぷりしないでよね」

「わ……分かってるよ！ おれだって、ふざけていいときといけないときの分別くらいつくわい！」

「そう。安心したわ。」

……って、あれ？」

不意に……、川を下りながらルル力は周囲の異変に気付いた。

水の流れる音が次第に大きくなってきているのだ。

……と同時に、胸の中に蟠る、激烈な嫌な予感。

「も……もしかして……」

青ざめた表情を浮かべつつ、視線を前方へと向けるルル力。

「な……何だよ……？ 何だってんだよ……？
いきなり変な声出すなよな……」

突然変わったルル力の口調に、不安げに表情を歪ませるこんにゃく。

どうやら、彼も認めたくはないその異変に気付きつつあるらしい。

ほんのちよつと前までのせせらぎの音が、徐々に……轟々とした爆音へと変貌していくのだ。

そして、彼女たちの予想していた光景が……最悪の光景が眼前に広がっていた。

川はそれ以上先には延びてはいなかった。

その代わり……川の終りに待ち受けていたのは、何もない、宙。
大量の水が荒々しく飛び散り、空に舞っていく。

『たっ……滝だあ つ ！！』

二人の口から揃って上がる、大絶叫。

そして……このときになってようやく見付けることが出来た。

滝の直前で白く上がる水飛沫、そしてその中にいる先程の男性の姿を。

「ル……ルルカ！」

「分かってる！」

下流へ向かって一直線にフライド・チキン飛ばすルルカ。

滝壺に吞まれてしまったら、もう完全にアウト。

男性の姿は未だ水面上にはあるが、滝壺との距離を考えればもう時間はない。

発見できたのは本当にギリギリのところだったといっていいだろう。

加速する翼が鋭い音を上げながら空を切る。

川の終焉は、もう目前。

フライド・チキンの飛行速度と、川の流れる速度。

双方を考えても、男性が滝壺に落ちるまでに間に合うかどうかは本当に紙一重だ。

ルルカは前傾に身を乗り出して、フライド・チキンの速度を更に上げる。

当初豆粒程度にしか見えなかった男性との距離が、みるみるうちに縮まっていく。

迫り来るエア・ライドの影に気付いたのか、男性も最後の力を振り絞って水上の手をバタつかせ始めた。

もうあとほんの数メートル。

機体を傾けつつ、翼が水面に接着せんばかりに高度を下げるともに、ルルカはハッチを勢いよく開く。

ベルトを外し、機体の外に身を乗り出して、すぐ目前まで迫った男性に思い切り手を伸ばした。

「くうっ……！」

しかし……もうあとほんの少し、届かない。ただでさえ安定して

いない機体の上から、必死でバタつかせる相手の手を掴むのはまさに至難の業だった。

だが、ルル力は諦めない。

どうにか男性の手を掴もうと、ピンと伸ばし切った指先にまで神経を集中させる。

幾度も繰り返される錯交。

そして……どうにかその手が、水中でもがき回る男性の手に触れた。

あと少しだ。

しかし、

「 つ ! ! !」

声なき叫び声が上がる。

ほんの一瞬……遅かった。

大量に飛び散る水飛沫とともに男の体が宙を舞った。

「お……お……落ちたぞっ ! もうダメだあっ !」

「まだよっ！」

ルル力は素早くハッチを閉じると、フライド・チキンを流れ落ちる滝と水平に急降下させる。

かなり大きな滝だった。滝壺からは、かなりの高さがある。

このまま落ちて滝壺に吞まれたら間違いなく命はないだろうが、この高さはむしろ好都合だった。

急降下するフライド・チキンはあっという間に落下する男性を追い抜き、その落下先に先回りする。

そして、機体を水面と水平に立て直すとともに手元のスイッチを操作し素早く後部ハッチを開いた。

次の瞬間、

どん！

間髪置かずに機体全体を震わせる大きな衝撃。それと同時に高度がガクンと落ちた。

危うくバランスを崩し、機体が転覆しそうになるのを、必死で操縦桿を操りどうにか堪えるルル力。

降下したフライド・チキンの腹部が、水面に触れた。滝から流れ落ちる水の急激な勢いに身を任せ、フライド・チキンは再び連なり始めた川を下り始める。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

極度の緊張感と集中力を酷使したルル力は、肩で息を切らせつつ、こんなにやくと顔を見合わせた。

一体どうなったのか……ここまで必死で駆け抜け、半ば放心状態にある彼女たちは、現状をすぐには理解できないでいた。

しかし……。

「い……いててて……」

後部座席から届く、弱々しい男性の声。

瞬間、顔を見合せたままの二人の表情がパッと輝いた。

「や……やったな、おい！」

「う……うん……。よかった……」

ようやく安堵したルル力から全身の力が抜け、そのままズルリとシートにずり落ちる。

どうやらギリギリのところの間合ったようである。

その8

「いやゝ、はっはっはっはっは。
助かったよ。どうもありがとう」

既にどつぷりと日の落ちた空の下、川辺で起こした焚火を囲み、ルルカの向かい側で全身タオルに包まれた男性は、炎で身を温めながら呑気に笑い声を漏らした。

そのケロリとした表情は、つい先程まで溺れて死にかけていた者の表情とはとても思えない。

あの冷たい水の中を、大声を上げながら流され続け、既にかなりの体力を消耗しているはずなのに……である。

「なあゝんか……思いの外ピンピンしてるわね」

「（あんだだけ流されてたから、もっと弱り切ってると思ってたのになあ……）」

そんな男性を前にしてルルカとこんにやくは困惑気味に顔を見合わせた。

救助したら、とにかく真っ先に街へ戻って病院に連れて行かなければ……と考えていただけに、思い切り肩すかしを喰らう形になってしまった。街へ戻る手間が省けたのはよかったが、ここまで元気な男の姿を見たら返って戸惑ってしまう。

「ええ。昔から体の丈夫さだけには自信があるんです。あ、でも

ただ単に丈夫なだけで、決して体を動かすのが得意だというわけはないんですが……」

そんなルル力たちの胸中をよそに、悪びれもせずに飄々とした様子で語る男。確かに、一見して殺しても死にそうにない強かさ……というか図々しさを持ち合わせていそうだな……とルル力は思った。

この調子だと、もしあの滝から落ちていても死んでいなかったかもしれない。

そう考えたら自分の行動はとんでもない徒労だったのではないか……という考えが一瞬脳裏に浮かぶが、そう思うと今日一日の疲れが一気にドツと溢れ出そうな気がしたので、ルル力は深く考えるのをやめることにした。

「ふーん、そう。ま……いいわ。

ところで、おっさん。一体何だってこんな人里離れた山中の川に流されてたわけ？」

「お……おっさん……。しっ、失礼な！　僕はこれでもまだ25歳ですよ！」

「あー、はいはい。分かった分かった。悪かったわよ、おにーさん。

……そういえば、まだ聞いてなかったけど、名前何ていうの？」

「そうか……まだ名乗っていなかったね」

言われて、男は思い出したかのように焚火の側に干していた鞆の中をゴソゴソと探り始め、そこから何かを取り出してルル力に差し

出した。

眉をひそめるルルカ。

びしょびしょに濡れた小さい紙片。そこには何か文字のようなものが書かれていた。

「インクが滲んでて全然読めないんだけど」

「名刺交換は社会人としての嗜みだから、一応ね。

僕の名前はアドル・レイナース。ここから少し離れたル　トリアという街の新聞社でジャーナリストをやっているんだ」

「へえ。ジャーナリストねえ」

ルルカはあまり興味もなさそうに気のない声を漏らした。

アドルと名乗った男を改めてマジマジと眺めてみる。

線の細い華奢な体付き、色白の肌、やさ顔に掛けた丸メガネがやけによく似合っている。確かにペンやカメラを持たせたら様になるかもしれない。ジャーナリストと言われたら彼によく似合いそうな職業である。

「私はルルカ・シエル。何でも屋よ」

「ほう……何でも屋ですか」

聞いてアドルは目を丸くした。その反応から察するに、どうやらルルカがアドルの素性を聞いて思い描いたときのものとは全く真逆

のイメージを抱いたらしい。

「もしかしてテンベスタ空師団の方ですか？」

「ううん、フリーの何でも屋よ」

アドルの問い掛けに、ルル力はやりわりと首を横に振った。

テンベスタ空師団……とは、言ってみれば空で起こった様々な困り事、厄介事を組織ぐるみで請け負い、商売とする何でも屋ギルドのようなものである。

エア・ライドの操縦と簡単なテストに合格することさえ出来れば誰にでも入ることの出来る組織であり、確かに需要も多く仕事も安定しているため、世間一般で何でも屋といえば、まずこのテンベスタ空師団を思い浮かべるだろう。

だが、世界各地に支部を持つテンベスタ空師団は細かい規則や活動範囲に縛りがあり、その行動が大きく制約されてしまうという面もあるので、どちらかといえば自由気ままに空を飛びながら仕事をしたい……という気持ちの強いルル力は属していなかった。

「へえ、フリーの……」

珍しいものを見たかのように声を漏らすアドル。テンベスタ空師団が空軍や空賊と並び、空の一大勢力として君臨する今の時代、確かにルル力のようなフリーの何でも屋というのは珍しいかもしれない。

やおらアドルはキョロキョロと周囲を見渡し始める。そして目ざとく保存食や溜め置きの水等のサバイバル・セットを発見した。

「そうか……だから宿に泊まるお金がないほど貧乏なのか」

「あん？！ 何ですって？」

「いえ、組織に捕らわれることなくご自分の信念の下に行動してらしてご立派だと言ったのです」

「……………」

ボソリ……とアドルが口にした呟きをルルカは聞き逃さなかったが、無駄にキリツとした表情を浮かべ、アドルは真つ向からそれを否定した。その自信満々な態度を前に、ルルカは閉口せざるを得なかった。

「（なあゝんか胡散臭そうな兄ちゃんだな…………）」

フードの中からコソツとルルカに耳打ちをするこんにやく。

何だか面倒臭そうな人物と関わり合いになってしまったなあ……と思うと、先程押し殺したはずの今日一日の疲れが再びドツと吹き出してきたそうであった。

「あ、そうだ！ そういえばルルカさん、お食事はもうお済みですか？ よろしかったら、助けていただいたお礼に夕食でも御馳走したいんですが…………」

「ほつ、本当？！」

突然の、思いがけないアドルの提案。

瞬間、吹き出しそうになった疲れのことなどすっかり忘れて、両の瞳を目いっぱい輝かせ始めるルルカ。

忘れてしまいそうになっただけだが、仮にもこちらは彼を助けた命の恩人なのである。本来それくらいのお礼をされてもおかしくないはずだ。

「だったらお勧めのレストランがあるんだけど……」

目をキラキラとさせながら、何でも屋を始めてから密かに作成し続けていた『一度は行ってみたい三ツ星レストランガイド』のページをめくり始めるルルカ。

お礼をしてくれる……というのなら、どうせなら自分では絶対に行きこのできない高級レストランを選んだ方がいいに決まっている。この機会を逃したら、もしかしたら一生行くことが出来ないかもしれないのだ。

少し……というか、大分厚かましいような気もしたが、何せこちらが命の恩人なのだ。ちょっとくらい強欲に出てもバチは当たらないはずである。

「ここぞとばかりにたかる気だな……」

超一流の高級レストランばかりが記されているノートのページを、すっかり浮かれ気分でめくるルルカの姿を見て、こんなにやくはあきれ顔で呟いた。

その9

「なあ〜んだよ、お嬢ちゃん。別に客として来なくても、あなたのことはちゃ〜んともてなしてやろうと思ってたのによお！」

「そうですね！ あなたはこの店の……いや、この商店街の英雄なんですから！」

「もちろんお代なんていらないよ。心配しなくても、あんたには『あの野郎』が食った山菜定食みたいな安っぽい飯は出さないからさ！ 料理長特製のディナーを、た〜んと食って行ってくれ！」

「……………」

ルルカは不機嫌だった。

仏頂面で、淡々とこのレストラン最高級ディナー『川魚定食DXセット』を口に運ぶ。

一体何がDXなのかというと……普通の定食ならばレイクトラウトのフリットが三つしか入っていないが、DXには倍の六つ入っている、さらにデザートには『料理長手作りの男プリン』、おまけに食後にはサービスの『料理長自家製ほうじ茶』までついて来る。

『これをDXと言わずに何と云う！』

……とは、二人分の定食を運んで来たとき、ここの料理長が力の

限り叫んでいた台詞である。

「いや……よかったですね、ルルカさん！川で財布を流されていたことに気付いたときにはどうしようかと思いましたが……。タダでこんなに豪華な食事にありつけるなんて、ラッキーとしか言いようがありませんよ！」

……ところで、ルルカさん。この店の店員さんたちと親しいようですが……面識がありませんか？」

「……別に」

無駄にテンションを上げているアドルに冷めた視線を送りつつ、ルルカは素っ気なく答えた。

黙々とナイフとフォークを動かし続ける。

「……………」

「……………」

「……………」

「ぬあああああああああああつ　　！！！」

しかし、ついに耐え切れずテーブルに突っ伏して頭を掻き篁り始めた。

こんなはずではなかった。

途中でエア・ライドが不調さえ起こさなければ……アドルの財布が流されてさえないなければ、今頃きつと超一流レストランの最高級デイナーを口に行っているはずだったのだ。

アドルを助けるため、あの短時間で猛疾走したフライド・チキンの機体には予想以上の負担が掛かっていたらしい。

エンジンから黒い煙が上がっていることに気付き、昼間の街までどうにか戻って来たときには、既に街唯一のエア・ライドシヨップもシャッターを下ろすほどの真夜中になっていた。

修理が出来なければ、超一流レストランのある街まで飛ぶことは出来ない……と、泣く泣くこの街のレストランで手を打とうと腹を括ったのはいいが……。

適当な店を見付けて入ろうとしたまさにその直前、夕食を奢ってくれるはずのアドルがいきなり、

『さ……財布が……！　　ば……僕のなけなしのお金が入った財布がないっ　　！！』

などと騒ぎ出したのである。

どうやらずっとズボンのポケットの中に入れていたらしいのだが……あの激流に揉まれたのでは流されていて当然である。気付くのが遅すぎた。

ルルカもどうにか絞り出さえすれば多少のお金はあったのだが、エア・ライドの修理のことを考えれば、とてもではないが夕食代に回すことなど出来ない。

そんなわけで、二人と一匹して大通りのど真ん中で完全に途方に暮れていたところ……いきなりどこかの店の従業員と思しき男性に声を掛けられた。

その男性というのが、昼間ルルカが捕まえた食い逃げ犯の被害にあったレストランの従業員で、多くを語らずして事情を察してくれ、

店に招いてくれた……というわけである。

九死に一生……という気分であつたが、腹の中が完全に超高級レストランのディナーを食べるモードにセッティングされていたルル力は、すぐには気持ちを切り替えることが出来なかつた。

「うゝん……美味しい！特にこのフリットなんて最高ですよ！タダで食べる食事はどんなに安い食材でも美味しく感じてしまつから不思議ですよね」

「……ちよつと黙つて食べてくれない？そんなに騒がれたんじゃ、折角の美味しい料理も全然味わえないわよドクショ」

人の気も知らずに大はしゃぎで定食を貪るアドルにこめかみを引き攣らせるルル力。

「おっと、これは失礼しました。二日ぶりにまともな食事にありついたもので、つい……」

「……………」

ここに来るまでに何となく予想はついていたが、どうやら彼もかなり貧乏なようである。

エア・ライドも使わず、一人でこんな山間の街にまでやって来たのだというのだから、それも納得である。

これでは最初から期待する方が馬鹿らしかった……と、ルル力は大きな、大きな溜め息をつきつつ、再びナイフとフォークを動かし始める。

「ところで、ルルカさん。僕がこうしてないお金をはたこうとしてまでルルカさんをお食事に誘ったのは、お礼……というのももちろんですが、実はもう一つお願いがあるからなんです」

「お願いい？」

突然のアドルの発言にナイフとフォークを動かす手を止め、あからさまに胡散臭いものを見る目をしてアドルを見つめるルルカ。

命の恩人に対してお願い……というのも随分厚かましいなあ、と一瞬思ったが……。

すぐに違うと分かった。

「ええ。実はですね、僕がこうしてルートリアからこんな山中のド田舎村まで来たのは理由があるからなんです」

「ち……ちよつと、そんな大きな声で……！　お店の人こつち睨んでるじゃん！」

アドルの無神経な発言にルルカは慌てて店員たちの顔を窺うが、彼はお構いなしに話を続ける。

「これを見て下さい」

言ってテーブルの上に取り出したのは、一枚の写真。

これまた名刺と同様びしょびしょに濡れてしまっているが、今度はい体何なのか判別することが出来た。

写真一面に写された、白一色。

雲を写したものである。

しかし……。

「……何これ？」

「僕が十日ほど前に撮影した『大皇雲』の写真です」

「いや……そりゃ見れば分かるけどさ……。だから何なの？」

「ここをよく見て下さい」

写真の一点を指差すアドル。一面白一色の写真に特別注視するべき点はないように思われたが……。

ルルカは眉間に皺を寄せつつ、写真に顔を近付ける。

「何か影になってるわね」

「ええ、そうなんです！」

「……だから何？」

「えええええつ　！！？　ルルカさん、まだ分からないんですか　！？」

ひくつ……

やたら仰々しく声を上げるアドル。本人にそのつもりはないのだろうが、まるで小馬鹿にしたようなそのリアクションに、ルルカの額にくつきりと一筋の青筋が浮かんだ。

どうやら彼には、人に気を使ったり、空気を読んだりする神経はないらしい。

まさに『無神経人間』……とっていいだろう。自覚がなさそうなのが厄介なところである。

「世界最大種の大雲『大皇雲』といえは人の手が及ばぬ遙か天空の果てに位置する神聖不可侵の領域……」。

数々の伝承、伝説が残り、多くの謎を秘めた未知の世界です。

その大皇雲の中に垣間見える、謎の影……

果たして、その影の正体は何なのか……大皇雲の中に、一体何が隠されているのか……

いいですか　？　僕はジャーナリストです。

もしもこの影の正体突き止めることが出来れば、まさにビッグスクープになると思いませんか　？」

「ふ、ふん……」

やたら熱弁を振うアドルに対して、ルルカは写真を見つめながら気のない声を漏らした。

「……要するに、あんたのお願いって、この影の正体を突き止めるを手伝ってほしいわけね？ 何でも屋である私への仕事依頼として」

「その通りです！」

ようやく理解したルルカに、アドルは満足げに頷いた。

「僕に扱えるエア・ライドさえあれば、こんなお願いをしなくてもよかったんですが……」。

うちの会社にもちゃんと取材用のエア・ライドがあるんですけど、どうも僕のワイルドな操縦にエア・ライドの方が耐えられなかったのか、ここ一週間で三機も壊してしまって……社長から搭乗禁止処分を喰らってしまったんです」

「……………」

「（お……おい、フライド・チキンが故障したのって、こいつのせいなんじゃ……）」

「さ……さすがにそんなことはない、って信じたいけど……」

慌てて耳打ちするこんにやくに、極力冷静を装いつつ返すルルカ。

機械と極端に相性の悪い人間はたまにいるが、アドルが乗っていたのはフライド・チキンの後部座席。いくらなんでもエンジンにまでは干渉できないはずである。

……どちらにせよ、フライド・チキンが不調を起こしたのはアドルを助けるためだったのだから、彼のせいで故障したと言えなくも

なかったが。

「ですが、エア・ライドが無ければまともに取材活動も出来ません！ 今日少しでも大皇雲に近付こうと山登りの最中、うっかり足を滑らせて川に流されてしまつて、改めてそのことを痛感しました」

「げっ！ …… ってことは、あんた山の方から流されて来たつてわけ？！」

「ええ、そうですが？」

「一体どんだけ流されて来たのよ……。普通の人だったら完全に死んでるわよ？」

「（……こいつはやっぱり滝から落ちても死んでなかったかもしれねえな）」

「……助けたのは大失敗だったわね」

「え、何か言いましたか？」

「う……ううん、何でもない！

……で、何だっけ？」

「はい。ですので、お願いします！ 僕と一緒に目指してほしいんです。

大皇雲の連なりによって出来る未知の領域、『白嶺海』を……」

「あ……そうだったわね。

うーん、どうしよっかな……」

ルルカは頭を悩ませる。

確かに面白そうである。

面白そうではあるが、アドルと一緒にいたらとにかく疲労が溜まっていきそうである。

それに、アドルが支払う報酬にはあまり期待できそうにない。

正直言って、この依頼、得より損の方が大きいであろうことは明白である。

しかし……。

アドルのバックには会社がある。それがいくらロートル会社だったとしても、一個人に支払うだけの一端の財産はあるはずである。

仕事に成功して本当にビッグスクープを得ることが出来れば、それこそ一攫千金も夢ではない。

ルルカはニンマリと意地悪げにほくそ笑んだ。

「……よっしゃ！　いいわ。その依頼、引き受けてあげる！」

その10

閉店時間が近付きつつあるのか、店員たちは厨房の掃除を始めている。

店内に残された客はルルカとアドル以外には見当たらないが、店員たちは二人を急かすような様子もない。

二人でお茶を啜りつつ、まったりとした時間を過ごす。

「……てかさ、その写真一体どこで撮ったの？」

「あ、これですか？ これは先日、夕焼け島トワイライト・アイランドへ慰安旅行に行ったときに撮ったものです。

エア・シップに乗っているときに、たまたま上空に大皇雲が現れたんで、珍しいものだし、つい……ね」

「ふん」

一瞬ルルカは、普段からカメラを持ち歩くななんて見掛けによらず仕事熱心なんだなと感心するが、よくよく考えてみれば旅行にカメラを持って行くのは当たり前のことである。

一瞬でも感心して損をした……と考えを改める。

「ところで、ルルカさん」

「ん、なに？」

「ルルカさんは一体なぜ何でも屋になつたんですか？」

突然の何気ない質問に、ルルカはキョトンとした表情を浮かべた。

思い返してみれば、依頼人から改めてそんなことを聞かれるのは初めてである。

確かに、自由主義集団である空師団テンベスタの一員というのならともかく、こんな年端もいかない少女がフリーで何でも屋をしているとなれば、何かワケありなんだろうと理由を聞きたくもなるだろう。

ルルカはポリポリと後ろ頭を掻きながら、

「あー……、うん。基本的に親が放任主義だったから、早く一人立ちしたかった……っていうのもあるんだけど……。ちよっと人探しをするために……ね」

「人探し……ですか」

「うん」

椅子にもたれ掛り、ルルカは遠い目をして宙を仰ぐ。

「実はね……お父さんを探してるんだ」

追憶の中に父の……そして家族の顔が浮かんだ。

「私がすごく小さい時にいなくなっちゃったんだよね……」。

それまでは私と、お父さん、お母さん、それから弟の家族四人で普通に暮らしてただけど、ある日突然……本当にいきなり、ね。

一体どうしていなくなっちゃったのかは分からないんだ。小さいときのことだったから、その当時の記憶も曖昧だしね……。

あ、でも母さんと離婚したんじゃないっていうのは確かよ。母さんも必死でお父さんのことを探し回ってるんだから。

だけど母さんも、近所の人も、誰もお父さんがなくなった理由を知ってる人はいないみたい……。

どこに行っちゃったのか、手がかりだって何もなかったんだけど……でもやっぱり大切な家族だし、この世界のどこかにいるんだって思ったら、居ても立ってもいらなくなっちゃって……ね」

「それで、何でも屋をしながら世界中を探してらっしゃる……と
ういわけですか」

「そ。だから活動範囲に縛りがある空師団テンベスタには所属してないって
わけ。分かってくれた？」

「ええ……」

ずっと黙ってルル力の話に耳を傾けていたアドルは、深く、深く
頷いた。

「いや、ご立派です！ お若いのにそんなに固い決意と志を持
ってらっしゃるだなんて……」。

そうだ！ 今回の報酬は、新聞の尋ね人欄にお父さんのことを

掲載する……とういのはどうでしょう？」

「現金以外は許さん　！！」

その11

『ルル力はもうお姉ちゃんなんだから、ちゃんと守ってあげなきゃいけないんだよ』

のこ

最後に父と交わした言葉は……そんな会話だった。

あれは……もう何年前の出来事だっただろう。

十年以上前のことか……、数日前か……はたまた夢の中での出来事であったか……。

記憶がはつきりとしていなかった。

心が……。

体が……。

その出来事について触れることを頑なに拒んでいた。

ただはつきりと覚えていることは、自分の腕の中で震える小さな男の子の存在と……、目の前に佇む男の、蛇のように邪悪に歪んだ笑みだけである。

そっちへ行っちゃダメ！

あのときの自分は、そう叫んでいたのだろうか。

いや……もしかしたら、恐怖に声を出すことを邪魔され、叫ぶことなど出来なかったかもしれない。

いつの間にか自分の側から遠く離れてしまっていた男の子の前に、あの蛇のような笑みを浮かべた男が立ち塞がっていた。

その左手に……ギラリと鈍い輝きを放つ凶刃を携えて。

気付いたときには、何も考えず、ただひたすら必死になって走っていた。

男の子を助けようと、無我夢中になって手を伸ばす。

たが……その手が届くことはなかった。

代わりに赤い飛沫が舞い、伸ばした手に降り注ぐ。

その体が宙に舞い、まるで映画のワンシーンをスローモーションで見ているかのように、ゆっくり……ゆっくりと、自分の目の前に落ち、転がる。

男の子の体から吹き出した赤い飛沫が、自分の体にも纏わり付いた。

どんなに声をかけても……どんなに泣き叫んでも……どんなに揺り動かしても……男の子の固く閉じられた両の瞳はもう決して開くことはなかった。

ただ……ただ、冷たい感触だけが手の中に残された。

そして……男は今度は自分の目の前に立ち塞がった。

男が湛える邪悪な笑みは、今度は間違いなく自分に向けられてい

た。

男と目が合う。

鋭い殺意を湛えた眼光に見据えられ、体中が凍り付く。

まるで蛇に睨まれた蛙のごとく、極限の恐怖に支配された体はピクリとも動かなかった。

振りかざされた凶刃が、眼前に迫り来る。

そのとき、意識はダークアウトしていた……。

その12

「はあっ……………はあっ……………はあっ……………」

激しい動悸とともにルルカの意識は覚醒した。

全身に嫌な汗を掻き、服がグツシヨリと濡れている。

鼓動が高鳴っていた。

胸の奥がいつもよりずっと早いペースでドクン……………ドクンと脈打っているのが分かった。

「……………」

それでも、窓に掛けた遮光カバーの隙間から挿す僅かな月明かりに安心感を覚え、現実に取り戻されると、少しだけ落ち着きが戻ってきた。

シートから身を起こしつつ、額の汗を拭い去る。

ふう……………と大きく息をつきつつ、遮光カバーを開け放つと、夜空には満天の星空が広がり、おぼろげな光がルルカの顔を青白く照らした。

「だ……………大丈夫か、ルルカ？ 汗びっしょりだぜ……………」

不意に、枕元で寝ていたはずのこんにゃくの声が届く。

どうやら起こしてしまったらしい。

「うん……、大丈夫。ちょっと……怖い夢を見ちゃったただけだから。」

「ごめんね、起こしちゃって……」

「……またあの夢か？」

「……………」

心配げに問い掛けるこんにゃく。

ルル力は静かに目を伏せた。

あるとき体験した、どんな悪夢よりも辛辣な現実。

それは十年以上経った今でさえ決してルル力を解き放つことなく、その心を束縛し続けている。

決して忘れることの出来ない……いや、忘れてはならない追憶。

そして……今でもはっきりと覚えている、遠い日の父との約束。

二つが折り重なって度々ルル力の夢の中に現れた。

その度いつも、深い……深い罪悪感と、自分自身に対する嫌悪感

に見舞われる……。

しかし……いつまでも暗い過去に捕われ続けて、後ろめたい気持ちにばかりなつてなどいられない。

ルルカは心配するこんやくに向けてパツと明るい表情をつくつてみせた。

「だあくいじょうぶだつて！ 多分ちよつと疲れてただけだから。」

ほら、今日一日ずっとバタバタしてたじゃない」

「うん……。まあ確かに近年稀に見る慌ただしさだったな……」

「でしょ？ だから変な夢なんて見ちゃったのよ。」

さ、くだらないこと気にしてないで、もう寝ましょ！ 時間がもったいないわ。

明日から仕事も始まるんだし、今日はしっかり休んでおかないかね」

言いながらルルカはシートに倒れ込み、何事もなかったかのように再びその瞳を閉じた。

:

:

遠い日の、忌まわしき現実。

あの日から……今日まで、ルル力は気丈に生きてきた。

決して弱みは見せないよう……涙など見せないように、心に強く誓って、大空を駆け巡って来た。

でなければ、過去を乗り越えることなど出来ない……。

父を見付け出し、再会することなど出来ない……と。

しかし……

「父さん……、ユーマ……」

再び深い眠りの中に落ちたルルカの頬に、無意識の中で一筋の雫がこぼれ落ちた。

その1

あの雲の中には、悠久の都が存在する。

あの雲の中には、空の女神リーアノンの使いである巨大な竜が棲息している。

大皇雲には、古くから様々な伝説、伝承が語り継がれてきた。

地上から完全に隔離された、遙か天空に悠然と浮かぶ雲、『大皇雲』。

世界最大種の大雲である。

この大空に存在するどんな雲より高い天に浮かび、どんな雲よりも大きく、分厚い雲。

一つでさえ一国の領土に比肩するのではないかというほど大きいのに、広いこの世界には、大皇雲が繋がり、重なり合って出来る大領域がある。

全世界に七か所存在するといわれる、大皇雲の連なりによって出来る不動の空域『白嶺海』。

開拓者たちによって初めて白嶺海が発見されたとき、その圧倒的な広さを見て、ある冒険者が言った一言が今でも残されている。

『大空に白い海が広がっている』

……と。

あまりに高く、決して人が足を踏み入れることの出来ない未開の地。

その中に一体何が隠されているのか……。

技術革新によって大空へと羽ばたく術を手に入れた人々は、躍起になってそれを探ろうとした。

しかし、初めて白嶺海の探索に出発したエア・シップは、その空域に進入した途端、圧倒的な質量をもつ巨大な雲の塊に押し潰され、敢え無く木端微塵に大破してしまった。

彼らは無断で空の女神の聖域に踏み入ろうとし、その逆鱗に触れた。

だから、命を落とした。

あそこに、人間は近付くことは出来ない……。

白嶺海は地上の人間たちから神聖、不可侵の領域とされ、大いに畏怖され、同時に敬われた。

そして……冒険者たちの間で密かに囁かれる、伝説がある。

未だ何者にも確認されることがない、第八の白嶺海が存在する……と。

白嶺海の中で最も大きく……最も高い場所にあるとされるもの。

それこそが、空の聖域『蒼雲宮』。

空の女神が住まうとされるその神聖な領域の存在を知る者は少ない。

その2

山間の町の日の入りは予想以上に早かった。

遮光カバーの隙間から差し込んで来る強い日差しのせいで、ルルカたちはいつもより早く目を覚ましていた。

結局宿に泊まるお金もなかったルルカたちは、町外れに停めていたフライド・チキンの中で眠りに就いた。

思えば何でも屋を始めてから、宿に泊まった回数よりもフライド・チキンの中で眠った回数の方が多いかもしれない。

おかげでシートの上で眠ることにすすっかり慣れ、途中で目が覚めてしまったもののぐっすり眠ることが出来た。

「おっはよ、アドル。」

昨日はちゃんと眠れた？」

いつものように保存食で朝食の準備をしていると、少し遅れて起床したアドルが眠気眼をこすりつつ近付いて来るのに気付き、声を掛けるルルカ。

まだ世間一般的な起床時間には少し早い。どうやら彼も山間の早い日の入りと強い日差しのせいで、早めに目が覚めてしまったらしい。

「ええ……。おはようございます、ルルカさん。」

念のため野外テントを持って来ていて正解でしたよ……。

いや……、本当に流されてなくてよかったです」

欠伸を噛み殺しつつアドルは言った。

基本的にエア・ライドは二人乗りの造りになっているから、後部座席で彼を寝かせる……という選択肢もあつたのだが、不慣れな人間には固いシートの上で眠るのはキツイだろうし、いくら前後部の座席が隔離されているとはいえ、男女が同じ機体の中で眠りに就くのも少し抵抗がある……。

だから、調度アドルも簡易テントを持っていたようだし、彼にはその中で眠ってもらうことにした。どうやらアドルも最初からそのつもりだったらしいが。

「それにしても……ルルカさんは本当にたくましいですね」

朝食を準備するルルカの隣にちょこんと腰を下ろし、感心したように呟くアドル。

近頃では男はもちろんのこと、若い女の子でも料理が出来ないという子が多いらしいが、そんな時分、限られた保存食で易々とサバイバル料理をするのだから、アドルが感嘆の声を漏らすのも無理もないことだろう。

「そう？　ま……この年で一人立ちしようと思ったら、色々知つとかなないと生きていけないしね」

保存食で作ったベイクドハムとチーズのサンドウィッチと、野菜シチュー。

それぞれを皿に盛り付けてアドルに差し出すルルカ。

「うーん……美味しそうなニオイだ！」

死ぬほどお腹が空いていると、多少美味しくない料理でも美味しく感じてしまうから不思議ですよね！」

「やっぱ返せ！」

「じ……冗談ですよ、冗談！ 勘弁してあげて下さい！」

……そうだ！ 今度ルルカさんのことを僕の新聞で紹介してあげますよ！」

今ときこんなサバイバル生活を送る少女なんて珍しいですからね」

「た……頼むからそれは勘弁してちょうだい」

もしもスクープが掴めなかったら、おそらくそのネタで誤魔化す気だろう。

本当に、抜け目がない……というか、図々しい……というか、転んでもただでは起きそうにない性格をしている。

怒りもすっかり失せたルルカは思い切り脱力した。

「……ま、いいわ。ご飯食べてフライド・チキンのエンジン直したら、早速出発よ。

そんなネタ使われたら、たまらないわ。さっさとビッグスクープ見付けに行きましょう」

その3

アドルから受けた依頼の内容は、とどのつまりは取り敢えず大皇雲に近付きたい……というものである。

ただ自分で近付くことは出来ないからルルカのエア・ライドで大皇雲を搜索、接近してもらい、調査をしたいらしい。

期限は三日。報酬は一日当たり五、 リード。

正直言って、ルルカにとっては楽な依頼だった。

彼がビッグスクープを得ることが出来るかどうかは置いておいて、大皇雲さえ見付けることが出来れば報酬は発生するのだから。

しかし、大皇雲はそこら辺に浮いていて、いつでも見られるようなものではない。先日アドルが言っていた通り、本当に珍しいものなのだ。

だから、どこにあるのかも分からない大皇雲を探すよりも、不動の領域である白嶺海を目指した方が手っ取り早い。

全世界に七か所存在すると言われる白嶺海は、不動の領域であるがため、その場所も明確に特定されている。

ただ、もちろん白嶺海の中に入る……などという大それたことは出来ない、というか不可能である。

その空域に進入すれば、圧倒的な質量をもつ雲塊に機体が押し潰

され、粉々になってしまふことは先人たちが経験済みだ。

だから、とりあえず白嶺海の下までやって来たら、適当にその周辺をグルグル飛び回ってみるつもりである。

白嶺海はとにかく広い。とてもではないが、二日三日でその範囲を掌握できるものではない。

だが期限である三日間目いっぱい飛び続けていれば、スクープは発見できなくてもさすがにアドルも納得するだろう。

こうして晴れて依頼終了……というわけである。

ただ、ビッグスクープがなかったときの代わりのネタとして自分のサバイバル生活のことを載せられることだけは断固阻止しなければならないが。

「うーん……やっぱり空は気持ちいいわね！」

蒼天の下、フライド・チキンを操縦するルル力は上機嫌に呟いた。

久し振りのまともな仕事依頼。しかも内容は楽勝。

報酬は安いが、仕事内容には見合うだけのものである。

さらに、期限である三日分の宿泊代、飲食代、さらにフライド・チキンの整備代は、死闘の末相手持ちということで話をまとめた。

これで心おきなく空の旅を満喫できるというものである。

話がまとまったとき、アドルは泣いていたが。

「でもよ、よかったな。フライド・チキンの故障も大したことなくてよ」

フードの中からこんにゃくがひょこつと顔を出してくる。

アドルが側にいるときは、ずっと姿を隠していたから、こうして面と向かってまもちに会話するのは何だか久しぶりのような気がした。

後部座席にはアドルが座っているが、伝声管を繋がない限りこちらの会話が届くことはないから、こうしてフライド・チキンを操縦している間は気兼ねなく彼とも会話することが出来る。

「うん、そうね。こうして直せたのも、ひとえに私の整備技術の賜物ね！」

ルルカが上機嫌だったのは、お金なしでフライド・チキンを直すことができたから……というのもあった。

朝食後、町のエア・ライドショップまで行き、エンジンの不調を伝えたのだが、どうやら単純な整備不良が原因だったようで、大した故障ではないことが判明した。

だから、これまでずっと一人でエア・ライドでの旅を続け来て、ルルカも機体やエンジン周りの簡単な整備くらいは自分でも出来るようになっていたため、修理道具だけ借りてどうにか自力で直すことができた。

もちろん修理代は掛かっていない。もしも発生していたときは修理代はアドルにせびるつもりであったが。

「工場のおっちゃん、まめに整備しねーからエンジン不調起こしたりするんだって言ってたぞ」

「う……うっさいわね！ これからはちゃんとするってば」

「ほんとかなあ。ルルカ、飽きっぽいからなあ。果たしていつまで続くことやら……」

「失礼ね。仕事と生活に関わることなんだから、ちゃんと続けていくわよ」

『ルルカさん。今からどこを目指すんですか？』

すると、不意に伝声管を通して後部座席のアドルの声が伝わってきた。こんなにやくは慌てて声を潜める。

「あ、そういえばまだちゃんと説明してなかったわね。

取り敢えず、ここから一番近くにある北の白嶺海を目指して飛んでるんだけど……。その前に一旦『ターミナル』へ寄ろうと思ってるわ」

『ターミナルへ？』

「そ。これから三日間一文無しで旅なんて出来ないでしょ？
大きな街へ行くのもありだけど、ちよつとでも早く白嶺海へ行こうと思つたら、空を飛び続けて行った方がいいかなって思つてね」

『なるほど。確かにそれもそうですね。』

でもそうになると、ターミナルへ寄る用件というのは……』

「そ。アドルにお金を下ろしてもらうため」

『……ですよね』

伝声管からアドルの涙交じりの声が響いた。

その4

雲一つない晴天の空の下を、フライド・チキンが快調に飛び続ける。

眼下にはしばらくは長閑な街並みが広がっていたが、やがてそこを通り過ぎると殺風景な荒野が現れ始めてきた。

荒野一帯に広がる、大小様々なクレーターや、エア・バスター、バトル・シップの無残な残骸の数々。

一年前に終結を迎えたヴァングレイド戦争の遺物である。

この世界では幾度となく凄惨な争いが繰り返されてきた。

最初の戦争が起こったのは……いつだったろうか。確かそれは時すら忘れるほど大昔の出来事だった。

この世界の歴史は……血塗られた戦い、憎しみ深き戦争の歴史である。

世界には、ルルカたち人間のほかに、同じような知的生物が存在していた。

人間とは似て非なる、異形の姿を持つ者……『亜人』。

古くには人間と亜人の両種族は争うことなく共生の道を歩んで来ていたらしいのだが、所詮は異種族。最初から相容れることなど出来なかった。

小さな争いは、やがて大きな争いへ。

人間と亜人は長きに渡り争いを繰り返してきた。

それは何十年にも、何百年にも及んだ。

ある戦いでは人間が有利に戦局を進め、またある戦いでは亜人が勝利を収め……。

果たして、この戦いが本当に終焉を迎えることなどあるのだろうか……。

あるいは、どちらかの種族が減びるまで戦いは繰り返され続けるのかもしれない。

人間国家と亜人国家の調度中間付近に位置する領域『ヴァングレイド』で起こった、もう何度目になるのか数えるのも馬鹿らしくな

る戦争は、一年前にようやく終焉を迎えた。

終焉……といっても、一時的に休戦しただけで、完全に両種族の争いが消えたというわけではない。

本当に……本当にたくさんの尊い命が失われた。

家や故郷をなくした者……家族を亡くした者……そして、命を失った者……。

悲しい思いをした人たちはたくさんいる。

それは人間だけに限らず、亜人もまた然りであった。

今でも両種族間の差別感情は残り、深い憎しみは募り続けている。

戦争を知らぬ者……真の平和の意味を知っている者など、この世界には存在しないのかもしれない……。

その6

「はぁぁぁぁぁ……。
たまにはこんなまつたりタイムも必要よね……」

運ばれてきたアイス・カフェオレをストローで啜りつつ、リラックスマードのルルカはフウッフツと大きく息をつく。

喫茶店内には空調から流れ出る冷気がほどよく立ち込めている。

所々に設置された観葉植物の緑が旅に疲れた目に潤いを与え、優美でしつとりとしたクラシックBGMが心に安らぎを与えてくれた。

カラン……というグラスと氷がぶつかり合う涼しげな音が耳に心地よく響く。

「（よく言うぜ……。これが基本おれたちの日常じゃねーか。
昨日の昼までずう……っと喫茶店でダラダラしてたのを、もう忘れたってのか？）」

すっかりだらけているルルカに、じとじとした視線を送りつつ、
こんにゃくは呟いた。

しかし、かく言う彼もテーブルの隅っこで必死になってチーズを
頬張っている。

人目に触れる危険を冒してまでこんにゃくが人前に姿を現すのは、
大好物のチーズを食べるときか、大好きな美女を眺めるときのどちらかのみ。

口では悪態を付きながらも、大好物のチーズを口に運ぶその表情は上機嫌であること明らかであった。

「あら、あれは仕事だよ。食い逃げ犯を捕まえるために張り込んでたんだもん。」

これは休憩中。全然心の安らぎ度が違うわよ」

「（……ものは言い様だな。」

……てかさ、ルルカ。ここの勘定だけどよ、まさかあのに ちゃんに任せようだなんて考えてねーだろうな…… ？」

「あつれー？ 昨日そういう話になったじゃん。まさかこんなに、聞いてなかったの？」

「（聞いてたけど……やっぱお前がめついよ）」

「失礼ね。たかだかカフェオレー杯とチーズ一切れ頼んだだけで、そこまで言わないでよね。本当にがめつかったら、ここのメニュー端から端まで頼んでるわよ」

「（……やるなよ。頼むから）」

「分かってるって。それくらいの常識あるわよ。食べ切れないし。それよりも……うふふふふ、今日の晩御飯が楽しみね」

言いながらルルカは、昨日栞を挟んでおいた『一度は行ってみたい三ツ星レストランガイド』を再びめくり始める。

昨日は結局フライド・チキンが不調を起こしたのと、アドルが財

布を落としたせいで超一流レストランの高級ディナーは涙を吞む結果となってしまうが、今日はその失敗要素を全てクリアしている。ルルカと超一 レストランとの間を阻む物は何もないはずである。

妄想を膨らませ、じゅるりと口元の涎を拭い去るルルカ。

しかしそのとき、

ギイイイイイイイイイイイイイイイッ ! ! ! !

「ぶうづづづづづづづづづ ! !」

「ぎゃああああああああっ ! !
きったねええええええええ ! ! 何しやがんだよ ! !」

ルルカが一気に吐き出したカフェオレを全身に浴びたこんにゃくは、すっかり茶ねずみになってしまっていた。

突然、店外から響いた、空を裂くような鋭い大高音。

一体何が起ったのか……店外では、戸惑い悲鳴を上げている者、我先に逃げようとする者、ごった返していた人々は完全にパニック状態に陥っていた。

そんな店の外の様子を見て、喫茶店内の客たちも次第に戸惑い、ざわめき始めている。

しかし……二人はそれどころではなかった。

「あ……あ……。わ……。私のカフェオレが……。
何てことしてくれんのよ！　もったいないじゃない！！」

「バカやるーっ！！　それはおれの台詞だっつーの！！
どうしてくれんだ！　おれの最大のチャームポイントの純白ボディが、すっかり茶こけちまつたじゃねーか！！」

大声でケンカを始めるルルカとこんにやく。

こんにやくもいつもは見せないような怒号を張り上げるが、店内の客たちが騒然として外の様子に注目していたおかげで、大声を上げる彼の存在にも気付かれなかったようである。

「だあーっ、もうしょうがないわね！　

おねーさん！　ちょっとおしほりもう一個持って来てくれない？」

大声を張り上げて、近くにいたウェイトレスのお姉さんと呼ぶるルルカ。

しかし、ウェイトレスお姉さんからの反応はない。ただただ愕然

として、外で起こった異常事態の状況に驚愕しているだけである。

このときになって、二人はようやく店外での異変に気付くことが出来た。

「……また食い逃げでも現れたのかな？」

「だったら無視よ。無視。関わっても、また徒労に終わるだけだわ」

「ま、明らかにそんな様子じゃなさそうだけどな」

「……やっぱそうよね」

ふう……と大きく一息。

ルル力は刀を携え席を立った。

「行くのか？」

「当然！　トラブルあるところに儲け話あり、ってね！」

「また徒労に終わりそうな気がプンプンするんだけど……」

こんなにやくの皮肉は聞こえない振りをしつつ、ルル力は戸惑うウエイトレスの一人に向かって、先程より大きな声を出して大きく手を上げた。

「おねえさん、お勘定！　私の連れに付けといてね！」

その7

ターミナル内はまさに騒然としていた。

パニックに陥り逃げ惑う人々が、圧倒的な人波となって押し寄せて来る。

そんな人海のうねりをどうにか避けつつ、ルルカは彼らの進行方向とは逆方向……騒ぎの中心へと向かう。

一体何が起きているのか……。人海が視覚を遮り、悲鳴や叫び声に耳を塞がれ、状況はまるで把握できなかった。

しかし、人々の悲鳴、叫び声に混じり聞こえる先程の大高音だけはハッキリと、進めば進むほど次第に大きく、大きくなってルルカの耳に届いてくる。

やがて、人海が収束を見せ始めた頃、全く不鮮明であった状況がようやく明らかになった。

そこには、ターミナルに常駐している空軍兵士が三人いた。

三人とも緊迫感を漲らせ、各々手にした銃剣を構えている。
パイオネット

そして……彼らの目の前には、騒ぎの原因と思われる、金色の翼

を持つ巨大な生物。

「（なんだあ　！！　あいつは　?!）」

「飛竜鳥　！　亜人世界にしか棲息していないはずの鳥だわ　！」

ルル力は声を上げた。

全身を着飾った金色の羽、頭に生えた竜を彷彿とさせるような二本の角、そして少し広げただけで目の前にいる三人の空兵を易々とを呑みこんでしまうのではないかというほど大きな両翼。

飛竜鳥。

間違いなく、亜人世界にしか棲息していないはずの鳥である。

おそらく群れからはぐれ彷徨った結果、人間世界の……こんなところにもまで迷い込んでしまったのだろっ。

かなり興奮状態にあるのか……。飛竜鳥は鋭い鳴き声を上げながら、その巨大な両翼を目いっぱい広げて、自分を取り囲む空兵たちを威嚇している。

緊張感を漲らせた空兵たちは、まさに構えた銃の引き金を引かん

としていた。

「やめてっ　！」

咄嗟だった。

状況を整理するよりも先に体が動いていた。

ルル力は全速力で両者の側まで駆け付けると、飛竜鳥を庇うようにその間に割って入る。

「そ……そこをどきなさい　！」

突然の、思わぬ妨害。

空兵の一人が戸惑いの声を上げる。しかし、その手に構えた銃剣の銃口は決して下ろさない。

「一体何故そんな生き物を庇うんだ　？！」

「飛竜鳥は人に危害を加えるような鳥じゃないわ　！　本来大人しい生き物のはずよ。何も殺すことないじゃない　！」

ルル力は必死で声を張り上げる。

いくら亜人世界の生物だからといって、人畜無害な生き物をむやみやたらに殺していいはずがない。それはただの殺戮行為だ。そんな行為を、黙って見過ごすことなどルル力には出来なかった。

しかし……空兵たちはまるで耳を貸す様子はない。

「確かにそうかもしれない……。だが、その巨体。翼を広げただけで施設内の人間を傷付ける恐れがある。動き回れば、誰かが命を落とす可能性も危ぶまれるんだ。傷付けるな……というのは無理な話だ。

それにな……」

そこで空兵は一旦言葉を切り、鋭い……憎しみすらこもった視線で飛竜鳥を睨み付けた。

「そいつは汚らわしい亜人どもと同じ空気を吸っているんだ。そんな生き物が我々と同じ空気を共有することなど……絶対に許されん！」

亜人に対する……徹底的な嫌悪巻。

「こいつ……」

ギリ……とルルカは奥歯を噛み締めた。理不尽な主張に、次第に沸々と怒りが込み上げて来る。

確かに……戦争に直接携わっていた彼らにとって、亜人は忌むべき敵。敵意があって当然である。

しかし……だからといって飛竜鳥にまでその敵意の眼差しを向けるのはお門違いのはずだ。

「（ややや……やめとけて、ルルカ！ 空兵相手じゃ色んな意味で分が悪過ぎるよ！）」

フードの中から、怒り心頭のルルカを必死で宥めるこんにやく。

刀に手を掛けようとしていたルルカはハッとする。

彼の言う通り、下手にここで抵抗してしまえば、悪者になるのは完全にルルカの方である。おそらく逃げ惑っていた人々も思考も、この空兵たちと同じものだろう。

こんにやくの一言のおかげでルルカも幾分か冷静さを取り戻すことが出来た。

刀に伸ばそうとしていた拳をギュッと握り締め、ゆっくりとその手を下ろす。

そのとき、

突然、周囲に吹き荒れる暴風。

天高く咆哮を上げ、飛竜鳥はその巨大な翼を大きく前後に動かし始めた。

飛び立つつもりだ。

側にいたルルカも、そして三人の空兵たちも、飛竜鳥の翼が生み出す旋風に耐えられず、膝を付き、必死で側の柱にしがみつく。

「さ……早くどきなさい！ そいつが動き回れば、君も危険だぞ！」

ますます口調を荒げ声を上げる空兵。

しかし、ルルカは聞き入れるつもりなどない。

業を煮やした、一番年長で上位階級者と思われる空兵が手を上げた。

「止むを得ん……。撃てっ！」

旋風に耐え、引き金に指を掛ける空兵たち。

刹那、

たんっ！

ルルカは風に乗り、壁際のガラス窓の方へと飛んだ。

手にした刀を、抜き放ちざまに鋭く一閃。

こっつ
！

ガラスが碎ける高い音とともに暴風が吹きすさび、周囲を引っかき回した。

飛竜鳥の翼から生み出される旋風よりも激しい暴風に弄ばれ、空兵たちは銃剣を手放し地を転がり回る。

「今よ　！　逃げなさい　！」

必死で声を張り上げるルル力。

その言葉の意味を理解しているはずはないが……恋しい空へと通ずる道を発見した飛竜鳥は、ガラス窓から開けられた大穴から、大空へと飛び立つて行った。

「な……何てことを……」

呆氣にとられた様子で呟く空兵たち。

突然のルル力の行動に彼らはまるで対応することが出来ず、ただただ茫然として、飛び去る飛竜鳥の背中を眺めるばかりであった。

「よっしゃ　！　それじゃ私たちもとつとと逃げるわよ　！」

刀を収めるや、猛ダッシュでその場から走り出すルルカ。

このままここにいたのでは、後始末が面倒臭い。空兵に捕まり散々説教されたあげく、ガラス窓の修理代だって支払う羽目になるだろう。

ようやく仕事をゲットして収入を得られそうだというのに、それでは全ての苦勞が水の泡……最悪赤字である。

途中、先程の喫茶店の前を通ると、アドルが困り顔でレジの清算しているところだった。

「アドル、行くわよ！」

「えっ？　えっ？　ええええっ　！！」

全く事情を把握していないアドルは突然の事態にただ戸惑うばかりであったが、置いて行かれるのは御免とばかりに、訳も分からぬまま空兵に追い掛けられるルルカの背に続いた。

その8

『いやあゝ感激だなあ　！　まさかこの目で本物の飛竜鳥見ることが出来るなんて……これは一生の思い出になりますよ　！』

伝声管から興奮気味のアドルの声と、カメラのシャッターを切りまくる音が聞こえて来る。

蒼天の下、悠然とその金色の両翼を広げて大空を羽ばたく飛竜鳥の姿は、確かに彼の興奮ぶりも頷けるほど壮大で幻想的であった。

大急ぎでフライド・チキンに戻り、ターミナルから脱出したルルカたちは、逃げた飛竜鳥の後を追ひ、その少し後方を飛ぶ。

追手は来ていないようだが、飛竜鳥がとりあえず人里離れた場所まで……そして亜人世界の方角までちゃんと飛んで行くまで心配で放っておくことが出来なかった。

「どう　？　これで一個スクープが出来たんじゃない　？」

伝声管の向こう側ですっかり上機嫌のアドルに対して問い掛けるルルカ。

『ええ　！　もし仮に白嶺海でスクープがゲット出来なくても、これでサバイバル少女の生活記を載せなくても済みそうですよ』

嬉々として声を弾ませながら言うアドルに、ひくっ……とルルカは頬を引き攣らせた。「冗談で言っているものとはかり思っていたが、どうやら完全に本気だったらしい。

『ですが、ルルカさん。一体どうして僕たちまで逃げなければならなかったんです？ とりあえず何も考えずに着いて来ちゃいましたけど……。空兵だって何やら後を追って来ていたみたいですし……』

「ん〜……。その辺は話したら少し長くなるから、また今度ね」

ルルカは伝声管の向こう側に適当な返答をする。

よくよく考えてみれば、あの場に残っていたのでは説教どころでは済まなかっただろう。

空兵たちの邪魔をした行為は下手をすれば公務執行妨害罪に該当するだろうし、ターミナルのガラスを破ったのは完全に器物損壊罪である。

そして、もしもお金を下ろしたアドルが間に合わずにあの喫茶店の勘定を払っていなかったら食い逃げまで成立してしまう。

やはりあの場合は『逃げる』という選択肢が最善の判断だった。アドルが少しでも遅れていたら、完全に置いて行かざるを得ない状況だったが。

……どちらにせよ、あのターミナルには当分の間近付くことは出来ないだろう。

「それにしてもよ……おいルルカ。いくらなんでも無茶すぎだよ。空兵に齒向かうなんて命知らずもいいとこだぜ」

ルルカとアドルとの会話が途切れたことを確認して、フードの中からニヨキツとこんにやくが這い出てきた。

何もしていないはずであるのに、その表情には気疲れからか若干の疲労の色が窺える。

「だって、しょうがないじゃん。あのまんまじゃ、あの飛竜鳥は間違いなく殺されてたんだもん」

そんなこんにやくの忠告に対して、ルルカは膨れたようにプイッとそっぽを向いた。

「だからって、そんなに体張ることかよ。

同じ人間だったら、ターミナルにいた人たちの命を守るためには仕方ない……っていうあの空兵たちの考え方だって分からなくもないんだけどなあ……」

難しい表情を浮かべて呟くこんにやく。

おそらく、あの空兵たちはもちろん、ターミナルで逃げ惑っていた人々のほとんどが、こんにやくと同じ考え方だっただろう。

大人しいとはいえ、あの巨体。しかも本来ならば人間世界に現れるはずのないイレギュラー因子、未知の不安要素を取り除こうとする考え方は必然だったのかもしれない。

しかし、それでも……

「命の重さに差なんてないの。同じ人間を守るためとはいえ、それ以外の生物を殺して当然だなんて考え方は……絶対に間違ってるわ。」

……例えそれが亜人相手だったとしてもね」

去り行く飛竜鳥の姿を見送りつつ、遠い目をして呟くルルカ。

その脳裏には、あの日の……あの悪夢の中の光景が、ぼんやりとおぼろげにフラッシュバックしていた。

その9

この世界の歴史は、憎しみ深き闘争の積み重ねにより、時を刻み続けてきた。

知を有する『賢き者』人間と、力を有する者『強き者』亜人。

全く異なる色を持つ両種族が争いを起こすのは、あるいは必然だったのかもしれない。

時すら忘れるほどの昔……両種族は互いに互いの欠点を補い合いながら助け合い、支え合って、ともに長い道のりを歩んできたらしい。

人間は亜人に『知恵』を与え、亜人は人間に『力』を貸し、両種族は絶妙なバランスを保ちながら共生していた。

そのときには争いなど何もなく、両者が種族間の差異を疎んじることなどまるでなかったのだ。

しかし、平和な時間は、時の流れとともにあっさりと崩れ落ちる

こととなる。

『知力』に長ける人間の進化は早く、次第に亜人の力を借りずとも、自らの欠点を補う術を見付けるようになったのだ。

そして、欠点を補う程度に身に付けたただけであった人間の『力』は、あつという間に亜人のそれに比肩するようになる。

小さな争いはこのときから始まった。

亜人の中には言葉を操ることもできない知能の低い種族も多い。

進化し、強大な『力』を身に付けた人間たちは、いつの間にか亜人たちが劣等種として位置付けるようになり、次第に彼らを奴隷のように酷使するようになったのだ。

そして、亜人たちもまた人間の力がいずれ自分たちにとって驚異になると考え、力付くでそれを擦じ伏せようとした。

小さな争いが、大きな争いへ変わるのにさして時間はかからなかった。

人間と、亜人。

両種族の……この世界の、長い……長い闘争の歴史は、こうして幕を開けることとなったのである。

時の流れとともに両種族の憎しみの炎はより大きく燃え上がり、戦火は時を経るごとに激しくなっていた。

「この戦争は必然だった」

激しい憎しみと、差別感情に狂った者が戦火の中残した、両種族の争いを象徴するかのような言葉が、皮肉にも全く相反する両種族間で唯一の共通の意識となっている。

争いを知らぬ人間など、この地上には存在しないのかもしれない。

そも10

「ふんふんふん、ふんふんふん」

街の大通りを歩くるルルカの足取りは軽かった。

群れから逸れた飛竜鳥が、亜人世界方向へ飛び去るのをきつちりと見届けた後、フライド・チキン是一直線に北の白嶺海へ……は向かわず、少し寄り道をしていた。

沿岸海園都市『レーヴェル』。

海を望む港街であるこの街は、大都会……とはいかないまでも、かなり大きな都市で、観光地としてもその名を馳せている。

海岸線は美しくアーチを描き、碧く透通る海はどこまでも広がり、昔ながらの帆船が悠然と泳ぐ……。

斜面に家々を敷き詰めるように建設された街は、細かく入り組んだ路地の多く、そんな街の大通りは旅行者など行き交う人々で賑わいを見せていた。

この街にルルカたちが立ち寄ったのは……もちろん、観光をするためなどではない。

ここにルルカが『一度は行ってみたい三ツ星レストランガイド』にチェックを付けていた高級レストラン『ブランドイーノ』がある

からである。今晚の夕食を食べるために、わざわざ寄り道をしたのだ。

公私混同も甚だしかったが、折角うまく契約をまとめることが出来たのだ。これを利用しない手はない。

「随分機嫌がよさそうですね、ルルカさん」

スキップ交じりの軽い足取りで大通りを行くルルカの後ろを、ちょちょことついて来るアドル。

まだ日は高く、レストラン『ブランディーノ』が開店する時間には少し早い。

そんなわけで二人は夕食まで街を散策してみることにした。

北の白嶺海へ到着しないうちに契約一日目が終わり、おまけに寄り道までしているというのに、アドルは怒ったり文句を言ったりする様子もなかった。貴重な飛竜鳥の写真をゲットすることが出来て、心に少しだけ余裕が生まれたのだろう。

ちよつとだけ寄り道を……というルルカの申し出を、快く承諾してくれた。

「うん。まあちよつと色々あってね」

今夜の夕食のことを想像して、すっかり上機嫌のルルカ。

こここの名産といったら、言うまでもなく海産物。

海鮮パスタに、アリーチのマリネ、魚介類をトマトやオリーブなどとともに白ワインで煮込んだアクアパッツアなど……美味しくいものも食べたいものも山ほどある。

想像ただけで口元に溢れ出る涎を抑えることが出来なかった。

しかし……、彼女の機嫌がいいのは、何も夕食のことを考えているからだけではなかった。

キラリ……と、ポケットの隙間から、淡いエメラルド色の光が零れる。

アドルを助けたあの日、山間の川の中で発見したあの石である。

あの日はバタバタしてしまったせいで、すっかり石のことを忘れてかけていたのだが、この石がもし本当に未知の宝石の原石ならば……きつと相当な高値がつくはずだ。

高ぶる期待を抑えきることができず、ルルカの足取りは自然と軽やかに、そして口元は完全にニヤけてしまっていた。

これだけ大きな街であれば、宝石店の一軒や二軒あるはずである。

夕食までの間、街を散策してみる……というのは名目で、ルルカは折角の観光名所にも目もくれず、宝石店を探して街中を徘徊していた。

やがて、ルルカの視界の遙か向こう側に、『Jewell Shop』の名を掲げた看板が映る。

「あつたあつた……」

ねえ、アドル。ちょっとあそこの宝石店に寄ってもいい？」

「宝石店……ですか」

急に猫なで声になるルルカに、アドルは警戒心を剥き出しにして、あからさまに胡散臭いものを見るジト……とした視線を送る。

「まっ……まさか、宝石まで僕にせびる気じゃないでしょうね……」
「？」

「んなことしないって。アドルはお店の外で待っていてくれればいいからっ！」

「そ……そうですか……？ それなら別に構いませんけど」

「んふふふふ、よっしゃ！ それじゃ行って来るわ！ 適当にその辺で待っててね」

ルルン気分で、スキップ混じりに宝石店の方へと走り出すルルカ。

「（おいルルカ……。あの石ころがほんとに宝石だったら、もうあの兄ちゃんにたかるの自粛しろよ？）」

「わっかつてるって」

こんなにやくの言葉も、浮かれ気分のルルカの右耳から入って左耳から抜けて行く。もはや彼女の視界には宝石店しか入っていないかった。

しかしそのとき、

「待ちやがれ、このクソじじい　！！」

「素直に待つ者などおるかっ、このボケどもめ　！！」

大通りの反対側から、怒声ともとれる叫び声が響いた。

間髪置かずに、宝石店の向こう側からこちらに向かって猛然と走って来る一人の老人と、何やら彼を追い掛けるように二人の男が姿を現す。

「何か騒ぎのようですね……」

後方から、物珍しげな口調で呟くアドルの声が聞こえる。

「（……おい、ルルカ）」

「……無視よ、無視。私の行く道は輝かしい未来に向かって一直

線に進行中なのよ」

こんなにやくが何かを言わんとして問い掛けてくるが、ルル力は両手で耳を塞ぎ、さらに老人たちから思い切り視線も背ける。

もし今ここで厄介事に関わってしまったら……宝石店どころかずっと切望していた高級レストランにも行けなくなってしまうかもしれない。

おまけに、またまた徒労に終わる可能性も大である。

しかし……。

そんな彼女の懸念をよそに、老人たちは大通りの人ごみを掻き分け、掻き分け、一直線にルル力たちの方へと向かって来る。

「無視、無視……」

両者の距離が十メートルを切る。

「ちよつと、別のお店を探そつか」

激烈に嫌な予感を覚え、反転しかけたそのとき

「お……おい、その娘　！　ちよいとこのわしを助けい　！」

背後からグイツ、と思い切り腕を掴まれた。

「あああああああつ　！！　もう嘘でしょ　！！！！」

一体何故こんなことになってしまふのか……。

嘆きの叫び声を上げつつ振り返ると、予想通り……そこには息を切らせつつ駆け付け必死の形相を浮かべる老人の姿。

「ち……ちよつと、何よじいさん！いきなり出て来て、私の輝かしい未来への懸け橋をぶち壊そうとしないでよね！」

「ええい、緊急事態なんじゃ！四の五の言つとらんで早う助けんか……！」

「んなこと知らないわよ！勝手にやっててちょうだい！」

何とかその手を振りほどこうとするが、ルル力の腕を掴むその力は予想外に強い。

「だああああああつ、もうっ！！ちよつと放しなさいってば！みんなこつち見てんじゃん！」

「か……か弱い老人が暴漢に襲われようとしておるんじゃ！普通は黙って助けるもんじゃろう！お主には慈悲の心はないのか……！」

「ないわ、そんなもん！持っててもお腹も財布も膨れないじゃん……！」

「三万リード……！」

「任された……！」

瞬間、ルルカはバレリーナもびつくりの軽やかなターンで反転した。

もしもあの石が本物の宝石であれば、三万リードなど完全にただのはした金にすぎないのだが……それでも、悲しき貧乏症。ルルカは即座に、敏感に目の前に吊り下げられた報酬に食い付いてしまった。

「ち……ちよつと待ってくださいよ、ルルカさん！」

すると、その光景を見ていたアドルが息急き切って駆け付けて来る。

「そんなどこの馬の骨とも知れない老人の依頼を引き受けるなんて……。」

僕の依頼はどうなるんですか？ ダブルブッキングなんてプロ失格ですよ！」

どうやら一連の状況はちゃんと把握しているらしい。自分の依頼そっちのけで別の依頼を引き受けたルルカに向かって猛抗議する。

こんなときに自分のことしか考えていないアドルの人間性の底も知れている。

しかし、

「黙れ貧乏人！」

ルルカの人間性の底はもつと知れていた。

「（うわあ、人間の根底が見えたな……）」

フードの中で、事の様子を傍観していたこんにゃくも呆れた様子で呟いた。

その11

「はあ……はあ……。や……やっと追いついたぜ……。全く、なんて機敏なじいさんだ」

老人に少し遅れ……彼を追い掛けていた二人の男も、ルル力たちの側までやって来る。

よくよく間近で見みると、二人とも身なりは粗暴、人相はかなり悪い。

そして、何より……腰に堂々と挿した凶悪なナイフが、この二人がただの一般市民でないことを物語っていた。

「ル……ル……ルルルル力さん……」。

こ……こいつら……、空賊ですよ……」

「分かってるわよ」

背後でガタガタと震えた声を漏らすアドルに、ルル力は冷静に素っ気なく返す。

二人の男の片方の頭には漆黒のバンダナ、もう片方は目にアイパッチ、そしてそのどちらにも『死』を象徴する髑髏のマークが施されていた。

どこからどう見ても、見紛うことなく典型的な空賊スタイルである。

一体何故この老人が空賊などに追い掛けられているのか……。

それは分からないが、老人からの依頼はこの二人の空賊から彼を守るということ。詳しい事情にルル力は首を突っ込む気はなかった。

事情が判然とせずとも、普通に考えれば非力な老人を追い掛け回す空賊の方が完全に悪いに決まっている。叩きのめしてもどこからも文句は出ないだろう。

「ああん！？ 何なんだ、おめえらはよ？」

濁った目付きで、老人の前に立ちはだかったルル力を睨み付ける二人の空賊たち。

「ひいつ！」

その迫力に完全に気圧され、アドルは情けない声を上げて近くの外灯の影に引っ込んでしまった。男としては少し情けないが、普通の一般人なら至極当選の反応である。

対して……ルル力は身じろぎもしない。

「おうおう。そこどけよ、ねーちゃん。俺たちや、そっちのじいさんに用があるんだ。怪我したくねえだろ？」

「ふん。怪我するくらいで許してもらえるんだ？ あんたたち、空賊のクセに結構優しいのね。」

……っと。じゃなくて、見掛け通り『生温い』って言った方がいいのかしら？」

「な……なんだと、てめえ　！！」

ちよつと脅しただけで素直に引くものと思つていたのдарう。予想外の反撃に遭い、バンダナの方の空賊がブチ切れる。

「（お……おおおおい、ルルカ……。ちよつと発言には気を付けた方が……）」

無法者の空賊に対して大胆不敵すぎる反論をするルルカを、どうにか止めようとするこんにやく。

しかし、老人を守るといふ依頼は受諾済み。今さら引くわけにはいかない。

「度胸だけは大したもんじゃねえか……。そこまで言うからには死ぬ覚悟出来てんだらうな？」

「え？　誰もそこまで言つてないじゃん。あちゃゝ、見た目も三流だけど頭の中身もやつぱり空っぽみたいね」

「て……てんめえゝ……　！　ふざけやがって……ぶつ殺してやる　！！」

完全にルルカの挑発に乗り、額に青筋を浮かべながらいきり立ってナイフを引き抜こうとするバンダナの空賊。

「（ほら、言わんこつちやない　！！）」

絶叫するとともに、こんにやくはフードの奥深くに隠れ込んだ。

しかし、カウンターで居合い抜きでもかましてやろうと思っていたルル力は、刀の柄に手を掛け、狙い通りに襲い掛かって来た空賊に対して臨戦態勢に構える。

しかし……完全に頭に血が上ったバンダナの空賊を、もう片方のアイパッチの方の空賊が制した。

「待て待て。こんな小娘のペースに乗せられるな。

……おい娘。お前、そのじいさんの血縁者や知り合いといったわけでもなさそうだが……。

見ず知らずの老人のために、命の危険を犯してまで俺たち空賊に歯向かうということは……少なくとも腕にかなりの覚えがあるな？

一体何者だ？」

冷静な口調で問い掛ける。どうやらバンダナの空賊よりは多少頭が回るらしい。もっとも、空賊の脳みそのことなどルル力にとってはどうでもいいことだったが。

そんなことよりも……アイパッチの空賊の問い掛けに、やっと聞いてくれましたかと言わんばかりに、ルル力は得意顔で大きく胸を張った。

「よくぞ聞いて……じゃなかった！

えと……。

ごほんっ……。

！
」

堰を切ったように一斉に大笑いし始める。

一体何故彼らがこんなにも大爆笑しているのか……自己満足に浸っていたルルカは怪訝な表情を浮かべる。

しかし、すぐにそれが嘲りの笑いであるということを理解した。

「……何よ。私、そんなにおもしろいこと言っただつもりなんだけど」

物静かな……いや、ドスの効いた口調で低く唸る。とっておきの決め台詞を嘲笑されたその表情は完全に憤怒の鬼の形相へと豹変している。

「（ル……ルルカ。落ち着けよ、な？ 相手も多分そんなに悪気があって笑ったわけじゃないと思うぞ）」

こんにやくはフードの中に隠れていたが、そこからでも彼女が放つピリピリとした殺気を感じたらしい。必死で彼女を宥めようとする。

しかし、静かに激怒するルルカの様子に気付いていないのか……空賊たちは未だ込み上げてくる笑いを必死で堪えながら、

ルルカの予想外のスピードに虚を突かれ、一瞬ではあるが完全に反応が遅れる空賊たち。

しかし、その一瞬が飢えた肉食獣のごとく襲い掛かってきたルルカの前では命取りになった。

どぐっ ！！

「がふっ……！」

ぼきっ ！！

「ぐえっ……！」

まさに……一瞬の出来事だった。

ほとんど何の抵抗もできず、二人の空賊たちは瞬く間に薙ぎ倒されてしまった。

ルルカの刀には明らかに昨日の食い逃げを倒したときよりも力が込められていた。空賊たちは致命傷を負ったのか、倒れたままピクリとも動かない。

……さすがに死んではいないだろうが。

「フーッ　！フーッ　！　……恐れ入ったか　！！」

足元で死体のごとく転がる空賊たちを見下ろし、鼻息を荒げるルカ。

「（ル……ルルカ、もういいだろ……　？　もう気が済んだだろ……？頼むから落ち着いてくれよ。なっ　？　なっ　？）」

「フ……フンッ　！」

空賊たちが完全に機能停止したことを確認すると、ルルカは刀を荒々しく鞘に収め、大きく息をついて呼吸を整えた。

その12

「ななな……なんちゅう乱暴者じゃ……」。

こりゃあ助けを求める相手を間違えたかのう……」

その姿が、あまりにも凶暴に見えたのだろう。老人はその身をガタガタと小刻みに震わせて完全に恐れ戦いていた。

散々自分を小馬鹿にしてくれた空賊を叩きのめし、少しスッキリしたルル力は営業スマイルを浮かべながら老人の方を振り返る。

「はい、おじいちゃん。ちゃんとあなたの身は守ってあげたわ。これで……依頼達成ね」

「（ルル力……笑顔が引き攣ってるぞ）」

極力にこやかな笑みを向けたつもりだったが、ひと暴れした後の顔の筋肉は完全に強張ってしまっていた。

ルル力が頬をヒクヒクさせながら浮かべる不気味な笑みを目の当たりにして、老人は空賊に襲われていたときよりも青い顔をして脅えている。

よくよく見れば、ずっと外灯の陰に隠れていたアドルまで何故か脅えていた。

「あ……あんたらねえ……」

「はっ……！」

う……うむ、助かったぞ。礼を言おう……。
じゃが……報酬はまだやれんな。
依頼が達成されたわけではないからのう」

「え、何言ってるの？ あんたを追い掛けてた空賊はこの通り……」

「こつちだ！ 見付けたぞ！！」

ルル力が抗議の声を上げかけたそのとき、先程老人たちが駆けて来たのと同じ方向から、またもや別の男たちが姿を現す。

身なり、顔付から判断して空賊たちの仲間だろう。しかし……今度はその数十人以上。

「げっ！！」

「ほ……ほれ、何をしておる！ 早う何とかせんか！」

思いもよらぬ援軍の登場に、思わずルル力は声を上げるが、老人はそんな彼女の背を押さんばかりの勢いで煽り始める。

しかし……ルルカ一人では到底どうにかなるような数ではない。

「だあああああああああつ！！ もうっ！！
何でこんなことになるのよド畜生っ！！！」

こんな団体様が相手では三万リードでは安すぎる。

目の前にはもう数歩のところに宝石店が……一獲千金の夢が待つ

ているというのに……。

ルル力は頭を乱暴に掻き毟り、断腸の思いで老人の手を取って走り出した。

「逃げるわよっ」

その13

人生何でもかんでも全てはうまくはいかないもの……ということ
は悟っていたつもりだったが、それにしてもあんまりだった。

一体何故こうも思い通りにならないのか……ここまで来たら何か
悪いものに憑かれているのではないかと疑いたくもなる。

本当ならば今頃、宝石店で手にした大金とともに超一流レストラ
ン『ブランドイーノ』の一席で、最高級ディナーに舌鼓を打ってい
るはずだったのに……。理想の未来と現実とのあまりに激しい落差
に、ルル力は涙を吞まずにはいられなかった。

執拗に追い掛けてくる空賊たちをどうにか撒き、ようやく一息吐
いたときには既に日はとっぷりと落ち、周囲には薄暗い闇が蟠りつ
つあった。

空賊たちの追尾は本当にしつこかった。ルルカ一人であれば追手
から逃げ切るのは造作もないことであつたが、何せ老人とアドル、
二人の足手まといを連れての逃走劇である。この街が細く入り組ん
だ路地の多い造りになっていなければ、とつくの昔に捕まっていた
ことだろう。

三人と一匹が逃げついた先は……一軒の、かなり古めかしいが大
きな屋敷の中。老人の指示を受けてここまでたどり着いたのだが……
…。

「はあ……はあ……。ど……どうにか撒いたわね……。
ねえ、おじいちゃん……。ここどこ？」

肩を大きく上下させながら、ルル力は隣に佇む老人に問い掛ける。

「どこ……と問われれば、その答えは『ワシの家』じゃ」

「ず……随分大きなお屋敷ですね。ちょっと埃っぽくて汚いですけど」

やたら胸を張って自慢げに答える老人に対し、アドルは素直に感嘆の声を漏らした。……言わなくてもいい本音まで漏れてしまっていたが。

「うむ。まあワシほどの偉大な研究者ともなれば、それに見合うべき屋敷に住んでいて当然じゃろっ」

「……………」

アドルの呟きは耳に届かなかったようだ。代わりに自分のことをしれっと『偉大』と言つてのける老人にルル力は目を細めるが、もういちいち突つ込むのも面倒臭かったので、聞き流すことにした。そして老人が口にした『研究者』という言葉についても言及する気にはならなかった。

「ここまで来ればもう安心じゃ。さて……走り回って疲れたじゃろっ。」

奥に来なさい。ささやかなお礼に粗茶くらいは出してしんぜよう」

「あ……、それはいいわ。私たち、ほかに用事があるから。報酬だけいただいたら御暇させていただくわ」

老人はルルカたちを屋敷の奥へと招きいれようとするが、片手でパタパタと火照った顔を仰ぎつつ、ルルカはその申し出をやりわりと断った。

さすがに宝石店はもう閉まっているだろうが、レストランの方は今から急いで戻ればまだ十分に間に合うはずである。

危うく今日も散々な一日になってしまふところであつたが、まだ取り返しはつくはずだ。

ルルカの隣で、アドルも何やらウンウンと頷いている。

「そうです、そうです。ルルカさんは僕の依頼を引き受けている最中なんです。こんなところで呑気に油を売っている暇はないんです」

しかし、そんなルルカたちを老人は鋭い目付きで見据えた。

「残念じゃが……それは出来ん。外にはまだ追手がうつろついていることじやろう。お前さんたちがこの屋敷から出るところを見付ければ、ずっと隠し続けて来たワシの居場所がバレてしまう。」

お前さんたちにはほとぼりが冷めるまで……とりあえず最低でも今日一晩はこの屋敷で過ごしてもらうぞ。

なあに、飯の心配ならすることはない。今日はこのワシ自ら久方ぶりに腕を振って、とっておきの料理を作つてやろう！」

「なっ……?!」

突然の老人の申し出に、思わず絶句するルルカ。

「ふ……ふざけないでよねっ　！！　私たちは『ブランディーノ』の超高級ディナーを食べるためにこの街に来たのよ　！　それを何が悲しくて老人が作る質素な粗食なんて食べなけりやならないのよ　！！」

「そうですよ　！　精進料理を出されたって記事に出来るようなことは何一つないんですよ　！」

ルルカとアドルは揃って抗議の声を上げるが、老人は駄々っ子のようにプイツとそっぽを向く。

「言うことが聞けんのなら報酬の三万リードはやらん　！　それに……我が家の敷居を跨いだ入場料一人五万リードもきっちり支払ってもらおうか」

「う……ごまっ……　！？」

「横暴よ、そんなの　！」

「ええい、やかましい　！　ここはワシの家じゃ　！　ここではワシがルールじゃ　！！」

……下らない言い合いをしているうちに、夜はどんどん更けていく。

その14

レーヴェル上空。

地上五百メートルを超える空の中を、一機の船が悠然とたゆたっていた。

エア・ライドに比べたらかなり大きい。それに、機体のあちこちが鈍い輝きを放つ砲門で武装されている。

バトル・シップ。

空軍にしか所持の許されない、戦闘型大型エア・シップである。

しかし……その機体に施されているのは、空軍のエンブレムなどではなく、不気味な髑髏のマーク。

「なにいつ　！？　またフォウルのじじいを取り逃がしたというのか　！」

機内に怒号が響き渡った。

バトル・シップの中には軍服姿の空兵などどこにもいない。いるのは粗暴な身なりのゴロツキのような輩ばかり。

空賊船『バンディット号』。

それが、空のならず者たち……空賊たちが不法所持するこのバトル・シップの名前であった。

「も……申し訳ありませんでした、ボス！」

十人以上の空賊たちが一斉に頭を垂れる。その目の前には、空賊たちが『ボス』と崇める一人の中年男の姿。

厳めしい顔つきは周囲の者たちと大差ないが、一人だけやたらと煌びやかな衣装を身に纏い、小奇麗な姿をしているという点だけは決定的に違っていた。

「馬鹿者どもがつ　！　あんな老いぼれ相手にいつまで手間取っているつもりだ　！」

喚き散らしながら、一番近くにいた空賊の頭を殴り付ける中年男。拳を握り締めたまま、フーツ、フーツと鼻息を荒げ続ける。

「それに取り逃がしただけというならともかく、返り討ちにあつただと……？」

まさかあのじじいにやられた……などという冗談を言つつもりじやないだろうな　？」

「と……とんでもない　！　どこの馬の骨ともしれねえ刀使いの女剣士が突然割り込んで来やがって……。こいつがとんでもなく凶暴なヤツで、俺たち二人の手に負えなくて……」

バンダナを身に付けた空賊が慌てて弁明する。女に負けた……と弁明するのは『恥』以外の何物でもなかったが、失敗に対する『罰』を恐れるあまりに正常な思考を欠いた彼は、とにかく言い訳をするのに必死だった。

ほかの空賊たちも、緊迫した空気の中でとにかく恩赦だけを強く

希い、必死で頭を下げ続ける。

しかし、

「ほう……今の時世に刀使いの女剣士か。それは珍しい……」

ビクンッ
！

突然背後から聞こえたしわがれた男の声に、空賊たちの方が跳ね上がる。

特に……バンダナとゴーグルを身に付けた二人の空賊は青い顔をしてガタガタとその身を振わせ始めた。

背後に迫る……圧倒的な恐怖と、絶望感。

次の瞬間、

ざんっ
！

鋭い銀光が閃くと同時に、機内に舞う赤い血飛沫。

振り返る暇すらなく、ごとり……と音を立てて、二人の体が地に転がった。

周囲に赤い水溜りが蟠るとともに、濃い血臭が漂い始める。

倒れた二人に既に息はない。

瞬きする間もなかった。ほんの一瞬の……しかし、その場に色濃く焼き付けられた惨殺劇。

あつさりとその命を奪い取られた二人の側にいた空賊たちの表情からは完全に血の気が引いていた。

「役に立たない者は殺せばいい。二人がかりで女にすら敵わんのなら、こいつらにもはや利用価値などない」

ひょうつ、と空気を斬り、手にした刃の血を振り払いながら、二人の空賊を斬り捨てたその男は言った。

「お……おいおい、ミスター・ルードマン。一体何人殺せば気がすむんだ？」

このままではワシらの目的を達成する前にうちの船員は全滅してしまうではないか……！」

「ククク……、それもそうだな。

まあ無能なこいつらでもこの船を動かすことだけは出来るからな。必要最低限の数は生かしておいてやるう……。」

おい、お前たち。運がよかったな」

中年男の震えながらの一言で、『ルードマン』と呼ばれた男はその手にした凶刃を静かに鞘の中に収めた。

どうにか首の皮一枚繋げることのでき、恐怖と絶望から解放され心の底から安堵する空賊たち。中には腰が砕け、その場にへたり込

む者までいた。

「ボ……ボス、あんなんでもねえヤツを雇っちゃって……一体どうするんですか？！」

中年男の側に控えていた空賊がコソツと耳打ちする。

しかし、中年男は強情さをその表情の前面に押し出し、卑屈な笑みを浮かべる。

「ふ……ふんっ、何をビビっておるか！」

ヤツは世界政府ですら捕獲を拱くほどの賞金首だぞ……？味方にいれば何も怖いものなどない！

今のワシらには強大な力が必要なんだ。誰にも邪魔されることなく、白雲の中に眠る『天空竜の秘宝』を手に入れるためには……な……！」

「さて……フォウル・グランバースの捕獲の方は私に任せてもらおうか。このゴミどもに任せていたのではいつまで経っても計画が先に進まん。

それに……その『刀使いの女剣士』というのがどうにも気に掛かる」

空賊たちのやり取りに気付いているのか、いないのか……クルリと踵を返し、ルドマンは血臭蟠る船室を後にした。

その口元に……蛇のようにねちりとした陰湿な笑みを湛えながら。

「久方ぶりに……血湧き肉躍るような気分だよ」

その1

戦場には悲しみと憎しみだけが渦巻いている。

多くの人間が、嘆き…… 渴き、苦しんでいる。

『光』を持つことなくこの世に生を受けた父は、とにかく人の心情を読み取ることに敏感だった。

父は、多くの戦場を経験していた。

戦争を繰り返すこの世界で、数多の争いの中に巻き込まれる者はたくさんいたが、空兵たちを除いて自ら進んで戦地に行く物好きなどほとんどいなかった。

それでも、父は争いが起こるたびにその戦地の中心へと足を運び続けた。

一体それは何故なのか…… 幼いころのルルカには父の行動は理解出来なかったし、父もあまり多くは語ってくれなかったが、ある日母が教えてくれた。

そこに救いを求めている人がいるから…… だから父は戦地に赴いているのだ……と。

戦地は多くの渇きに満ちている。

両親を殺された幼い子ども。

街を焼かれ、行き場を失くした老夫婦。

部隊が全滅し、生きる意味を失った兵士。

絶望の中に取り残された人々がたくさんいる。

そんな多くの人々に対し、父は救いの手を差し伸べて来た。

それは人間に限らず……例えばそれが亜人であっても同じような境遇にある者は一切差別することなく、父は分け隔てなく接してきた。

そんな父の行動を、非難する人間はたくさんいただろう。

手を差し伸べられた亜人たちも、人間から恩を受けることを頑なに拒み、中には自ら死を選ぶ者までいた。

しかし……それでも。父は戦地に足を運ぶことをやめなかった。

父は生まれつき目が見えなかった。

だからといってそのことを苦にするようなことはなかったし、むしろ父は自分が光を持たずに生まれてきたことを逆に感謝していたという。

『もしも私に光があれば、私もほかの多くの人間と同じように亜人に対して憎しみを抱いていただろう。』

自分たちとは異なるその醜い姿を目の当たりにして、激しい憎悪を腹の中に煮え滾らせていたに違いない。

だが、私には何も見ることが出来ない。

人間の姿も、亜人の姿も私には分からない。

だから二つの種族の間に存在するちっぽけな差異なんてちっとも窺い知ることなんて出来ないんだ。

人間と亜人。どちらも同じ、理性のある生き物だ。

違うのは外見だけ。その中にある魂の色はどちらも同じなんだよ』

そんな父を慕い、ルルカたち家族が住む辺境の街アストルーズには多くの人々が集まった。

戦地で父に命を救われた人間たちが……そして、中には父の行動に心打たれ、導かれた亜人たちも。

辺境にあるとはいえ、人間世界に亜人たちを招くなんて奇行以外の何物でもなかったが、父の考え方に賛同した街の人たちは、父の元を訪れる亜人たちも寛容に受け入れ、アストルーズの街は戦争最中にして人間、亜人が比較的良好な関係を築く世界でも稀有な街となっていた。

そんな父が『盲目の剣聖』……としてその名を世に知らしめてい

るということを知るのは、ルルカが父を探し始めて間もなくのことである。

その2

細い月が深淵に落ちた闇の空に浮かぶ。

静寂に包まれた街の家々の明りは一つ……また一つと消え始め、周囲を照らすのは夜空から降り注ぐおぼろげな星と月の光のみ。

眠りに就いた街の外れで、その大きな屋敷はひっそりとした明りを灯していた。

「お主たちはすっかり巻き込んでしまったのう……。本当にすまん事をしてしもうたわい」

接客用の大広間で、約束通りの粗茶を注ぎながら言ったのは……この屋敷の主、フォウル・グランバース。

しかし、謝罪の言葉とは裏腹にその口調も表情も全く悪びれてはいない。

「……もういいわよ。謝られたってどうしようもないんだし。でも……これだけは忘れないで。」

今日という日はもう二度と戻って来ないんだっていうことを……」

丸椅子の上で器用に三角座りをして、思いつきり未練たらたら口調でボソリと呟くるルルカ。

結局……壮絶な口論の末、意地でも自分の主張を曲げないフォウルの前に敗北を喫した彼女たちは、彼の屋敷で一晩明かすことになった。

もうこうなってしまった以上、高級レストラン『ブランディーノ』に行くことは完全に不可能である。

よしんば行くことになったとしても、それはアドルの依頼を終えた後。自腹では、とてもではないがそのお高い敷居を跨ぐことなど出来ない。

血を呑む思いで夕食に出されたフオウルお手製の、ひたすら薄味の精進料理をやケクソ気味に放り込み続けたが、ここまで来たことを思うとやはり諦め切れないでいた。

「さて……と。夜もすっかり更けてしもうたな。

今日はもう疲れたじやろう。茶を飲んだら、とりあえず一休みするでしょう。……じゃが、お主たちももう立派な関係者じゃ。寝る前にワシが空賊に襲われていた理由だけは話しておかなければなるまいな」

お互いに出会ってから名前、職業等の簡単な自己紹介をした以外では大した話はしていない。

ここまで巻き込まれてしまった以上、普通ならば詳しく事情を説明されなければ納得できないところなのであるが、ルルカも……そしてアドルも、あえてフオウルから事情を聞こうとはしなかった。

「あ……！ いやいや、無理に事情は話さなくてもいいわよ！ あなたから受けた依頼はあなたをあいづらから守ること。それはもう終わったから、詳しい事情説明は望んでないわ」

慌てて話題をすり替えようとするルルカ。

相手は空賊。首を突っ込めば間違いなく面倒なことになる。

ルルカとしては、アドルの依頼を受けているからには、これ以上フォウル言う『関係者』になり、厄介事に巻き込まれるつもりなどなかった。

それは暗黙のうちにアドルも悟っていたようで、彼もここまで極力フォウルが襲われていた理由については触れようとしなかったのだが……。

「うむ、そうか。実はわしはとある生物の研究をしておってな……」

「げっ、何が何でも巻き込むつもりだ……」

しかし、そんなルルカたちの言葉を完全に無視して、問答無用で話し始めるフォウル。

この偏屈老人が、こうなったら梃でも効かないことは玄関でのやり取りで承知済みである。

ルルカとアドル、それにフードの中のこんにやくは、げんなりと表情を浮かべて、仕方なしにフォウルの話に耳を傾けた。

その3

「まずは……これを見てほしい」

ところ変わり……屋敷内のフォウルの『研究室』。

自称『考古学者』だというフォウルは、若かりし頃にこの広く雄大な『空』に魅せられ、今日まで数十年の間その歴史について研究を続けて来たらしい。

広い間取りに所狭しと並べられた本棚には、数え切れないほどの文献が敷き詰められている。

そんな自身の研究室に嫌がるルルカたちを無理やり招き、彼が見せたのは一枚の絵だった。

ルルカたちは、目の前に突き付けられた絵を見て目を細める。

「なに、このラクガキ？」

「まるでどこかの三流画家が描いたようなシニール極まりない絵ですね」

「……ワシが描いた。あの大空に浮かびし聖域……白嶺海の中に棲まうとされる、伝説の生き物……『天空竜』の絵じゃ」

ルルカとアドルの失礼な一言にこめかみを引き攣らせ、無然とした表情を浮かべるフオウル。

「……………」

室内に気まずい空気が流れた。

「て…………てんくうりゅう…………？」

そんな空気をどうにかしようと、ルルカは話題を逸らすかのように眉を顰める。

思い切り膨れっ面を浮かべるフオウルの表情を見るに、既に手遅れのような気もしたが、その『天空竜』というのが聞いたことのない生物の名前だ……………ということは本当だったし、気になることも言っていた。

この『天空竜』という生物が、『白嶺海』の中に棲んでいる…………と。

「はっはっはっは！何を言っているんですか、おじいさん。あんな大雲の中に生き物が棲んでいるわけないじゃあないですか」

しかし……せつかくルル力が立て直し掛けた空気をぶち壊すかのように、やおら大声で笑い始めたのは……ほかでもない、無神経人間のアドルだった。

どうやらフォウルの発言を、老人の戯言として程度にしか受け止めていないらしい。

確かに普通の人間が聞いたのならば、そう受け止めるのも無理のなからぬことであるが……。

「……あんだ、おととい熱弁振るってた自分の主張笑ってるわよ」

「（いい加減な兄ちゃんだな……）」

再び空気がぶち壊されたことを詰るのも忘れ、他人事のように笑い続けるアドルを見て、ルル力とこんにやくは呆れたように声を漏らした。

確か、アドルから受けた依頼は、白嶺海の中に潜む謎の生物の影を探る……というものだったはずである。

自分のことは完全に棚に上げて、フォウルの言うことなどまるで信じていないようだ。

彼がこんな調子では、まともに彼の依頼に付き合っているこちらの方が馬鹿らしくなってくる。

……といっても、まだ仕事らしい仕事は何もしていないが。

「学会でこれを発表したときには、お主と同じように、集まっていた多くの研究者たちに笑い飛ばされるだけじゃったがな……」

うおっほん、咳払いを一つして、フォウルは拗ねたように天空竜の絵を机の引き出しに戻した。

確かに学会の場でこんなラクガキを発表されたのでは、天空竜の存在の信憑性に関わらず、笑い飛ばされることは必至だろう。

しかし……フォウルは未だ彼の発言と老人の戯言としか捉えていないルル力たちに対して強い視線を向ける。

「じゃが……天空竜は間違いなく存在する」

「で……でも、おじいちゃん。そこまで自信を持つていうからには、何かこのトカゲ……じゃなかった、天空竜がいるっていう証拠はあるの？」

困り顔でルル力は問い掛けた。

そこまで強く主張するからには、それなりの確証があるということなのだろうが……偏屈なこの老人のことである。

妄想か……はたまたただの思い込みだという可能性だってある。

「うむ。よくぞ聞いてくれた」

しかし、待っていました……と言わんばかりに、フォウルは自信
ありげな表情を浮かべ、絵をしまい込んだ大きな黒櫥の机の中をゴ
ソゴソとあさり始めると、今度は大切に箱詰めされている何かを取
り出した。

何かと覗き込むルル力たち。

興味深そうに食い付いてきた彼女たちを見て、フォウルはニヤリ
と小さくほくそ笑むと、やたら勿体ぶり……そして仰々しく、その
箱の蓋を開け放った。

その瞬間、中から淡い光が漏れ始める。

ルル力たちは思わず息を呑んだ。

「これは……？」

箱の中に収められていたのは、まるでクリスタルのような輝きを
放つ、石の欠片。

細長いその両端には明らかに折れたような形跡があるし、ところ
どころひび割れもしているが、そんなことがまるで目に付かないく
らいに、その石は美しかった。

「数年前、研究のために聖地ディエル＝ダーナの霊山へ発掘調査に行ったときに発見した……天空竜の化石じゃ」

ここぞとばかりに自慢げに胸を張るフオウル。

ルルカとアドルは、箱の中のフオウルが『化石』だと主張するものをしげしげと眺め回す。

「確かに……ところどころの割れ目を見た感じは何かの骨のようですね」

「うん。キレイね」。

でも……一体これがどうして天空竜の化石だなんて言い切れるの？」

「うむ、そもそもワシが天空竜の存在を確信したのは……ある出来事がキツカケだったのじゃ。

あれは……そう。ワシがまだ考古学者として駆け出しだったころの話じゃ……」

「げっ……。何か語り始めた……」

「これは、また長くなりそうな感じですね……」

さらっと説明してくれるものと思いきや……どうやらそれはフオウルの過去にまで遡るらしい。

老人がする若かりし頃の話ともなれば、長引くことは目に見えている。話をフツたのは確かにルルカだったが、まさかこんな展開に

なるとは予想だにしていなかった。

揃ってゲンナリとした表情を浮かべるルルカとアドル。

「（ふわぁーあ……。ルルカ、おれもう寝るわ。

お前も寝ることになったら、ちゃんとベットに移してくれよ）」

「あっ……。この裏切り者！」

もう付き合つてられんとはかりに一つ大欠伸だけ残すと、さつさとフードの奥に引っ込んでしまうこんにゃく。

ルルカは抗議の声を上げるが、そんな彼女などお構いなしに、フオウルの話は始まった。

その4

空には無限の可能性と浪漫が満ち溢れている。

フォウルは空に魅せられた人間の一人だった。

フォウルのような研究者だけでなく、行商、技師、空兵、果ては空賊まで……この空に惚れこんでいる者たちはたくさんいる。

人々は遥か上空に広がる大空に対して、大きな憧れを抱いていた。

そもそも……人々が大空に対して憧れと無限の可能性を抱くようになったのは、ある一つの王国の存在があったからだ。

空の王都ウィンダリア王国。

遥か大昔より、白嶺海の中に浮かぶ『浮遊大陸』に君臨する大王国である。

そこには確かに、大空に対する幻想が実在した。

だから人々は夢を見続けた。

自分たちが描いた幻想は、実在するのだ……と。

大いなる憧れを抱き、それを実現させようと、人々は必死で手を伸ばし続けた。

あれは……そう、フォウルが考古学者としてまだ駆け出しの頃だった。

技術革新が起こり、人々が大空へと舞い上がる翼を手にして間もない頃、研究チームとともに白嶺海へ初めて調査に行ったときのことである。

この世界には全部で七か所の白嶺海が存在する。

フォウルたちが調査に訪れた白嶺海は、通称『北の白嶺海』。七つの白嶺海のうち、最も北に位置する白嶺海である。

活動拠点として定めた、『ディエル＝ダーナ』の街に大量の物資や資器材を運び込み、満を持してフォウルたちの調査は始まった。

しかし……調査初日。

フオウルたち研究チームの乗ったエア・シップ『シーボルト号』は、突然発生した未曾有の大嵐に巻き込まれた。

激しい烈風と雷の中に吞み込まれた機体は深刻なダメージを負った。

翼が破れ、舵が壊れ、制御不能の状態に陥ったシーボルト号は、ただ猛然と吹き荒れる嵐に翻られ続けた。

もう生きた心地がしなかった。

フオウルたちは死を覚悟し、全員で空の女神に対して祈りを捧げた。

果たして……その祈りが届いたのだろうか。

気付いた時には、先程までシーボルト号の外で轟々と吹き荒んでいた暴風は止み、ただ静寂のみが空を支配していた。

猛威を振っていた嵐が忽然と消え去っていたのだ。

嵐の中から脱したのだろうか……。

しかし……どうにも様子がおかしい。

嵐が止むにはあまりにも唐突過ぎたし、自分たちが見慣れた空が、

そこには存在しなかったのだ。

前も、後ろも、上も下も、どこを見渡しても辺り一帯が真っ白。

一体ここがどこなのか……、何故自分たちがこんな場所にいるのか。放心状態だったフォウルたちには詮索する気力もなかった。

嵐にやられた舵が効かないのは相変わらず。しかし、シーボルト号は静寂とともに白い空域の中を推進する。

ここは……天国だろうか。

ああ、とうとう自分たちは死んでしまったのか、と……ついにはそんな境地にまで至った。

しかしそのとき、それは突然姿を顕にした。

フォウルたちは……我が目を疑った。

白く剃り立つ壁が割れ、その中から目の前に現れた巨大な黒い影。

シーボルト号がまるで豆粒に見えてしまうほど、まるで山のように

に大きな影だった。

一体それが何なのか……フォウルたちには想像もつかなかった。

その影は全体を大きくうねらせながら、シーボルト号に寄り添い、まるで導くかのように、白い空域をたゆたって行く。

それは、まるで夢を見ているのではないかと疑ってしまうような幻想的な光景だった。

そして……そのときになってようやく気付いた。

目の前の影が、今まで見たこともない……そして想像を絶するほど巨大な生物であるということに。

気付いた時には、そこには見慣れた空が広がっていた。

嵐は止み、つい先程まで静寂が満ちていたはずの空には再び激しい雨が降りしきっていた。

消息を絶っていたシーボルト号を搜索していた空軍の救助船に助けられ、フォウルたちは、どうにかディエル「ダー」ナの街に帰ることが出来た。

命からがら生還したフォウルたちは放心状態だったが……研究チームのメンバーたち全員が確信していた。

自分たちがさっきまでいたあの白い空域は、まさしく白嶺海の中。

そして白嶺海の中にはまだまだ未知の生物たちが……そして多くの秘密が存在するのだということ……。

その5

「……で、そのときに見たのが、さっきのラクガキ……じゃなかった、絵に描いた竜ってわけね」

睡魔との壮絶な闘いを繰り広げつつ、律儀にもルル力はフォウルの思い出話を最後まで聞いていた。

一方、隣で一緒に聞いていたはずのアドルは、己の欲望にあっさりと敗北し、いつの間にやら豪快な酄をかいている。

「うむ。完全な姿ではないがな。ワシが見たのは、あの巨大な天空竜の一部のみ。後はワシの類稀なる想像力を駆使して描いたものだ」

そんなアドルのことは丸つきり無視し、自慢げに語るフォウル。だが、彼の偏屈な想像力とお粗末な画力のみで下界に存在が伝えられた天空竜も気の毒である。

「その後、我々はディエル＝ダーナに聳える霊山『リア＝グランデ』で発掘調査を行ったのだが……そのときに発見したのが、この化石じゃな。」

発見したのは標高五千メートルを超える地点。そこにはもう生物はおろか草木すら生息しない。そんな場所で発見される化石といったら……」

「空から……白嶺海の中から飛来してきた生物のものとししか考えられない……ってわけね」

ルル力の言葉に、フォウルは満足げに頷いた。

「然様。白嶺海の真下にあるディエル＝ダーナの街にも、遙か古より天空竜にまつわる数々の伝説が残っておった。

その全長は街を呑みこむほど巨大じゃとか、干ばつの村に大雨をもたらしたとか……。

まあ確かに、ワシらがあの白い空域の中で見た天空竜の姿は見上げるほど巨大じゃったし、あの時の大嵐も天空竜が現れる予兆であつたと考えれば、これらの伝承にも信憑性が持てるな。

それから……天空竜が死ぬときは空が滅ぶときじゃとも伝えられておる。

この化石が天空竜の物じゃと確信したのはな、かつて天空より産み落とされたと言われる天空竜の『卵』に、その色艶が似ていると現地の者に聞かされたからなんじゃ。もつとも、その卵についても、数ある伝承の中の一つとして言い伝えられておるものに過ぎんが……」

「天空竜がいるかいけないかはおいといて……確かにこんだけすごいお宝なら誰かに、狙われたっておかしくはないわよね」

ルル力は感慨深げに頷いた。この化石が本当に何かの生物の化石であるならば、その学術的価値は計り知れないものであるはずだ。

「あの空賊たちはこの天空竜の化石を狙って、あなたのことを付け回してたってわけね」

「うむ、そうでもあるが……厳密に言えばそうではない」

ルル力の言葉に、しかしフォウルは静かに首を横に振る。

「奴らが狙っておるのは、この化石もそうじゃが、天空竜に関する

ワシの研究の全てじゃよ。

奴らは生きた天空竜そのものを狙っておるんじゃ」

「天空竜そのもの？」

「うむ……。奴らの……あの空賊団の首領の名は、ジェフ・ルーガ
ー。」

金儲けのためならばどんな非道なことにも手を染める強欲な男じゃ。

天空竜という未知の生物を捕獲すれば……莫大な金がヤツのもとに回りこむこととなる。奴らは天空竜をただの金儲けの道具として見ておらんようじゃ。

……悲しいことじゃあないか。当時ワシとともにディエル・ダーナへ行き、あの白い空域を体験した者は……皆、死んだ。

その後、ワシは方々で天空竜の存在を主張し続けたが……信じてくれる者など誰もおらなんだ。

それが……初めて天空竜の存在に賛同してくれた者たちが、天空竜を悪用しようとする者たちじゃったなんてな……」

言いながらフォウルは少し寂しげな表情を浮かべた。

出会ってからまだ半日程度しか経っていないが、この老人のこんな表情を見るのは初めてだった。

それだけ彼の天空竜に対する情熱が真摯で、本物であるということにとだろう。

ここに来て、この偏屈老人の人間らしい部分が初めて垣間見れたような気がした。

「そっか……」

でも、よかったの？ そんな大切なものを私たちなんかに見せちゃって。

私たちが善人だなんて保証はどこにもないのよ。もしかしたら、そのジエフ何とかっていう空賊みたいに、あなたの研究を悪用しよって考えるかもしれないのに……」

「構わんよ」

しかし……ルルカの懸念など関係なしに、フォウルはあっさりと頷く。

確かに、ルルカは昼間この老人を空賊から助けた。とはいえ、あくまでそれは依頼を受けたからである。まだフォウルから信頼されるようなことは何一つしていない。

すると、フォウルはやおら宙を仰ぎ、恍惚とした表情を浮かべた。

「お主は似ておるんじゃ……。ワシが心から信頼し、敬愛しておるあの男に……」

昔出会った、あの盲目の剣士……カミオ＝シエルに、な」

「……………えっ？」

ドクン……

突然の……そして、あまりに予想外の一言。

ルルカの鼓動が一オクターブ高鳴った。

カミオ〃シエル。

ずっと追い求めて来た、その名前。

この人……父さんのことを知っているの……？！

瞬間、ルルカは我を忘れてフォウルの胸倉に、ぐわしつ！と
掴みかかっていた。

「あ……あああなた、父さんのことを知ってるのっ？！
教えてっ！父さんは今どこでどうしているのっ？！」

「くっ……苦しっ……！」

気付かぬうちに、その両腕に込められていた渾身の力。

フォウルの胸倉を締め上げ、その体を前後左右にブンブンと揺さ
ぶり始める。

「……………っ！！」

「どうして黙ってるの？ちょっともったいぶってないで教えな

さいよ　！！」

悶絶しているフオウル表情になど、興奮の極みに達したルルカはまるで気付いていない。

「ち……ちよっと、ルルカさん　！」

「（お……おい、落ち着けてルルカ！じいさんが窒息死しちゃうよ　！）」

騒ぎに気付いて目を覚ましたアドルとこんにやくが、慌ててルルカのことを止めようとする。

二人の必死の制止により、ルルカはハッとして我に返った。

「じゅっ……ごめんなさい！興奮しちゃって、つい……」

白目を剥き掛けたフオウル表情にようやく気付き、慌ててその手を離す。

「げぼっ……　！　げぼげぼげぼげぼっ……　！！」

「や……やあねえ、オーバーなんだから。あは……あははは……」

やっと解放され思い切り咳き込みまくるフオウルを見て、ルルカは渴いた笑い声を漏らした。

その6

「ふう……。お前さん、カミオ＝シエルの娘であつたか。これはまた……。何とも数奇な廻り合せよ」

粗茶を淹れ直し、ようやく息を整えたフォウルは、突然のルルカの暴力行為に怒り出すこともなく、感慨深げに呟いた。

その双眸に恍惚とした光を宿している。

まるで……。昔のことを思い出しているかのように。

「あなた……。父さんの……。カミオ＝シエルのことを知っているの？」

ようやく落ち着きを取り戻したルルカも、今度は極力冷静に……。そして恐る恐る問い掛ける。

フォウルは深く頷いた。

「おつ……。教えて！あの人は……。父さんは今どこにいるの？」

「知らん」

「……………は？」

「じゃから、彼の居場所なぞ知らんよ。

ワシが彼に会ったのは、二十年前の『ドゴラ戦争』時のことじゃ。

亜人による空襲を受け、突如として戦場に変わった街で路頭に迷っておったワシは彼に救われたのじゃ。

いや……あれはワシだけではなかったな。生き残っていた街の者たちも……そして、機体を落とされ死を覚悟していた亜人たちにさえ彼は救いの手を差し伸べた。

種族間の差異を跨ぎ、戦場を希望の光で満たしていくその姿は、まさしく『剣聖』の姿。

あれほど素晴らしい男を、ワシは未だかつて見たことがない」

「も……もしかして、おじいちゃんが父さんに出会ったのって……」

「うむ。それ一回つきりじゃ」

ガツクリ、と……ルルカは思い切り肩を落とした。

フオウルが父に会ったのは、ルルカの生まれる以前の話である。

失踪前の父の話を聞いたところで、何の手掛かりにもならない。父の高評を聞くのは娘として鼻が高かったが、いま彼女が知りたいのはそんなことではなかった。

「しかし、二十年経った今でさえあれほど見事な男のことは忘れることは出来ぬよ。生きているうちに、是非とももう一度だけ会いたいものじゃよ。

彼は……カミ才殿はお元気かの？」

十三年前……父が突如として謎の失踪をしたことを告げると、フオウルは大層驚き……そして本当に残念そうに肩を落としていた。

父に再会したいという気持ちは彼も同じだったようだ。

「そうか……。あのカミ才殿がのう……。
カミ才殿が突然家族を見放すとは考えられぬ。何か……余程のことがあったんじゃないかな……」

この偏屈な老人がここまで神妙な表情を浮かべるとは、ルル力は思わなかった。余程父のことを尊敬しているようだが、それだけ父が戦場で多くの仁徳を築いてきたのだろう。

戦場での父の行動の詳細をルル力は知らないが、話だけ聞いていると、とてもではないが自分の父親であるとは思えなくなってくる。

「それでお前さんは一人カミ才殿を探す旅を続けておるといわけか」

「うん……そうなんだ。探し始めてから今日まで全く手掛かりなんて掴めてないんだけどね……」

消沈気味に自嘲の笑みを浮かべるルル力。

ようやく手掛かりを掴むことが出来た……と思っていた矢先、思い切り肩すかしを喰らう羽目になってしまったルル力の落胆は大きかった。

しかし、そんな彼女を元気づけるかのように、フォウルはパツと笑みを浮かべる。

「な〜に、そう悲観することもない。カミ才殿は顔も名も世間に知られておる。諦めずに探し続ければ、きっといつかどこかで廻り合

えるじやろっ」

「そうですよ　！　ルルカさん」

すると……やおら二人の話に聞き入っていたアドルが声を上げた。何やらつい先程までと比べても、随分と声色が高い。彼も消沈するルルカのことを元気づけようとしているのか……と一瞬思ったが、

「僕、いいことを思い付いたんです　！

今回の依頼の報酬ですが、現金はやめてうちの会社が発行する新聞の尋ね人欄にお父さんのことを掲載する……というのはどうでしょう？　」

「（こいつ……報酬ケチってより安い方向に持って行こうとしてやるな）」

「現金以外は受け付けません」

アドルの企みをあっさりと見破り、その申し出をきっぱりと断るルルカ。

浅はかな企みがばれたアドルは拗ねたように床の上に『の』の字を書き始めた。

「うゝむ、それではこんなところにいつまでも引き留めておくわけにもいかぬな。お前さんたちは明日にでも街を発つとよかろう」

「えっ、でもいいの？」

突然のフォウルの申し出に、ルルカは声を漏らした。昼間はあれ

だけ必死でルルカたちに助けを求めて来たというのに、それがあつ
さりと引き下がるなんて少し意外だったのだ。

「ワシのことなら心配するな。明日、近くの街に住む古い知人がレ
ーヴェルの街に来てくれることになつとるんじやが、彼が用心棒を
してくれる。」

あれくらいの規模の空賊団ならどうにかやり過ごせるじやろつし、
お主たちが街から出るときにも、きっと協力してくれるじやろつ」

「へえ、そんな頼りになりそうな人がいるんだ？」

「うむ。まあ、酒好き、女好き、ギャンブル好きの、顔も口も性格
も悪いどうしようもない男じやが……、腕っ節は強いし機械技師と
しての腕も一流じや。心配することはない」

「そ……そいつ、ロクな奴じゃないんじや……」

一体どちらが空賊かと疑ってしまいたくなるようなその人物像に、
ルルカは不安げにヒクヒクと頬を引き攣らせた。

しかし、彼がそう言ってくれるのなら、何も躊躇することはない。

フォウルの研究を狙っているという空賊団も、昼間の連中を見た
限りではあまり大したことはなさそうだ。

その『用心棒』という人物がいれば、おそらくどうにかなるだろ
う。

ルルカたちは、明日……この街を発つ。

その7

その子は普通の人間とは違っていた。

肌の色も、瞳の色も、ちょっとした習慣や、言葉の訛りなんかも。

でもルルカはそれを気にしたことはなかったし、ルルカの住んでいたアストルーズの街には、その子と同じような人はたくさんいた。

ルルカには世界のことはあまりよく分からなかった。

アストルーズが人間世界の中心的な都市から遠く離れた辺境の街だったから……そんな理由もあったかもしれないが、何故世界で争いが起こっているのか……、何故少し見た目が違うだけで憎しみ合うのかなんて、とても分かるはずがなかった。

いつまでも争いのない、平和な世界が来ないかな……と、子ども心ながらそんなことを思うことも少なくなかった。

そして……少なくとも、アストルーズの街だけはいつまでも平和なときが続くものだと思っていた。

お父さんがいる限り……そして、この街の人たちが温かな慈しみの気持ちを忘れない限り。

しかし……平穩は突如として打ち碎かれることとなる。

彼らは突然街にやって来た。

彼らもルル力たちと同じ、正真正銘の人間だった。

しかし。

略奪、暴行……そして、殺戮。

アストルーズの街は、戦争に紛れて現れた突然の来訪者たちの手によって非道の限りを尽くされた。

同じ人間なのに、何故そんなことをするのか……。ルル力には到底理解なんて出来なかった。

ルル力たちは、必死で逃げた。

激しい炎に飲み込まれた街から少しでも離れるように、わけも分からず、とにかく逃げることしか出来なかった。

その両手には、ルル力の手を強く握り締める二つの温もりがあったような気がする。

お母さんは……一体何をしていたのだろう。

お父さんは……一体どこへ行ってしまったのだろう。

二人とも、こんなこと絶対許さなはずなのに……。

気が付いたときには、ルル力たち以外に街の人たちの姿はなくなっていた。

代わりに自分たちの周りを取り囲んでいたのは……街を焼き尽くした非道な侵略者たち。

ルル力の後ろには……守るべき二人の姿があった。

守らなくちゃ……この子たちだけは、絶対！

そんなハッキリとした……強い意識を持っていたことだけは、今でも覚えている。

自分はもうお姉ちゃんなのだから……この二人は自分が守ってい

かなければならないのだと、お父さんと約束したのだから。

ルルカたちを取り囲んだ者たちの内、一人が彼女たちの前に歩み出た。

そして、口元に笑みを浮かべながら、彼女たちに……いや彼女だけに對して何かを囁きかけた。

それは、まるで悪魔のような……ゾツとするほど残酷な笑みだった。

「その……を……せば、……けは……やる」

ルルカの背筋は凍り付いた。

その8

……もう何度目のこととなるだろう。

全身にじつとりとした嫌な汗をかき、背中に張り付いた冷たいシートに不快感を覚え目を覚ますのは。

案内された客間の一室で、遅めの就寝に就いていたルルカとこんにゃく。

しかし、折角の久し振りにベッドで眠ることが出来るというのに、どうにも寝心地が悪い。エア・ライドの固いシートの方がぐっすり眠れる貧乏症の自分が少し悲しかった。

大きく高鳴る鼓動。

瞼の裏に焼き付いた、ぼんやりとした陰鬱なイメージ。

またあんな妙な夢を見てしまったのは……父の話を聞かされたからだろうか。

夜も深いというのに、何だか気分が落ち着かず、目がハッキリと冴えてしまっていた。

何度か寝返りを打ってみるが、もうとても眠ることは出来そうにない。

「……………」

ふう……と大きく息をつく、ルルカは額の汗をぬぐい去りつつベッドの上から半身を起こした。

枕元で静かに眠っているこんにやくを起こさぬように気を付けながら、ゆっくりとベッドから身を起こす。

落ち着かない気分を変えるため、少し夜風に当たりに外に出ることにしたのだ。

しかし、

「どっか行くのか？」

部屋の外へ出ようとしたとき、突然背後から声を掛けられる。

ドキッとして振り返ると、ベッドの上で目をこすりつつ大きな欠伸をするこんにやくの姿が。

「ごめん……また起こしちゃった？」

「ん〜にゃ……、ちよつと前から起きてたよ。

どうもこの安物の固いベッドはセレブ肌のおれにゃ合わねーみたいだ」

短い四肢をぐるぐると回しつつ、一丁前なことを言うこんにゃく。

思わずルル力はプツと吹き出してしまった。

お気楽なこんにゃくのおかげで、夢のせいでどんよりと重たくなっていた気持ちが少し軽くなったような気がした。

「それなら……少し一緒に散歩でもする？」

その9

フォウルの家はごちゃごちゃしているが、外観通りやたらと広い。

夜風に当たりて外に出ようとしたつもりが、二人は屋敷内で完全に迷ってしまっていた。

「おい……ルルカ。ここどこだ？」

「……分かんないわよ。大体何だって明りの一つもないのよ」

広い屋敷内の廊下を照らすのは、窓から差し込むおぼろげな月と星の光のみ。

周囲はほぼ漆黒に包まれ、ルルカたちは自分たちが今どこを歩いているのかも分からないような状況だった。

フォウルはこの屋敷に一人で住んでいると言っていた。部屋には空き部屋も多く、どれが自分の部屋なのかの判断もつかない。これでは部屋に引き返そうにも引き返すことが出来ない。

「全く……家の中で迷うヤツなんて初めてみたぜ。しっかりしてくれよな」

「あのねえ！よく言うわよ、あんたずっと私のパーカーのフードの中に入ってるだけのクセに。どうせ誰もいないんだから、あんたも出てくりゃいいじゃん」

「ばばば……バカなこと言うなよな！そんな油断しといて、も

しあの兄ちゃんに見つかつてみる！　すぐに記事されて、あつという間にサーカス行き決定だよ　！！」

「そんなわけ……あり得るわね、確かに。

……　　つたく、そんなに見付かるのが怖いなら少し黙ってればいいじゃん。フードの中から無責任に文句ばかり言わないでよね」

ブツブツ文句を言いつつ、パーカーのポケットの中にズボツと両手をつ突っ込むルルカ。

「……あれ？」

そこで妙なことに気付いた。

右手に触れる硬質の触感。

訝しげな表情とともに、ポケットの中からそれを取り出してみる。

川の中で拾つたあの石だ。昼間ポケットの中に入れっぱなしにしてしまっていたようなのだが……。

「どうしたんだ、ルルカ？」

「いや、この間拾つたあの石んだけど……何だか少し大きくなつてるような……」

「何だつて？」

石を目の前にまで近付け、小首を傾げるルルカ。こんなにやくもフードの中から這い出て、目をすばめる。

しかし、暗闇に邪魔され、詳細に確かめることが出来ない。

「うーん……分かんねえな。気のせいなんじゃないのか？」

「そうかなあ……。それに、なんか心なしかあつたかいような気がするんだけど……」

「ずっとポケットの中に入れてたからだよ。それこそ気のせいだつて」

「うーん、そうなのかも……」

言われてみれば、確かに温かく感じるのは川の中で拾った時の冷たかったという印象が強過ぎたからなのかもしれない。

大きく感じたのも、指先の手の感触だけでの判断なので、おそらくただの勘違いだったのだろう。

依然として腑に落ちないながらも、ルル力は再び石をポケットの中に戻した。

再び光を求めて二人が屋敷内をうろついていると……一室だけ明かりを灯している部屋を発見した。

「……………」

その頃になると、ようやく暗闇にも目が慣れ、なんとなく周囲の状況が分かるようになってきていた。

よくよく見てみると、そこは見覚えのある部屋だった。

『研究室』。

就寝前にフォウルが天空竜について説明してくれた部屋である。

フォウルがまだ起きているのだろうか……。もしそうであれば、部屋まで連れて帰ってもらおう……。と、そんなことを思いつつ、ひよいと部屋の中を覗き込む。

しかし、そこにいたのはフォウルなどではなかった。

「……………あれ、アドル？」

「げっ！　ル……………ルルカさん」

そこにいたのは、ルルカと同じく客間に案内されたはずのアドルの姿が。

寝巻姿ではあるが、その手にはいつも手にしているカメラと……。そして、大きな黒櫥の机の上には、フォウルが大切に引き出しの中に戻したはずの、天空竜の化石。

『……………』

無言で見つめ合う二人。

気まずい空気が室内を支配した。

やがて……ルルカはアドルの姿と天空竜の化石とを交互に見比べ、顎に手を当て、目を細める。

「あんた……、いくらスクープがほしいからって、まさか化石を盗もうとしてるんじゃないでしょーね？」

「しつ……失敬な！　いくら僕だってそこまでしませんよ！　ただ……ちよつと盗撮させてもらおうと思っただけです！」

ルルカの指摘に、しかしアドルは憤慨したかのように声を荒げた。

「あ……あのねえ、どっちにしろ堂々と言えることじゃないじゃん……。
やめなさいってば。そんなことしたらあのおじいちゃんに怒られるわよ？」

あんだけ大切にしてるっていうのに……」

呆れたように呟くルルカ。肩の力がガクツと抜けた。

対して、アドルはここに来てようやく慌てて弁明を始める。

「だ……だって、正直に撮らせてくれたなんて言っても絶対に撮らせてくれるわけじゃないじゃないですか！」

そうだ！　この写真を載せた新聞が売れたら、ルルカさんへの謝礼も上乘せししましょう。だからちよつとだけ目を瞑っていて下さい」

「よし、じゃんじゃん撮りなさい」

謝礼の上乗せ。

その言葉を聞いた瞬間、ルルカの正気は吹き飛んだ。

自ら化石を手に取り、撮影のしやすいように設置し直す。

「（おい、ルルカ。このケチやろうが謝礼上乗せなんてするわけねーだろ。うまいこと丸めこまれてんだよー！）」

しかし、こんにやくの一言で、ルルカはハッして目を覚ました。

どうやら目先のわずかな利益に目が眩み、ほんの一瞬だけではあるが我を忘れてしまっていたらしい。

「い……言われてみれば……！　　やっぱり盗撮なんてダメよ。そのネガよこしなさい！」

「や……やめて下さい！　　僕はこの写真を何としても社に持って帰るんだ！」

ルルカはカメラを奪い取ろうとするが、対してアドルもカメラを守ろうと必死の抵抗を見せる。

狭い室内で壮絶な押し合いへし合いを繰り広げ始める二人。

しかしそのとき、

じゅっ
！！

突如として深夜の静寂を打ち破るかのような、爆音が周囲に轟いた。

その10

「な……なに？！」

窓からおぼろげに差し込んでいた僅かな光が、圧倒的な光の束となつて周囲を眩く照らす。

暴風が吹き荒れているのか……屋敷全体が揺れていた。

圧倒的な光とともに現れたこの音の発生源は、外。

思わず耳を塞いでしまうほどのこの轟音に、ルル力は聞き覚えがあつた。

誰でも一度は聞いたことがあるだろう。あるいはターミナルで、あるいはエア・ステーションで……そして、あるいは街中の空で。

空から降り注ぐこの音は、エア・シップのエンジン音だ。

しかし、これだけの大音量で聞こえるとなると、この音の発生源であるエア・シップはかなり間近にいるということである。

「な……なんじゃ！ 何事じゃ？！」

突然、戸惑いの声とともに研究室の扉が乱暴に開かれた。振り返ると、そこには血相を変えたフォウルの姿が。

近くの自室で眠っていたようだが、この爆音に叩き起こされたようだ。

研究室内にいるルルカとアドルの姿を目にして、フォウルの目の色が変わった。

「な……何をしておるんじや、お主たち！」

まるで罪人を咎めるかのように詰め寄って来る。

一瞬爆音のこと忘れ、その剣幕に押されたルルカは慌ててアドルを指差した。

「わっ……私は何もしてないわよ！化石を盗もうとしてたのはコイツ！」

「ちちちちちよつと、ルルカさん！そうじゃないでしょ？
ややこしくなるようなことは言わないで下さい！
フォウルさん、心配しないで下さい！僕は六割方潔白です！」

「わ……わけの分からんことを……。それより、この騒音は一体何じゃ？お前さんたちの仕業か？」

「そんなわけないじゃないの！」

「そ……外へ……とにかく外へ出てみましょう！」

この爆音と混乱の中では、誤解を解こうにもまともに話しさえすることが出来ないし、今は悠長にそんなことを話している場合ではない。

音の正体を確かめるため、ルルカたちは誰に導かれることもなくバルコニーの方へ向かった。

廊下の奥からバルコニーに出た途端、それまで響いていた音がさらに大きくなつて耳の奥を突き、思わず目を覆ってしまうほどの眩い光がルルカたちを照らし出す。

近くにいたものとは思っていたが、その巨大な影は予想していたよりもずっと近くに聳えていた。

大型飛空艦『エア・シップ』。

フォウルの屋敷より一回りも大きいそのエア・シップから放たれる膨大な量の光がルルカたちを……屋敷全体を照らしていた。

いや……、光を堪え目を凝らすルルカ。よくよく見ればその船はエア・シップではなかった。

機体のあちこちに施された砲門や機関銃。

本来ならば空軍にしか所有が許可されていないはずの大型戦闘艦『バトル・シップ』である。

しかし……こんな場所、こんな時間に空軍のバトル・シップが現れるはずがない。

バルコニーには既に先客がいた。

一体いつからそこにいたのか……バトル・シップから照らされる光を背に佇む男が一人。

光に遮られ詳しい顔立ちは確認出来なかったが、それでも目についたのは右目の大きな刀傷と、左腕に乱雑に巻き付けられたボロの布切れ、そして……長身瘦躯の全身から滲み出る研ぎ澄まされた刃物のように鋭い、殺気。

全身に纏ったその雰囲気は……明らかに異質であった。

「月の綺麗な夜だ。こんな夜に起こる惨劇は……ククク、さぞかし凄惨なものになるだろう」

夜空にぼんやりと浮かぶ、刃のような細い月を見上げつつ、男はその細身の体とはおよそ不似合いのしわがれた低い声で呟いた。

「だ……誰っ？！」

大声で問い掛けるルルカ。その額にはじつとりとした脂汗が浮かんでいる。

突然の襲撃に心が動揺している……確かにそれもあったかもしれない。

ないが、この男が放つ異様ともいうべきプレッシャーに完全に気圧されてしまっていた。

ルルカの問い掛けに答える代わりに、男の影からもう一人、別の男が姿を現す。

「ぐっふっふっふっふ。ついに見付けたぞ、フォウル・グランバース」

ざらりとした耳障りな不快な声が耳をつく。

姿を現したのは、長身痩躯の男と比べるとかなり背も低く、小太りでずんぐりとした体型の中年男。

金に物を言わせて着飾ったような、成金趣味のセンスの悪い格好をしている。

「ジェフ・ルーガーかつ……！」

その男の存在を認めた瞬間、忌々しげに、フォウルはその名を呟いた。

「ジェフ……？」

ルルカとアドルは揃って眉を顰める。少し前に聞いたばかりの名であった。

それは確か……フォウルの研究を狙う空賊団の首領の名。

「それじゃあ、あいつが……？」

「全く手間を掛けさせおつて……こんな町外れに住んでいたとは、探し出すのに苦労したわい。」

まあもつとも、見付けてしまえばもうあとはこっちのものだがな！

がっはっはっはっはっはっはっは！

さあ、フオウルのじいさんや。ワシらがここに来た理由はもうとつくの昔に分かっているだろう？

面倒な話はなしにしよう。さっさと天空竜の化石と、その研究資料の全てを渡してもらおうか！」

「な……何度も言わせるな！ あれだけは死んでもやらん！とつとつこの場から立ち去れい！」

これまで見せたことのないような剣幕で怒鳴り声を上げるフオウル。

その口調の中に込められたのは……明確な怒り。

天空竜を守ろうとする強い意志、そして天空竜を食い物にし、金儲けの道具として利用しようとするこの空賊たちに対する激しい憤りがはつきりと現れていた。

「ふんっ、相変わらず答えは一緒か。本当に頑固なジジイだ。」

ま……ワシらも最初からお前みたいな偏屈者と話し合おうなどとは思っておらんがな。

空賊が目的を果たすための手段は……論理に勝る暴力だ！」

言いながらジェフはそそくさと後ろに引き下がる。

「ささ、ミスター・ルードマン。あなたの出番だ。
気の済むまで斬り刻んでやるといい」

ジェフに促されるかのように……ルードマンと呼ばれた長身痩躯
のその男は、白木拵の刀を左手に携え、ゆっくりとルルカたちの前
に歩み出た。

思わず後ずさるルルカ。

いや……ルルカだけではない。

アドルも、フォウルも。

フードの中のこんにやくもガタガタとその身を震わせていた。

男が放つ、圧倒的な威圧感。

隣りに佇むジェフ・ルーガーなどとは比べ物にならないほどの、
異常なまでの存在感。

まるで肉食の猛獣と相対したかのように、生物としての本能がそ
れを知らせていた。

この男は……危険である。

「昼間空賊たちを追い返した刀使いの女剣士とは……キミのことだ

な？」

警戒心を剥き出しにするルルカたちに対し、ルードマンはうつすらと笑みを浮かべつつ、しわがれた低い声で問い掛ける。

「そ……そうだけど、だとしたら一体何っ？！」

返すルルカの口調が自然と強くなった。

少しでも氣勢を張らなければ、この男が放つ不気味なプレッシャーに呑み込まれてしまいそうだったのだ。

しかし、動揺からか……自分でも声が上擦っていることが分かる。

ルルカの答えに、しかしルードマンはまるで落胆したかのように、ふう……と一つ溜め息をついた。

「ふむ……そうか。

だとすれば……これほど興醒めなことはないな。

久方ぶりに刀使いの剣士と一戦交えることが出来るかと思えば……

…何だ、まるで『剣気』など感じない。

おまけに丸腰ではないか……。

女だてらに無能とはいえ二人の空賊を倒したとなれば、多少腕の立つ剣士なのかと思えば……やれやれ、どうやらキミもただの一端の剣士に過ぎないようだな。

キミに少しでも『力』があれば、刀を取りに行く猶予でも与えようかと思っただが……どうやらその価値すらないらしい」

「……………？」

ルードマンが言っていることの意味がよく分からず、眉を顰めるルルカ。

しかし……一つだけ、はっきりと分かったことが。

それは……この男が確実にルルカたちを殺そうとしているということ。

「お……お主、ほかの空賊たちとは少し毛色が違うな。

一体何者じゃ……？ ジェフ＝ルーガーの用心棒か何か？」

フォウルが恐る恐る問い掛けた。

フォウルの研究を付け狙っていた空賊団の首領は、ジェフ＝ルーガーのはずである。

それも、話を聞く限りではかなりの傲慢な男のはずだ。

しかし……そのジェフ＝ルーガーが目の前のこのルードマンという男に対してだけは、どうにも少し遠慮がちで、畏縮し、いや……それどころか恐怖さえ覚えているのだ。

「用心棒……？ ククク、そんな綺麗なものではない」

お喋りに飽きたのか……それとも痺れを切らしたのか、どうやらもうあまり会話をする気のないらしいルードマンは、フォウルの問

い掛けを素っ気なく切り捨てる。

そして、ルルカたちに向かって、ずいっと大きく一步を踏み出した。

「殺し屋だ」

ゾクッ
！

瞬間、ルルカの背筋に冷たいものが走った。

ルードマンが刀を引き抜いたその瞬間、研ぎ澄まされたその殺気がルルカたちに突き付けられる。

ゆらり……と、ルードマンの姿が一瞬ゆらめいたかと思うと、闇の中に掻き消えた。

次の瞬間、その姿はルルカたちの目の前に。

「っ　！！？」

ひょうっ
！

空気が鋭く斬り裂かれる。

反射的に、ルル力は側にいたアドルとフォウルを押し倒すかのよう
に身を伏せていた。

「さすがにこの程度はかわせるか……！」

どうやら今のは手加減たつぷりに放った様子見の一太刀だったらしい。

不敵に言い放つルードマン。

どうにか紙一重でかわすことが出来たものの、ルル力は今の一太
刀で瞬時に悟った。

この男は……自分などより桁違いに強い。

「クククク……」。

久方ぶりの獲物だ、簡単には死んでくれるな。
少しでも……長持ちしてくれよ」

翩り殺しにする……。そう言っているのだ、この男は。

不気味な殺人鬼を目の前にして、ルル力たちは完全にその雰囲気
に呑み込まれてしまっていた。

どうにかして、この場を切り抜けなければならない。

アドルとフォウルを連れて、この場を逃げ出さなければならない。

しかし……どうにか考えをまとめようにも、焦りと恐怖のせいか、
思考は全く正常に機能しない。

体勢が入れ替わったせいで、光が遮られ、ルードマンの顔がはっ
きりと見てとれるようになった。

その表情に浮かべられたのは……まるで蛇のような、ねちり……
とした冷笑。

「……………っ!!」

刹那、ルル力の表情が凍り付いた。

その11

『ククク……。本当にキミたちは野蛮な連中だな』

『殺すなら……。もっとスマートに殺さなければ』

『ほうら……こんな風に、な……』

「……………」

遠い追憶の中で……眠っていたはずの亡霊が、呼び起こされる。

まるで瞳の中で火花が弾けたかのように、目の前がチカチカした。

同時に襲い来る、激しい頭痛と嘔吐感。

:

:

意識が……朦朧とする。

今、この瞬間は……果たして、夢か、現実か。

そんな判断すらつかなくなるくらい、ルルカの中から正常な思考は失われていた。

「お……おい、ルルカ！　どうしたってんだよ、ルルカ！！」

突然動かなくなったルルカを、人目も構わず必死で呼び掛けるこんにゃく。

しかし、すぐ耳元のそんなこんにゃくの声すらもうルルカには届かない。

その瞳からは生気が消え去っている。

「恐怖で呆けたかつ……！」

そんなルルカに対し、ルードマンは容赦なく凶刃を振り被った。

濃厚な殺意の色を含んだ銀光が、ルルカの眼前に迫る。

闇夜に鮮血が舞う。

気付いた時には、ルルカの体は地に倒れ伏していた。

体にべつとりとした血が纏わり付く。

しかし……体が痛みを感じることはなかった。異常は……どこにもない。

ルルカの側にもう一人、別の誰かが倒れていた。

その身に、ルルカよりも夥しい量の血を纏わり付かせて。

ルードマンが振り下ろす凶刃の餌食になったのは……ルルカの体ではなかった。

「ぐっ……うああああっ……！」

右の肩口を抑えながら蹲り、苦悶の声を上げたのは……アドルだった。

ルルカにルードマンの刃が迫る寸前、咄嗟にルルカの体を弾き飛ばし、自ら身代わりとなって凶刃の餌食になったのだ。

おかげでルルカは辛うじて命を繋ぎ止めることができたが、ルルカを庇ったアドルが深刻なダメージを負ったことは明らかである。

「ふん……そうか、そんなに早死にしたいかつ……！」
「ならば……貴様の血から吸ってやろう！」

蹲るアドルに向かって、ルードマンは切っ先を垂直に振り上げる。

「よ……よせつ　！！」

寸でのところで、周囲に制止の音が響き渡った。

アドルに突き立てかけたルードマンの凶刃が、寸前でピタリと止まる。

ギロリ、とルードマンは必死で叫んだ声の主を…… フォウルの方を睨み付けた。

「未来ある若者の命を奪うことはなかるう……　！」

それに、お前たちが用があるのはこのワシのはずじゃ。

彼らは何の関係もない。頼むから…… 見逃してやってくれ。

この老いぼれの…… 老い先短い命一つと引き換えに……　！」

言いながらフォウルはルードマンの前に歩み出る。

「ダ…… ダメです、フォウルさん……　！」

痛みを堪え、声を振り絞るアドル。

しかし、そんな言葉は頑固なフォウルの耳には届かない。

そして…… もちろん、冷徹な殺人鬼ルードマンの耳にも。

何も言わず…… 両者は互いにゆっくりと歩み寄る。

ざんっ
！

間合いが接近した瞬間、有無を言わずルードマンはフォウルの脇腹を斬り裂いた。

「がはっ……！ ぐっ……うううう……！」

大量の血を撒き散らしながら、フォウルはその場に蹲った。

そんなフォウルを、冷徹な表情で見下すルードマン。

「勘違いしてもらっては困る。老いさらばえた貴様の命一つ程度では何も救えやしない。

そんな安い命に、もはや何の価値もないのだからな。

……もつとも、そんなゴミのような命でも私はきつちりと奪わせてもらうがね。殺人は殺し屋の楽しみの一つでもあるのだからな」

「ぐっ……！ ど……どこまでも、汚い連中めっ……！」

倒れたまま殺意すらこもった眼差しでルードマンを睨み付けるフォウル。

しかし、ルードマンの表情は冷笑を浮かべたまま変わらない。

まるで最後の最後まで必死で足掻こうとする草食動物を弄ぶ凶悪な捕食者のように、倒れたフォウルを見下している。

そして……ゆっくりとその刃を振り被った。

「死ぬ。妄想ともつかぬ夢に無駄な時間を費やした下らない人生だったな」

もはや万事休すと覚悟を決めたのか……固く両の瞳を閉じるフォウル。

このままでは……フォウルも、アドルも殺されてしまう。

「おいルルカ！ 頼むから目を覚ましてくれって！
……おい、ルルカっ！！」

必死でルルカを呼び掛けるこんにやく。

窮地の事態が、光を失ったルルカの瞳にぼんやりと映った。

「っ ！？」

初めてルードマンの剣に動揺が走る。

振り下ろされ掛けた刃が止まった。

次の瞬間、空間が焼け尽くされんばかりの白い閃光が周囲に迸る。

「ぐああああっ ！！ な……何だあっ ？！」

閉ざされた視界の中から伝わって来る、ジェフの動揺の気配。

「…………… ！？」

正気を取り戻したルルカだが、突然の状況をすぐには把握することが出来た。

その場にいた全ての者から視界を奪った、バトル・シップの照明を覆い尽くすほどの眩い閃光。

ジェフがこれほど動揺するということは、この白い光は空賊たちが放ったものではないのだろう。

「飛び降りろ！」

間髪置かず、聞いたこともない誰かの声が響き渡った。

果たしてその声は味方のものか……はたまた敵のものか。

判然としなかったが、悠長にそれを選別しているだけの時間などない。

とにかく今はこの最悪の状況だけは脱しなければならぬのだ。

傷付いたフォウルを担ぎ上げ、アドルの手を引き、ワケも分からぬうちに、ルルカたちはバルコニーから飛び降りた。

「ふんっ、逃げよったか。
近くに仲間がいたらしいな……。
まあいい。これでゆっくりとヤツの研究資料を奪えるというものだ」

光が治まり、視界が回復したその後……遠ざかって行くエア・ライドのエンジン音を聞きつつ、ジェフは口元に再び厭らしい笑みを湛えて呟いた。

「……………」

対して、ルードマンの顔からはつい先程まで浮かんでいた笑みは消え去り、代わりに何やら神妙な表情を浮かべている。

「ど……どうかしたのか、ミスター・ルードマン？」

いつもとは様子の違うルードマンの表情を見て、怪訝な顔をして問い掛けるジエフ。

「私の目も耄碌したものだ。

てつきり丸腰だとばかり思っていたが……………」

ルードマンは右手で自分の頬を撫でる。

そこから流れ出すのは……………一筋の鮮血。

自分の体から流れ出す血を見たのなど……………一体いつ以来になることか。

一瞬のうちに付けられた頬の傷。

自分を傷付けたのは……………何のことはない。バルコニーに落ちていた小さな石ころだった。

ルードマンは無造作に足元の石ころを拾い上げた。

「ククク……………ちゃんと持っているではないか。
研ぎ澄まされた、鋭い牙を……………」

拾い上げた小さな石ころを握り潰すその表情に浮かぶのは……先
程までの冷笑などではない、嬉々とした高揚の笑みだった。

その13

「……ったくよー、じいさん。

あんたも無茶が過ぎるぜ。空賊相手に真っ向から喧嘩しようなんてよ。

ちったあ自分の歳考えてくれよな」

バルコニーから飛び乗った搬送用小型エア・シップの操縦席で、操縦桿を握りながら、その中年男は振り返りもせず荒っぽい口調でそう言った。

その声を聞いた途端、朦朧としていたフォウルの瞳に、再び生気が宿る。

「は……はて……？ デイズ……か。

お……お主のような性悪者がここにおるということは、どうやらここは天国ではないようじゃが……。

用心棒を頼んでおつたのは……明日からじゃと思っていたんじやがの……」

「なぐに。レーヴェル方向に不審なバトル・シップが飛んで行くのが見えたんで、妙な胸騒ぎがして予定前倒しでやって来たってわけよ。

空賊絡みのトラブル起こしそんな変わり者なんて、この辺りじゃあんたくらいしか思い浮かばねえからな」

言いながら、デイズと呼ばれた男は豪快に笑い声を上げた。

「用心棒……？ それじゃあ……この人が？」

在り合わせの救急用具で簡単にアドルとフォウルの応急手当をしながら、未だ状況が判然としないルルカはキョトンとした表情を浮かべたまま問い掛ける。

「うむ……。ワシの古い知人、機械技師のデイズ＝フォードじゃ」
窮地を脱したことに安堵感を覚えたのか、フォウルはしっかりと口調を取り戻してそう言った。

先程のバルコニーで巻き起こった白い光は、どうやらこの男が放った目眩ましの閃光弾だったようだ。

「よお、爺さん。この小娘と、もやしみてーな兄ちゃん是谁だ？
偏屈なあんたに、俺以外の友人がいるとは知らなかったが……」

肩越しにチラリとルルカやアドルに視線を送りつつ、不審めいた問い掛けるデイズ。

「彼らはワシの優秀な助手たちじゃよ」

「嘘つけ。あんたに助手が出来るわけがねえ」

「……………彼らは街で偶然出会い、ワシが無理を言って一時的に空賊から助けてもらった恩人じゃよ。」

お前さんたちには……本当にすまないことをしてしまったのう。
悪かった、許してやってくれ……」

デイズの皮肉を憮然とした表情で聞き流し、フォウルは伏し目にちにルルカたちに頭を垂れた。

屋敷の中で同じように謝られたときは何の謝罪の念も込められていなかったが……今度は本当に心の底から謝罪しているようだった。

「い……いいんですよ、気にしないで下さい。こうしてみんな無事に生きていられたんですし……」

「うん……そうね」

言ってルルカとアドルは互いに微笑を浮かべた。

幸いアドルとフォウルの傷は浅く、到底致命傷となり得るようなものではないようだった。

翩り殺しにする……というようなことを、あの男……ルードマンは言っていたが、どうやらこんな調子で浅い斬撃を繰り返し、ジワジワと傷付けていくつもりだったらしい。悪趣味なことこの上ない。

初太刀しか喰らっていないことが幸いしたが、もしあのまま助け船が来なかったとしたら、きっと今頃生き地獄を味わっていたことだろう。

そう考えると、再び背筋がぶるりと震え上がった。

「……となるとよ、関係ないこいつらはそこら辺に下ろしちまっていいわけだな」

不意に、素っ気ない口調でデイズが吐き捨てる。

その言葉を聞き、神妙な表情でフォウルは頷いた。

「うむ……そうしてくれ。これ以上彼らを巻き込み、危険に曝すわけにはいかぬ」

「ち……ちょっと待ってよ！」

勝手に話が進められ、慌ててルル力は声を上げた。

「ここまで巻き込まれといて、今さら後はもう知りませんだなんて言えないわ。

あいつらに今日やられた分だって十倍返しくらいにしてやらなきゃ気が済まないし……。

行くんでしょ……？ 北の白嶺海に。
私たちも一緒に行くわ！」

「目的地は……僕たちも同じなんです。
僕たちも連れて行って下さい。

この船で行けばルルカさんのエア・ライドの燃料代を払わなくていいですし、何より空賊たちより先に天空竜を発見しないと、スクープの価値が半減してしまいます……」

「お……お前さんたち……」

二人の決意に深い感銘を受け、胸を詰まらせるフオウル。アドルが呟いた余計な一言は聞こえなかったようだ。

ルル力はアドルと顔を見合わせ、互いに決心したかのように頷き合った。

彼が賛同してくれたのは意外だった。どうやらその裏には結構な

打算があつたらしいが……。

とはいえ、それはそれで好都合である。どちらにせよアドルから受けた依頼で白嶺海には行かなければならないのだ。

ただ……ルルカの本音としては、これ以上あの空賊たちや殺し屋とは関わり合いになりたくはないというのが正直なところだった。

強がりと言ったが、仕返する自信なんてもちろんあるわけがない。

あんな恐ろしい男と再会するのは……あんな死に目に合うのは、もう二度と御免であつた。

だが……。

遠い日の悪夢の中に……追憶の中に、あの殺し屋が浮かべた、あの蛇のようなねちりとした冷笑がフラッシュバックする。

もしかしたら……あの殺し屋は、失われたルルカの過去に何らかの形で関わっているのかもしれない。

父の失踪について……何か知っているかもしれない。

再会すれば今度こそ殺されてしまう可能性もある。何も知らない可能性も、何も語ってくれない可能性だってある。

それは、見返りの乏しい危険な賭けだった。

しかし、何も知ろうとしないまま立ち去れば絶対に後悔する。

父の失踪の理由を知りたいという強い思いだけがルル力を突き動かした。

「……………すまぬ」

「やれやれ……。そんな二人を連れて行って、一体何が出来るってんだ。

ま、じいさんがそう言うのなら俺は何にも言わねえがな」

呆れたように呟くデイズ。どうやら彼は二人の同行について厄介なお荷物が増えたといった程度にしか思っていないらしい。

それでもフォウルの決断に反対しないところを見ると、余程彼のことを信頼しているようだ。

「屋敷には……………もう戻ることは出来ん。

研究資料や天空竜の化石は……………もう既に奴らに奪われておるじゃろうからな。

奴らは間違いなく天空竜を狙ってすぐに動き出すはず……………。

もはや……………一刻の猶予もない。

白嶺海を……………北の白嶺海を目指すのじゃ」

その1

『盲目の剣聖』 カミオ シエル。

人々からそんな異名で呼ばれる父が、その二つ名に恥じることはない居合いの達人となり得たのには理由があった。

父がこの世に生を受けたとき、世界は戦争の真っ只中だった。

生まれつき目が見えなかった父。

家族は……父が幼少時に戦火に飲み込まれてしまった。

たった一人になってしまった戦乱の世には、自分を守ってくれる者など誰もいない。

だから……父は自分を守る術を手に入れるしかなかった。

自分の身を守り、荒廃した乱世を生き抜いていくために。

閉ざされた光の中で独自に磨き上げた剣術は、時と数多の戦地を経るにつれ、次第に洗練されていった。

いつしか、自分を守るためだけに振われていた剣は、強きを挫くようになり始める。

それとともに、父が剣を振う理由は、自分以外の弱者を守るために変わっていった。

ルル力の剣は、幼少時にそんな父から習ったものだった。

人を傷付けるためではない……父と同じように自分自身を、そして弱者たちを守っていくことができるように。

だからルル力が持つ刀に刃はない。

弱きを守るために、人の命までも奪う必要はないのだから。

数々の戦場を生き抜いてきた父が手にしていた刀も、同様だった。

きつと今も、父は無刃の刀を携え、どこかでまた弱きを救う旅をしているに違いない。

誰も傷付けることの出来ない、無刃の刀。

それが父と娘の心を繋ぐ唯一の絆の証になっている。

その2

「あ

っ
!!!!!!!!!!」

明け方に白み始める東の空。

誰もがまだまどろみにいる中……狭い機内に突如として大声が轟き渡った。

「ど……どうしたんですか……？」

さすがに間近であんな大声を上げられ、目が覚めてしまったのだろっ。

ぼんやりとした眼をこすりながら、アドルは大声を上げた張本人、ルルカにまだ眠たげな口調で問い掛ける。

「刀！」

「刀……？」

刀が……どうかしたんですか？」

「忘れちゃったのよ！ おじいちゃんのお屋敷に！」

言いながらルルカは頭を抱えてその場に蹲った。

「な……なんじゃ、なんじゃ？」

「何か忘れもんでもしたのかぁ……？」

騒ぎに気付いたフオウルやデイズも目を覚まし、怪訝な顔で、蹲るルルカの方を見遣る。

「あ……。おじいちゃん、おっさん。実は……」

「忘れたつつつても……。今さら取りに帰ることなんて出来やしねえぞ。」

あの空賊の連中が資料だけ奪って屋敷を手放したって保証はどこにもねえんだ」

「うん……。分かってる」

とりあえず事情を説明することはしたが……。どうしようもないことに変わりはなかった。

デイズの言う通り、刀を忘れたからといって悠長に取りに戻ることなんて出来るはずがない。ルルカたちは一刻も早く北の白嶺海を目指さなければならぬのだ。

それに、デイズの言った通り屋敷内にまだまだ空賊がいる可能性だってある。

刀一本程度でそこまでのリスクを犯すことは出来なかった。

「武器のことなら心配すんな。」

この船にはハンドガンにマシンガン、ライフルや手榴弾だつて積んである。

刀みてーな玩具一本なくなつて不自由するこたねえよ」

「そんな心配してんじゃないわよ！ あれは父さんからもらった大事なもののな　！！」

呑気なことを言うデイズに、ルルカはだんだん　！　と忌々しげに地団駄を踏みながら喚き散らした。

父にもらつてから昨日までずっと、肌身離さず大切に持っていた大切な刀である。

突然の襲撃があつたからとはいえ、それを失つてしまったルルカの胸中は穏やかではなかった。

「そうか……あの刀はカミオ殿の形見じゃったか。それは困つたのう」

父やルルカの剣技のことを知るフォウルも、一緒になつて困り顔を浮かべる。

対して……事情を全く知らないデイズだけはキョトンとしたような表情を浮かべていた。

「カミオ？　誰だい、そりゃあ」

「……お主にはおそらく一生縁のない聖人じゃよ。
このルルカさんの父親でもある」

フオウルの説明を聞いてもデイズの表情は変わらなかった。どうやら盲目の剣聖カミオ「シエル」のことを露ほども知らないようである。

ただ、刀が大切な物であるということだけは理解したようだった。

「ふん、そうか……。親父さんの遺品だったか。

そりやどうにかして取りに行かねえとな」

「遺品じゃないっての！勝手に殺さないでよね」

無神経なデイズの一言に、ルル力は憤慨して鼻息を荒げる。

「ですが困りましたね……。刀がないルル力さんなんて、ただのがめつくて横暴な質の悪い女の子じゃないですか。

一緒に行ったところでストレス要因にしか……。いててててて

！！ごっ、ごめんなさい冗談です！！ ゆゆゆ、許して上

げて下さい！！

コ……。コブラツイストは……。コブラツイストはやめてっ！！」

またも無神経なことを言い掛けるアドルの言葉を最後まで聞き届けることもせず、ルル力は容赦なくコブラツイストでアドルの体を締め上げる。

しかしアドルから必死の高速タップアウトを受け、仕方なくそれを振り解いた。

「ふーっ！ふーっ！……ふんっ！

……ったく、こっちはあんたの下らない冗談に付き合ってる場合じゃないっての。ちよっと黙っててよね」

「まあ、ルル力さんや。心配しなさんな。
奴らも刀まで目敏く奪いはせんじやろ。刀は後でゆっくりと取りに戻ればいい」

ルル力を宿めるようにして、呟くフォウル。

いくら気持ちを逸らせても状況は何も変わりはない。

そんなことよりも今の状況下でこの先どうしていくのかを考えた方がよっぽど建設的である。

確かに彼の言う通りだった。

フォウルの言葉で、少し気持ちの落ち着いたルル力の考えの切り替えは早かった。

しかし……フォウルの目はどこか遠くを見ている。

その表情は、本当に一空賊団や、あの殺し屋に相対して生きて帰ることが出来るのだろうか……という疑念を……、その場にいた全員の気持ちを代弁しているかのようにだった。

その3

蒼天の元、機械技師ディズ・フォードの操縦する搬送用小型エア・シップ『セブン・フィーバー号』は、快調に空を飛び続ける。

エア・シップ内で一夜を過ごしたルルカたちは、途中、レーヴェルの街に停留させていたフライド・チキンを回収すると、アドルとフォウルの傷を見てもらうために朝一番で病院に立ち寄った以外ではずっと空を飛び続けている。

幸い二人の傷はやはり軽傷だったようで、簡単に傷口を縫合してもらっただけで入院の必要まではなかった。

だが、二人ともまだまだ無理は禁物である。特にフォウルは高齢である。何が体に触るか分からないのだ。医者からは絶対安静が言い付けられている。

ただ、周囲の心配をよそに気持ちを逸らせる本人は全く安静にする気はないようであるが……。

ディズはフォウルの数少ない理解者だったようだ。

レーヴェルの隣町で『アイゼン・エール』というエア・ライドシヨップを営む機械技師で、空を愛するフォウルに共感する古い知人であるらしい。

用心棒を頼まれるだけのことはあって腕っ節が強く、趣味で集め始めたという銃火器の扱いにも慣れているらしく、現状としては頼もしい味方が増えたといってもよかった。

刀を屋敷に忘れたルルカも、アドルもフォウルも護身用として小型のハンドガンを持たせてもらっている。だが……もちろん、全員銃など扱ったことはない。

デイズの射撃の腕の程は定かではないが、こんなことで、もしも再びあの空賊や殺し屋と遭遇したときに、対抗することができるのか……そんな不安は払拭できないでいた。

「どう？ 傷の具合」

セブン・フィーバー号内で、手持無沙汰気味にぼんやりと窓の外を眺めていたアドルに、ルルカは問い掛ける。

セブン・フィーバー号はデイズが製造したエア・ライドを客の元に搬送するための役割を持つ船だった。本来旅客用として開発されたエア・シップとしては異例の小型さである。

おかげでルルカのフライド・チキンも積んで飛ぶことが出来るのだが、人が乗ることが想定されていなかったため四人で乗れば機内は少し窮屈さを感じた。

心配するルルカをよそに、アドルは呑気な笑みを浮かべる。

「ああ、ルルカさん。なぐに、心配することはありませんよ。前にも話しましたが、体の丈夫さだけが僕の唯一の自慢ですからね。」

これくらいの傷、何てことありませんよ」

「そっか……。まあ大した怪我じゃなくてよかったね。」

それから、えつと……。

あ、ありがとね。その……あのとき、助けてくれて」

照れ臭さも相俟って多少口ごもりながらも、自分を身を呈して守ってくれたアドルに対して素直にお礼を言うルルカ。

珍しく素直なルルカの態度に、アドルはキョトンとした表情を浮かべる。

「いやいや、何を言ってるんですか。僕もこれで一応男ですからね。女の子を庇うのは当然のことですよ。

でも、怖くて動けなくなるなんて……鬼のようなルルカさんにも意外と女の子らしい部分があったんですね！ 安心しましたよ。はっはっはっはっはっはっは！」

「……さっきのありがとっは取り消すわ」

予想外に元気なアドルを見て、嘆息するルルカ。憎まれ口も健在である。

死に目に遭ったという自覚もないのだろう……。この男に『心配』という言葉は必要ないのかもしれない。

溜め息一つつきながら席を立ち、ルルカは少し風にも当たろうと狭いデッキの方へ足を運んだ。

「なあ、ルルカ。一体何があったってんだよ？」

吹き荒ぶ強い風を受けながら、ルル力が眼下の景色を眺めていると、周囲に人の気配がなくなったのを確認して、フードの中からこんにゃくがもそもそと這い出て来た。

「……ん？ 何が」

「何が……って、昨日の夜のことだよ。」

いきなりどつか遠くにでも行っちゃまったみてーに、ピクリとも動かなくなるなんて……。呼んだって全然返事もしてくれねーし。あの兄ちゃん怖くて動けなくなった、なんて言ってたけどよ……あれは何か怖がってるってのとはちよつと違う感じがしたんだよな。

何か……ほかの理由があつたんじゃないのか？」

「……………」

よく見ているな……とルル力は感心する。

自分でもそんな状態になっていたなんて気付かなかった。

胸の奥に蟠る……一番の大きなしこり。

こんにゃくにだけは、きちんと話しておかなければならないなと思っただ。

「マジかよ……。あの殺し屋野郎が、もしかしたらルルカの過去に関わってるかもしれないってのかよ……」

ルルカの話聞き、こんにやくは啞然として呟いた。

「うん……。もしかしたら私のただの勘違いかもしれないし、それを聞いても何も答えてくれないかもしれない……」。

それに、もしも次に会ったら今度こそ殺されちゃう可能性だってあるわ。

でも、やっぱり何もせずにいたら後で絶対に後悔すると思うから……。

だから……私は、行く。

こんにやくは……。それでも着いて来てくれる？」

躊躇いがちに問い掛けるルルカ。

これはあくまでもルルカ自身の問題である。先程も言ったように、下手をすれば殺されてしまう可能性もあるのだ。

ルルカ自身の手でケリを着けなければならない。

いくら付き合いが長いとはいえ、こんにやくまでも巻き込んでしまっわけにはいかないのだ。

しかし……。そんなルルカの懸念をよそに、こんにやくは無駄にその小さな胸を張る。

「な〜に言っただ ! そんなの聞くまでもねーだろ !
おれとルルカの仲じゃねーか !
おれは最後までルルカに付き合っよ」

考えや打算など、何もなく……こんにゃくは即答してくれた。

ルルカの危険な賭けに付き合う覚悟をしてくれたのだ。

小さな彼がこのときだけは妙に頼もしく見えた。

「こんにゃく……ありがとう」

やがて……北の空が徐々に白み始めて来る。

間もなく、大皇雲の連なりで出来る白き領域、白嶺海である。

その4

『大空に白い海が広がっている』

初めて白嶺海を発見した開拓者が残した一言であるが、随分うまいことを言ったものだ……と、小さなエア・シップの中から壮大な大空を見上げてルル力は思った。

白嶺海へ来るのは彼女も初めてだった。

いつも見上げていた広大な青空は、そこにはない。

見渡す限り、天一面が真っ白。

大空に敷き詰められた純白のヴェールに隙間はない。いつもなら力強く降り注ぐ日の光は、分厚い雲の障壁に阻まれ、ぼんやりと弱々しく、頼りない光を地上に届けるのみ。

まるで自分はどこか別の世界に迷い込んでしまったのではないか……という妙な錯覚を覚えてしまいそうな光景がそこにはあった。

「（うわぁ……空が真っ白だ！）」

フードの中からこんにゃくが声を漏らす。普段は美女のいる風景にしか興味を示さない彼も、さすがにこの景色を前にしては感嘆せざるを得なかったようだ。

「白嶺海に入ったか……」

恍惚とした表情で呟くフオウル。

ルルカもゴクリと息を呑んだ。

「この広い雲の海のどこかに、天空竜がいるのね……」

「じいさん……どうすんだ？」

チラリと肩越しに視線を送りつつ、操縦席のディスプレイが問い掛ける。

操縦桿を握る彼も白嶺海へは初めて来るようで、その口調に若干の戸惑いを感じられた。

「うむ。とりあえず『ディエル・ダーナ』の街を目指そう。

ワシが初めて白嶺海の調査に行ったときに拠点としていた街じゃ。あそこなら勝手も分かる」

「行ったあとはどうするんです？ 天空竜を探そうにも、都合よくまた大嵐が発生してくれるとは限りませんよ」

一心にシャッターを切りまくっていたアドルも、不意にその手を止めて疑問の表情を浮かべる。

とにかく白嶺海を目指すことを優先させていたが、思えばそこから具体的にどう行動するのかということは何も聞かされていない。

フオウル以外の全員が、初めて訪れる白嶺海。

誰もが戸惑いを隠しきれない中、しかしただ一人、フオウルは落ち着いた様子で口元に蓄えた白い髭を撫でながら、

「それについては……ワシに考えがある。とにかくディエルダーナの街へ行つて、準備を整えよう」

その5

『神秘の都ディエル＝ダーナ』

天高く聳え立つ霊山『リア＝グランデ』をシンボルとする、標高高い山沿いの街である。

文化水準は決して高くなく、五十年前の技術革新の飛躍的な動力革命の影響も受けず、街は昔ながらの姿を保っている。

時代に取り残された秘境。

良くも悪くも、ディエル＝ダーナはそんな街だった。

文明を受け入れることなく独自に発展を遂げた街は、建物の形状や人々の服装も独特な雰囲気を持っており、木枠の窓を持つ白いレンガ造りの家々が石畳の敷き詰められた通りに軒を連ね、人々は所々に民族的な刺繍の施された丈長の貫頭衣を身に付けている。

街にはエア・シップはおろかエア・ライドの停留場すらない。

「まさに辺境の地って感じね……」

街外れの広場にセブン・フィーバー号を止め、窓の外の街の様子を見たルルカはポツリと呟いた。

標高が高く、そして日の光が直接届かないこともあるせいか、機内においてさえ空気は少し肌寒い。

「帰って来たか……」

ルルカの隣で昔を懐かしむかのように街を眺めるフォウル。

ここは彼にとっての思い出の街。

恍惚とした表情を浮かべるその横顔は、当時のことで色々と思うところがあるのかもしれない。

「おい、じいさん。いい加減に教えてくれよ。こつから一体どうするってんだ？」

セブン・フィーバー号のエンジンを停止させながら、デイズが問い掛ける。

エンジンが止まるとともに機内の振動が止まり、徐々に冷たい空気が差し込み始める。外はかなり寒いようだ。

「あの山を見てくれ」

フォウルは遠く窓の外、街のほぼ中央部に聳え立つ巨大な山を指差した。

「靈山リア＝グランデ。ディエルダーナの民にとっては聖なる地じや。」

元々ディエル＝ダーナの街は、リア＝グランデを守ろうとする民族が集まって発展した街なんじゃ。

白嶺海へ入る方法は……長い歴史の中で研究者や冒険者たちの手によって幾多の研究、実験がなされてきた。

もちろん、その全てがうまくいったわけではない。そこには数々

の犠牲があつた。

じゃが……中にはかすかな可能性を残したものもある。

このリアーグランデを利用するというのも、その一つじゃ

あの日……白嶺海の調査に行った、あの大嵐の日……。

ワシらはいつの間にか白嶺海の中に紛れ込んでいた……。

おそらく大嵐で航路を見失ったワシらは、知らず知らずのうちに
リアーグランデを伝い、白嶺海の中に入ってしまったのじゃろう……。

確証があるわけではない……。じゃが、雲を突き抜ける高さを持つあの山に沿って天に昇れば、理論的には白嶺海の中に入ることも十分に可能なはずじゃ」

「確かに……その方法ならば、あの分厚い雲塊に阻まれる心配はありませんね。

でもその白嶺海の中に入る方法、フォウルさんの研究資料の中には……」

「……記してある。あの空賊たちも、間違いなくこの街を訪れるじやろう」

アドルの問い掛けに、フォウルは苦々しい表情を浮かべて答えた。

街にエア・シップの停留施設はない。フォウルの屋敷よりも大きなあのバトル・シップを停めるには、セブン・ファイバー号と同じように街外れの空き地を利用するしかないはずだが、周囲にはあのバトル・シップの影も形も見えない。

果たして、敵船の到着前か、はたまたその後なのか……。

少なくとも、ここからでは窺い知ることは出来なかった。

「じゃが……白嶺海付近は気流の嵐。下手をすれば機体が粉々になっってしまう可能性もある。いかに奴らが巨大なバトル・シップを保持しているとはいえ、そう簡単には入れんはずじゃ」

「げっ！　で……でも、それって私たちにも同じことが言えるんじゃない……」

思わず声を上げるルルカ。

しかし、フォウルは落ち着いた表情で首を横に振りながら、操縦席の方をチラリと見遣る。

「案ずることはない。じゃからワシがもつとも信頼をおく機械技師に同行を願ったんじゃ」

矢庭に言われて、フォウルの視線の先……操縦席にいたデイズは一瞬だけキョトンとしたような表情を浮かべる。

しかし、すぐに何やら褒められたのだと悟ったのか、大威張りに胸を張った。

「だっはっはっはっは、何でえそういうことだったってのか！！」

心配すんな、この俺様のセブン・フィーバー号が気流なんかには負けるはずはねえよ。大船に乗ったつもりでいやがれってんだ！」

「見るからに小舟ですけどね」

「な……何だと、このもやし小僧　！！」

アドルの余計な一言を耳ざとく聞き付けたデイズは、額に青筋を浮かべながら思い切りその胸倉を掴み上げた。

軽く聞き流していた……というか、今まで聞き逃していたらしいフォウルと比べると、かなり乱暴な反応であったが、おそらくこれがごく普通の一般人の反応だろう。

そんな二人の間に、ルルカは面倒臭そうに割って入る。

「はいはい、こんなところでケンカしないの。でもそのリアングランデって、ここの人たちにとっては神聖な場所なんでしょ？ 勝手に入ったりして怒られたりしないの？」

「もちろん許可は必要じゃ。」

無断で靈山に立ち入った者には厳格な罰が科せられる。

じゃが……心配はするな。こここの領主とはかつての研究で訪れたときに知り合っておる。事情を話せば快く許可してもらえるじゃろう」

頼もしく胸を張るフォウルは、逸早く下船の支度を整え終えた。

「さあ、それでは早速準備を始めよう。もたもたしてはおれんぞ。外は思っているより寒い。まずは街の仕立屋で防寒着の用意じゃ」

表通りは思った以上に閑散としていた。

フォウルの話によると、いつもならたくさんの露店が軒を連ね、多くの人々が行き交い大変な賑わいを見せているらしいのだが……人通りは、疎ら。

たまに人の姿も見掛けるが……皆そそくさと、どこか余所余所しげに通りを足早に過ぎ去っていく。

どうにも、その様子がおかしい。

この街には、他の街では当たり前のように見られた、笑顔や活気といったものがまるでないのだ。

通りを行きながら、家々の中をちらりと覗いて見ると、何か不安に駆られているのか……互いに抱き合う者たち、天に向かって一心に祈りを捧げる者たちなど……その様子はとても普通とは思えなかった。

街全体が……何故だか騒然としている。

「何だつてんだ？ この街の連中はいつもこんなのか？」

そんな様子を目の当たりにして、眉間に皺を寄せて呟くデイズ。

フォウルも首を傾げた。

「はて……？ 以前来た時はこのような光景は見受けられなかったんじゃないか……」

釈然としないながらも、四人と一匹は街の仕立屋に向かう。

数十年前にフオウルがこの街に訪れたときにも、そこで調査の準備をしたらしい。

数十年前の店が未だ健在なのだろうか……とルル力たちは半信半疑だったが、時の流れがゆつたりと進むこの街は『変化』という言葉に疎いらしく、驚いたことにその店はまだ残されていた。

ただ……一つだけ問題が。

店の扉が固く閉ざされているのだ。

「あつたことにはあつたけど……潰れちゃってる？」

「中の明りは点いておる。人はおるはずじゃ」

ルル力の呟きを丸つきり無視し、フオウルは店の中に大声で呼びかけながら、乱暴に扉を叩き始める。

その横暴な行動に肝を冷やすルル力たち。

ややもせぬうちに、店の中に人の気配が生じた。

勢いよくその扉が開かれる。

「何だつてんだ！　こんなときに！」

中から姿を現したのは、この店の店主と思しき一人の中年男。

どうやら開けていなかっただけで、店自体はまだちゃんと営業し

ているらしい。乱暴に呼び出されたせいで、その機嫌はすこぶる悪いようではあったが。

しかし……店主の男の姿を見たフォウルは、一人訝しげな表情を浮かべる。

「……誰じゃ、お前さんは？　ここはダニー＝ルースの店じゃったと思うが」

「ダニーは俺の親父だ。とつくの昔にあの世に行っちゃってる。俺はアレク。この店は息子の俺が引き継いでいる」

「何と……。そうじゃったのか……」

アレクと名乗った男の説明を聞いたフォウルは、ガックリと肩を落とした。

その反応を見るに、どうやらよほどこの店に……そして前の店主に思い入れがあったらしい。

しかし、そんな事情など丸つきり知らない現店主のアレクは、勝手に肩を落とすフォウルの姿を見て、不審めいた表情で眉間に皺を寄せる。

「……一体何だっただよ。

あんたたち、他所者だな？

チツ、今日は他所者がよく来る日だぜ……。

一体何の用でここまで来たのかは知らんが、帰ってくれ。他所者はこの地に厄災しかもたらさん」

言い終えると同時に、アレクはルルカたちの反応も見ずに一方的に扉を閉めようとする。

しかし、

「ち……ちよつと待って！」

慌ててルルカは扉の間に足を挟んだ。

「あなた今『他所者』って言ったけど……私たち以外にも街の外から来た人がいるってことよね？」

それって、もしかして……」

「あん、何だよ。あいつらのこと……心当たりがあるってのか？」

まつ……まさか……お前たち、あの空賊どもの仲間か？！」

アレクの言葉に、ルルカたちの表情に動揺の色が滲んだ。

その6

目の前に蟠っていたのは……ただ、圧倒的な『闇』のみであった。

少女の瞳の中は闇で覆い尽くされていた。

暗く、深く、どす黒い憎悪のようなものを纏った深淵の闇。

数日前より、闇は少女の意識を侵食するかのように、深く、広く蟠り続けている。

しかし……今日、そんな闇に抗うかのように、闇の奥底から浮かび上がる、一つの『光』が現れた。

圧倒的な闇と比べると、ひどく儂く、脆弱な光。

だが、漆黒の中で唯一必死で輝こうとするその光はとても頼もしくも思えた。

「……………」

「いかなされましたか、メイリ才様？」

広い、広いその部屋の中で頭を擡げていた少女の側で、側衛官らしき男が問い掛ける。

自分の名を呼ぶその声に現実引き戻された少女は、少し痛む頭を押さえながら側衛官の方に視線を向けた。

「……光だ」

「……光？」

「そう……光が見えた。」

ひどく微弱で……不安定で、ともすれば消え入ってしまいそうなほど儚い光だ……。

だが、『闇』に抗おうとする確かな意志を持っている。

もしかしたら……我らの助けになるかもしれぬ」

同じような『光』を、少女はどこかで感じたことがあった。

もつとも、以前感じた光と比べると、今回のものは圧倒的に小さな光ではあったが。

「来たようだ……。『剣聖』の力を継ぐ者が」

「そうか……。あなた、親父の馴染みの客だったのか。そりゃあさつきはすまなかったな」

ルルカたちがこのディエル・ダーナの街を訪れた理由を説明すると、アレクは快く店の中へ招いてくれた。

天空竜……という言葉聞いても、アレクは少しも訝ることをしなかった。この街には古くから天空竜に纏わる伝説や数々の目撃証言が残され、フォウルのような研究者もたくさん訪れていたため、天空竜の存在を信じている者も大勢いるらしい。

フォウルとアレクの面識はなかった。どうやらフォウルが以前この店を訪れたのは、アレクが生まれる少し前のことだったようだ。

「それよりも……詳しく教えて。空賊がこの街に来たの？」

店内で寒さにも耐えられる少し厚手のジャケットを見繕いながら問い掛けるルルカ。ほかの三人も、思い思いの上着を選んでいる。

ルルカの問い掛けに、アレクは苦々しい表情を浮かべながら

「ああ……。あの空賊団が来たのは、今日の早朝のことだよ。はつきり言つて、こんな辺境の地に空賊が現れることなんてほとんどない。

文化水準だつて低いこの街の、一体何を奪いに来たのかつて皆不安がつてた。だが、あの空賊団は街に立ち寄ることはしなかった。代わりに……奴ら一体何を考えているのか、この街の領主である

メイリオ様の許可を得ずして、あの大きな船で勝手に靈山リアッグランデを登り始めやがったんだ」

「ぐぬぬ……やはり奴ら、逸早く行動を起こしておったか……」

齒噛みするフオウル。完全に空賊たちに遅れをとってしまったというわけである。

彼らが天空竜を見付けられるという保証はないが、やはり先をとっていた方が有利に決まっている。後手に回ってしまったことで、こちら側の不利要素が一つ確定してしまった。

「なるほど……。それで街の人たちの様子がおかしかったってわけね。

でも、その靈山を上がるのってそんなにとんでもないことなの？
この街の人たちの騒ぎようは、ちよつと普通の感じじゃあなかったんだけど……」

滅多に現れることのない空賊たちにより、この街の人たちがあんなにも不安になっていたことは分かったが、それにしてもあの脅えようは少し異様だった。

あれは、空賊などではなく、何か別のものに脅えているような……
……そんな感じがした。

「靈山リアッグランデは、このディエルダーナの民にとって神聖な地だ。

勝手に足を踏み入れたら嚴罰が科せられる。

だが、相手は空賊。俺たちのルールなんて通用するはずがない。
誰にも奴らの行動を止めることが出来なかった……。

ただ、奴らが何も略奪をしないのなら、それでいい。皆自分の命や財産のことの方がよっぽど大切だからな。

この街の者たちがこんなにも不安になって騒いでいる原因はな…
…領主メイリオ様の先日のご発言にあるんだ」

「『メイリオ』？ この街の領主殿は、そんな名前じゃったかう？」

アレクの説明を聞いて眉を顰めて宙を仰ぐフオウルだが、そんな彼の肩をデイズがポンと叩く。

「じいさん、何十年も経てば領主ぐらい変わってるだろうよ」

「いや、この地の領主さまは代々世襲によって受け継がれてきた。フオウルさんが不思議がるのも無理はないよ。」

前領主『シャー・ラジエンドラ』様は、二年前御病気により退位なされた。

ディエル＝ダーナの地は代々ラジエンドラ家によって治められてきたんだが、十五代のシャー様にはご息がおらず、領主の座は実質空位になってしまったんだ。

そこで、新しい領主をどうするか……という議題が生まれたんだが、前領主や街の者も満場一致の賛成で、代々側近として務めていた『メイリオ』家から、末の『リーファ＝メイリオ』様がわずか十一歳にして、この街の新領主に選ばれたのさ」

「じゅ……十一歳？！」

思わず声を上げる一同。『領主』と聞き、想像したものとは大きくかけ離れる幼さだった。

「まだ子どもじゃあないですか。そんな子どもに領主の座を譲り渡すなんて、この街の人たちは正気なんですか？」

「確かに不思議がるのも無理はない。普通は十一歳のお子様に領主の座なんて務まるはずがないと考えるのが常識だ。

しかしな、メイリオ家には……とりわけリーファ様には、それでも周りを納得させてしまうような、ある『力』をお持ちになられていたのさ」

「力？」

「ああ……」

眉を顰めるルルカたちに対して、アレクはきっぱりとした口調で告げた。

「『予知能力』さ」

「予知能力？」

突然の突拍子もない発言に、ルルカたちはキョトンとした表情を浮かべる。

馴染みのない言葉を耳にして、アレクが何のことを言っているのかすぐには理解出来ないでいた。

しかし、

「はっはっはっはっはっは　！　冗談キツイですよ、アレクさん。」

予知能力なんて、空想世界のお話じゃあないですし……」

戸惑う一同をよそに、真っ先に口を開いたのは、やはり無神経人間のアドル。アレクが冗談を言っているものと軽い笑い声を上げ始める。

しかし、対してアレクは気分を害するわけでもなく、真剣な表情で首を横に振った。

「いや……メイリオ家の予知能力は本物だよ。祭祀にあつては常にその卓越した能力を持つて、この地の吉凶を占つて来られた。だからこそ代々領主であつたラジェンドラ家の側近として務めてきたんだ。」

特に……末のリーファ様の能力は、一族の中でもとりわけ強い。一年前のヴァングレイド戦争の終結のことも、十五代シャー様のご病気のこともピタリと言い当てられた。

それだけに……今回街の者たちが不安に駆られて当然だったんだ。空賊たちが来る、ほんの数日前のことだ。

リーファ様はとんでもない御神託を受けられたんだ……」

アレクの目は真剣そのものだった。

当初皆、冗談めいた発言を半信半疑に聞いていたが、知らず知らずのうちにその真剣な眼差しに引き込まれ、ゴクリと息を呑む。

「リーファ様は大聖壇にてその御神託を告げられた。
『空が落ちる』……と」

その7

自分の胸の中の鼓動が強く脈打つのを、男は感じていた。

こんなに気分が高鳴るのは……一体いつ以来のこととなるだろう。

脈打つ鼓動は、自分が間違いなく生きているということ強く感じさせた。

本来ならば、一度は失っていたはずの命。

男は生かされた。

自分以外の誰かの助けを得て。

もしも『あのとき』一人だったら……男はきっと死んでいた。

だが、それ以来『生きる』ということが一体どういうことなのか……自分は一体何のために生きているのか……ということ強く感じるようになった。

自分を殺そうとした者たちも、自分を助けた者たちも……皆、死んだ。

片や人の命を奪おうとし、片や人の命を救おうとした者たち。

両者の中に宿る『魂の色』は全く異なるものだったはずだった。

だが……無惨に命を散らした最期は、両者とも全く同じ。

一体何が善で、何が悪なのか。

何も分からなくなった。

生き永らえた男は、生を得るとともに激しい苦悩に苛まれ続けることとなる。

「……………」

耳の奥が痛む。

徐々に窓の外が白み始めてきていた。

どうやらもう既にかなりの高度まで昇って来たらしい。

機はもつすぐ白嶺海の中に入るだろう。

高鳴る鼓動は『生』を認識させると同時に、おぞましい程の嫌悪感を自分を感じさせた。

「血だ……。血が足りんな」

ボソリ……と低い声で呟きながら、男は……ルードマンは手元の『二本』の刀に視線を落とす。

自分が斬った人間から流れ出す血を見ているときだけは、唯一苦悩から解放された。

血の臭いだけが、自分を激しい乾きから癒してくれる。

その瞬間こそが、至高の瞬間だった。

「奴らは間違いなく雲の中にやって来る。

ククク……今度こそ、よき殺し合いが出来そうだ」

激しい殺意を湛えながら、空賊ジェフルーガーや殺し屋ルードマンを乗せたバトル・シップは白嶺海の中を目指す。

その8

『空が落ちる』。

その言葉は抽象的過ぎて、一体何を意味しているのか窺い知ることは出来なかった。

街の者たちの大半は、やはりそれが悪いことを意味しているのだと予想しており、だからこそ街全体は騒然としていた。

推測はいくらでも出来る。だが、していけばそれこそきりが無い。

そんなことよりも、とにかく今はリア＝グランデへと登る許可を得なければならぬのだ。

空賊たちよりも後手に回ってしまったということとは既に確定済みである。

これ以上もたたしてなどいられない。

ルルカとこんにやく、そしてフォウルは、領主リーファ＝メイリオが住むという『大聖壇』という建物を目指していた。

アレクの話では、先日のリーファ＝メイリオが受けた不吉な神託のせいで大聖壇には人々が殺到し、周囲には厳戒態勢が敷かれているらしい。

その神託が、今朝突然現れた空賊団と何か関連しているかもしれない……というのが、この街の者たちの大多数の意見。今日は特に混雑しているだろう。

大人数でぞろぞろ押し掛けるわけにもいかないし、エア・シップの整備やほかの準備もあるため、アドルとデイズには先にセブン・フイバー号に戻ってもらっている。

ただ……少人数で行ったからといっても、領主に会える可能性は低い。

「先代領主であるラジェンドラ家の者じゃったら、ワシも多少なりとも面識があった。事情を話せばリア「グランデへの登頂許可ももらえらると思っっていたんじゃが……」

大聖壇を目指し大通りを歩きながら、力無く呟くフオウル。

想定外の事態の発生と、空賊たちに遅れをとったことにより、その表情には若干の焦りが見られる。

アレクから聞いた話によると、新領主リーファ「メイリオはとにかく人嫌いで、滅多に人前に姿を現すことはないし、謁見にもほとんど応じないらしい。

人々が押し寄せる今の状況であれば、会うのは本当に至難の業だろう。

「困ったわね。いつそのこと、私たちも勝手に登っちゃうってのはどう？」

「（おつ、そりゃいい考えだな。さっすがルルカ。悪知恵が働くぜ）」

「そ……それだけは絶対にならん！」

ルルかとこんにやくがグッドアイデアだと思った考えを、しかしフオウルは激しく唾を撒き散らしながら否定した。

「何度も言うが、靈山リア＝グランデはこの地の民にとっては聖なる地……」。

無断登頂が知れたら市中引回しか、はたまた縛首か……。

とにかく嚴罰を受けることは必至。登頂許可は絶対に得なければならぬ。

それに……いくら急いでいるとはいえ、あの汚い空賊どもと同じ卑怯な手段など絶対にとることは出来ぬ」

「じゃあどうするっての？　このまま大聖壇に行っただって、絶対に合わせてもらえないわよ」

「うゝむ……確かに、この状況下で謁見を申し出ても、取り合ってもらえる可能性は低いじやろう……」。

そうじゃ　！　お前さんの無駄に高い身体能力を生かして、大聖壇に侵入するというのはどうじゃ？」

「……それって勝手に山登りしちゃうのと何が違うのよ。大体、そんなこととして領主さんに会ったとしても、こっちが何か言う前に摘み出されるに決まってるじゃん」

「そ……そうか……」。

うゝむ……本当に困ったのう……」

頭を抱えるフオウル。

考えが纏まらぬまま、二人は歩を進める。

やがて……二人の視界の先に、他の建物よりも一際背が高く、大きな建物が見えてくる。

大聖壇。

ディエルⅡダーナ領主、リーファⅡメイリオの住む屋敷である。

その9

「……来たか」

闇に抗うかのように、瞳の裏で輝く光の気配が近付いてくる。

近くにあつてさえ、ひどく不安定で、儚い光。

しかし、やはりそれは確かな『意志』を持っている。

少女は目を見開くと同時に、控えていた側衛官に向かって目配せする。

「連れて参れ。ここへ。
剣聖の力を継ぐ者を」

「（うへえ……すっげえ人ゴミ）」

「こりゃ、やっぱり事情の説明すら出来る状況じゃないわね」

目の前でこつた返す人混みを見て、ルルかとこんにゃくは揃ってゲンナリとした表情を浮かべる。

外壁で覆われた大聖壇の正面門は見上げるほど高い。

その前に……ざっと見ておおよそ百人程度だろうか。とにかく、表通りで見掛けた人たちよりも圧倒的に多い人々がそこに群がっている。

「やはり忍び込むしかないか……」

そんな人ゴミを目の当たりにして呟くフォウルの目は本気だった。

大聖壇の周りをキョロキョロと見渡し、侵入できる場所を探そうとしている。

「てかさ、街がこれだけ混乱してるんだったら、やっぱりこつそり登っちゃっても誰も気付かないんじゃない？」

しかし、そんなフォウルの意見を遮って何気なく呟くルルカ。

表通りに人の姿はほとんど見られない。外に出ている人は、大半がこの大聖壇の前に集まっている。残りは各々の家の中で恐れ、戦き、天に向かって一心に祈りを捧げるばかり。

街の人たちの注意力は散漫になっている。今なら無断でリアッグランデに登っても、気付かれない可能性が高い。

「いや、やはり許可は得ておかねばならぬ。忍び込もう」

しかし、フオウルは頑として考えを曲げない。意地でも自分の意見を通そうとするようだ。

「だ〜から、そんなことしたって取り合ってもらえないってば！
事情が事情なんだから、勝手に登っても後でちゃんと説明したら許してもらえって」

「嫌じゃ、嫌じゃ！ バレたら厳罰じゃぞ、厳罰！ わしはまだ死にとくない！」

意見が噛み合わず、人目もはばからず言い合いを始めるルルカとフオウル。

もっとも、正門の前で大騒ぎする群集の中に二人のやりとりを気にする者など誰もいなかったが。

しかし、

「……『盲目の剣聖』の関係者ですね？」

そんな男の声と同時に、突然背後からポンと背を叩かれた。

ルルカの肩がビクンと跳ね上がる。

振り返ると、そこには周りの群集たちが身に付けている貫頭衣よりも少し多めの装飾が施され、上等な生地で作られた衣装を纏う一人の男が。

一見してこの街の有力者と分かる格好だ。領主家の関係者か何かだろうか。

瞬時にして冷や汗を掻き始めるルルカ。

『忍び込む』、『勝手に登る』等の物騒な話をしていた最中である。もしかしたら会話の内容を聞かれ、咎められる………だけならまだいいが、最悪街を追い出されてしまうかもしれない。

しかし、男が発した言葉をよくよく思い出し、ルルカはキョトンとした表情を浮かべる。

「えっ……、い……いま何て……？」

「あなた方は盲目の剣聖の関係者の方たちですね？」

念を押すかのように、再び全く同じ文言で問い掛ける男。

「え……？ えっと、その……」

「いかにも、この娘は盲目の剣聖カミオシエル殿の実の娘さんじやが……」。

お主、一体何故それを？」

戸惑い口ごもるルルカの代わりにフォウルは問い掛けるが、しかし男はフォウルの言葉を確認すると、満足げに頷き、答える代わりに手を差し伸べる。

「こちらです、ついて来て下さい。領主リーファ・メイリ才様がお会いになります」

「……………」

何かなんだか分からず、キョトンとして顔を見合わせるルルカと
フォウル。

事情は全く分からない。

一体何故、男はルルカがカミオ＝シエルの関係者であるということ
を知っているのか。

一体何故、厳戒態勢が敷かれる中、ルルカたちを大聖壇に招く
のか。

しかし、こちらとしては好都合である。

領主がルルカたちに一体何の要件があるのかは定かではないが、
こちらは是が非でも領主に会わなければならないのだ。

ルルカたちは戸惑いながらも、先行する男の背に続いた。

その10

大聖壇、謁見室。

領主家の関係者と思しき男に案内され、地下道から大聖壇の中へと招かれたルルカたちは、その部屋の中に案内された。

広い室内の中央には、黒檜造りの大きなテーブルが置かれ、その周りに十ほどの座椅子が並べられている。

そして、部屋の入口の反対側……ルルカたちとはテーブルを挟んで対面に位置する椅子の上には、既に誰かが腰を下ろしていた。

大きな座椅子に、ふんぞり返るように座る一人の少女。

特別その椅子だけが大きいというわけではなかったが、少女の体が小さい分随分大きく見えた。

「来たか……。剣聖の力を継ぐ者よ」

ルルカたちの姿を認めるや、その少女は年齢相応の幼い声色で言葉紡ぎ出す。

可憐な容姿と同様に可愛らしい声だ。

それだけに、偉そうな口調とのギャップにルルカは違和感を覚えた。

この少女が、ディエル＝ダーナの領主リーファ＝メイリオ。

二年前の十一歳で領主の座に着いた……ということは、現在十三歳。

年齢のことは予め聞いていたが、実際に本人を目の当たりにすると、やはりその幼さを実感せざるを得なかった。

領主リーファ・メイリオは部屋に入って来た二人……特にルル力のことを、品定めするかのようにジロジロと眺め回す。

「ふむ……。儂げな力の持ち主だとは思っていたが……何だ、まだ子どもではないか。

剣聖の力を受け継いでいるはずなのだが、期待外れなことにならねばよいが……」

一体どんな用件があるものかと思いきや、自分で招いたルル力たちを椅子に促すこともせず、いきなり好き勝手なことを言い始めるリーファ。

リーファが一体何のことを言っているのかはルル力にはよく分かっていなかったが、少なくとも自分が侮られているのだということは理解できた。

初対面であるにも関わらず、その失礼な発言にルル力は顫かみを引き攣らせる。

「ちょっと、何生意気言ってくれちゃってんのよ。
あんたの方が完全に子どもでしょーが」

「お……おいおい、よさんか！」

「コ……コラ　！　リーファ様に対して、何たる口の聞き様だ　！」

しかし、ルルカが反論するや、すぐさまファウルと、ルルカたちを案内してきた男が声を荒らげた。

叱責され、慌てて口を噤むルルカ。

容姿に惑わされ忘れかけてはいたが、相手はこの街一番の権力者なのである。

ただでさえ普段敬語を使う習慣がなく、ついタメ口を使ってしまったのもマズかったのだろうが、ましてや彼女に対して口答えなど許されるはずがない。

「よい、そのままです。その方が話やすかろう」

しかし、声を荒らげる男たちをリーファが制した。

意外な反応に眉を顰めるルルカ。

その発言や態度はとにかく偉そうであつたが、どうやらその分年齢にそぐわぬ寛大さも持ち合わせているようだ。

そして、ここでもうやくルルカたちを椅子に促す。

「この街の領主リーファ・メイリオという。

御足労感謝する。腰を掛けてくれ。

お前たちには話があつてここまで招き入れた。

少し長くなるかもしれぬ……。ざっくばらんに話をしよう」

「あ、なぐんだ。じゃあ普通に話させてもらつわよ」

言いながら、促されるままにどっかりと椅子に腰掛けるルルカ。

彼女がそういう風に申し出てくれるのなら、こちらとしてはそれに従うだけである。

使い慣れていない敬語などでは、確かに彼女の言う通り話しづらいことこの上ない。

もっとも、そんなルルカの素直な対応に対して、ただ一人ルルカたちを案内して来た男だけは嫌な顔を浮かべていたが。

その11

「さて……順番が前後してしまったな。とりあえず、お前たちの名を聞かせてくれぬか？」

リーファの付き人と思しき男は去り、謁見室にはルルカ、フォウル、そしてリーファの三人だけが残された。

リーファに問われて、ルルカたちは妙な違和感を覚える。

ルルカとフォウルは、この街の領主であるリーファの名前は知っていたし、リーファもカミオ＝シエルの娘であるルルカのことを知っているような口ぶりだったので、お互い初めて会ったような気がしなかったのだが、これは初対面なのである。

「ルルカよ。ルルカ＝シエル。何でも屋よ」

「ワシはレーヴェルの街で考古学者をやっているフォウル＝グランバースと申します」

「ルルカとフォウル……だな。突然呼び出してすまなかったな。

悪く思わないでほしい。

だが……事は急を要する。この街に今、大いなる災いが訪れようとしているのだ」

「この間の『神託』ってやつのことね。どういう意味なの、『空が落ちる』って？」

神妙な口調で語るリーファに対して、ルルカは何気なく問い掛け

た。

外で大騒ぎするこの街の住人たちをよそに、他所者の自分たちだけがその真相を知ろうなんて抜駆けのような気もしたが、せっかくこうして聞く機会がある以上、聞いておかなければ損である。

ルルカの問い掛けに、しかしリーファは静かに目を閉じ首を横に振った。

「それは……私にも分からん」

「分からんって……んな無責任な。あんたの一言のせいで、街の私たちはこんだけ混乱してんでしょ？」

「そう言ってくれるな。私とてこの予言の力をもて余している。

予言の力は代々メイリオ家の人間に受け継がれてきたのだが……誰一人として自在に使いこなせた者はいなかった。この私ですらそう……非常に不安定なものなのだ。

神託はいつも突然訪れる。

こちらの都合などまるでお構いなしに、予期せぬ時、予期せぬ場所でな。

そして、必ずしもこちらが望んだ答えが得られ、好きなときに好きなことが知れるという都合のよい力でもないのだ」

「ふーん。随分曖昧な力を持つてんのね」

『予知能力』と聞いて、それが便利な能力だとばかり思っていたが、どうやら実際には何でも都合良く知ることができるような能力ではないらしい。

しかし、椅子に深く腰を掛け何気なく呟いたルルカの言葉を聞き、リーファはクスリと悪戯っぽく笑みを浮かべた。

「それはお前ほどではないがな。ルルカ〃シエル」

その笑顔は年に似合わぬほど妖艶で、思わず見惚れてしまうほど優美なものであった。……が、ルルカにはリーファの発したその言葉の意味がよく分からなかった。正直なところを言うと、先程からリーファが一体何を言っているのか、イマイチよく理解出来なかった。

つつこまないとところを見ると、フォウルもあまりよく話を理解出来ていないらしい。

キョトンとしているルルカたちの表情に気付いたのが、リーファもそれ以上話を広げようとはしなかった。

「まあ……その話はいい。

それよりも、私がお前たちをこの屋敷に招いた理由だ。その話をしよう」

「あつ……。そ、それもそうね！

大体あなた、一体どうして私がカミオ〃シエルの娘だって分かったの？ それも神託ってやつ？」

「神託とは少し違うが……まあその話は今はよそう。今それを話したとしても、また混乱を招くだけだ。

それよりも、この街に空賊が現れたことは知っているな？」

「え？ ええ、もちろん」

質問をあつさりとスルーされ戸惑うルル力だが、逆に返された問い掛けには反射的に答える。

「そやつらは先日、ワシの家から天空竜に関する研究資料を奪い、この街にやって来たのです。リア「グランデに登り、白嶺海へと目指す理由は間違いなく天空竜を狙ったことでしょう」

空賊という単語を聞き、フォウルは身を乗り出した。

リーファは、ふうっ……と大きく息をつき、俯向き加減に頭を横に振った。

「愚かな者たちよ。あれは人が手にするには、あまりにも巨大な存在。人智を超えし神の御使いなのだ。人間などに到底どうにか出来るものではあるまい」

「や……やはり、天空竜は実在するのですか？！」

興奮気味に問い掛けるフォウル。

しかし、対してリーファは興味もなさそうに冷たく鼻を鳴らす。

「それは私の知るところではない。確かにこのディエル「ダーナには天空竜に纏わる数多くの伝説が残っているが、実際に私がこの目で実物を見たというわけではないからな。

存在の確証は想像の域から脱することは出来ぬ。

だが……今は天空竜の存在などどうでもいいこと。

私は確かに見たのだ。この広大な空が崩壊する瞬間を。

一度下った神託が覆ることはない。空が落ちるといふ神託が下れ

ば、間違いなく空は落ちるのだ。

それが……あの空賊たちの行動と直接結び付いているという確証はないがな」

口調の中に緊迫感を漲らせ、神妙な表情で語るリーファ。

その幼い声色から紡ぎ出される言葉には、不気味なほど説得力があり、危機感に満ちた現実をルル力たちの前に示し出した。

ルル力たちはゴクリ……と息を呑む。

どうやら……思っていた以上にとんでもないことが起こりつつあるらしい。

確かにそんな神託が下されたら、街の人たちがパニックに陥ってしまうのも無理はないだろう。

すると……。

リーファは徐に顔を上げ、真っ直ぐな視線でルル力の両の瞳を見据える。

「お前たちをここへ招き入れたのは……ほかでもない。

リアァグランデへの登頂を許可する。空賊たちを追ってくれ。

そして……叶うことなら、この空を守って欲しい」

「え……？ ええっ！？」

突拍子もない申し出。

ルルカは一瞬耳を疑う。が、すぐに言葉の内容を理解し、思わず声を上げた。

「ち……ちょっと待ってって。そんな勝手な期待してくれちゃって……。」

そんな仰々しい話をした後で、私にどうにかしろだなんて……そりゃ無茶つてもんよ！」

しどろもどろになりながらも、どうにか言い返す。

確かにリア＝グランデへの登頂はルルカたちが望んでいたことである。そのためにここめで来たのだ。しかし、そんな不吉な神託の事実を聞かされた後に登頂許可を得られても、気が引けてしまうだけであつた。

リア＝グランデへの登頂を切望していたフォウルでさえ、おろおろとして戸惑っている。

しかし、リーファは自分の意見を曲げる気はないようであつた。強い意志を秘めた視線がルルカの瞳を捕えて離さない。

「いや……お前だからこそ頼むのだ、ルルカ＝シエル。」

ディエル＝ダーナの街にメイリオ家が仕えて数百年……。誰一人として神託を覆すことが出来た者はいなかった。

我らディエル＝ダーナの民はこの神託から逃れる術を知らぬ……。だが、お前なら……。剣聖カミオ＝シエルの血を継ぐお前なら持っているかもしれない。

運命に抗う力を……。」

そこでリーファは椅子を立ち、徐に片膝を着き、ルルカに対して

頭を垂れた。

「ほかに頼むことが出来る者などいようはずもない。

この神託が下されたのと同時期に、お前が現れたのは間違いなく運命であると思っている。

だから……頼む、ルルカ！ シエル」

側衛官を引き払ったのは、最初からこうするためだったのだろう。領主が頭を垂れる姿を、部下や街の者に見せられるはずがない。

いくら領主であるとはいえ、こんな年端もいかない少女がこの街のことを……この街に住まうすべての民のことを危惧し、憂い、そして不吉な神託を授かったことに対して責任を感じているのか、たった一人でどうにかしようとしているのだ。

『見える』ことに対して、たった一人で責任を感じる必要はないはずであるし、健気……という言葉はこの少女には不似合いであったが、彼女が抱えている大きな苦悩が、痛いほどルルカの胸の中に伝わってくる。

はつきり言つて、こんな状況を黙って見過ごすことのできるルルカではなかった。

瞳の奥に決意を秘め、跪くリーファの側に寄り添う。

「分かったわ……その話、引き受けてあげる。だからもう顔を上げて、ね？」

「（お……おいおい、マジかよルルカ！）」

「だ……大丈夫なのか……？　ルル力さんや」

ルル力の発言を聞いて、不安げに戸惑いの声を上げるフォウルとこんにやく。

彼らが不安になるのも無理もなからぬことであつた。

正直、ルル力自身、リーファの言う『空を守る』だとか『神託に抗う』だとかいうようなことが出来る自信などまるでない。

しかし、この街に来た目的は空賊たちを止め、天空竜を守ること。そして……あの殺し屋と再会し、ルル力の過去について尋ねること。

二つの目的を達成するためには、どちらにせよリア＝グランデには登らなければならないし、もしも神託に空賊たちが関わっているのであれば、神託に抗うことに対しての何らかの光明は得られるかもしれない。

ルル力は不安げに表情を歪ませるこんにやくやフォウル、そしてようやく顔を上げたリーファに対して、笑みを向けた。

自信などまるでなかったが、人を励まし、元気づけるような、いつもの明るいあの笑みを。

「ただし……何でも屋である私に対しての正式な依頼として、ね！」

その12

ディエル＝ダーナの商店街で、ルルカ、フオウルと別行動をとり、リア＝グランデへの登頂に必要な物資を購入したアドルとデイズの二人は、一足早くセブン・フィーバー号に戻り、登頂の準備を整えていた。

アドルは長時間の飛行に備えての食料の準備を。そしてデイズは特にエンジン周りを中心としたセブン・フィーバー号の綿密な整備を。

誰もが、白嶺海へと進入するのは未知の体験。不安からか、自然と二人の間の会話は少なくなっていた。

「戻って来ませんねえ……。ルルカさんとフオウルさん」

沈黙に耐えられなくなったという訳ではなかったが、帰りの遅い二人のことが気に掛かり、窓の外を眺めながらポツリと何気なく呟くアドル。

黙々と機体を整備していたデイズも、作業の手を止め、額の汗を拭いつつアドルと同じ方向に視線を送った。

「そりゃあそうだ。大聖壇の周辺は大混雑してるって話なんだ。そう簡単には戻って来れねえだろうよ」

「そうですね。」

「うーん……。ルルカさん、また考えもなしに無茶なことをしていなければいいけど……」

「じいさんも天空竜のこととなると、年も考えずに無茶苦茶しやがるからな……。大聖壇に無断で潜入して、とっ捕まったりしてねえだろうか……」

揃って顔を見合わせる二人。

互いに見合わせるその表情の中には、あの二人を大聖壇に行かせたのはやはり失敗だったのではないか……という心情が如実に現れていた。

「ただいまー！」

すると、そんな二人の不安をかき消すかのように出入り用の下部ハッチが開き、聞き慣れた声が機内に響く。

入って来たのは二人。先程まで話の話題に登っていたルルカとフオウル。

ようやく帰って来たその姿を認めて、アドルとディズの表情に少しだけ安堵の色が滲んだ。

「あ、おかえりなさい。ルルカさん、フオウルさん。帰りが遅いんで、そこそこ心配していましたよ」

「そこそこって……。はいはい、中途半端に心配させちゃってごめんなさいでした。」

ま、いいや。さあ、上がって」

ルルカに促され、二人の後に続き、上質なヴェールで顔を隠した

一人の少女が機内に乗り込んで来た。

突然の、予期せぬ三人目の登場に、アドルとデイズは揃ってキョトンとした表情を浮かべ、見知らぬ少女の方を見遣る。

「……誰ですか、この女の子は？」

「何だあ？　街で迷子でも拾って来たってのか？」

しかし、興味を示す二人のことなど視界の中に入っていないかのように丸つきり無視し、少女は顔を覆っていたヴェールをはぎ取りつつ、険しい表情で機内をキョロキョロと見渡し始める。

「小さき船だな……。本当にこのような小船で白嶺海の中を目指すつもりか？」

「あ。狭いしそこら中散らかってるから気を付けてね、リーファ」

『げえっ　！！』

瞬間、揃って大声を上げるアドルとデイズ。

突然出てきた、予想外のビッグネーム。……そしてまさか目の前に現れるはずのないと思っていたその姿。

「ま……まさか、リーファ＝メイリオ？！」

「てっ……てめえら、拉致ったな　！？」

その13

リーファが混乱する大聖壇をわざわざ抜け出し、こんなところまでやって来たのは、特に同行を申し出た訳ではなく、白嶺海を目指すルルカたちが乗るエア・シップを一目見ておきたいと言いだしたからだった。

白嶺海の中へ潜入するのは、まさに至難の業。かつて多くの冒険家、研究者たちがその中にロマンを求め、白嶺海を目指したが、その悉くが分厚い雲海の前に阻まれ、無惨に散ってきている。

空を守る。

自分たちの街の運命を託したルルカたちの載るエア・シップが、目的を達成する前に先代の数々のエア・シップと同様、白嶺海の中に辿り着く前にあっさりと崩壊してしまわないかと不安に思い、人目を忍んでここまでやって来たリーファの気持ちももっともであった。

大聖壇での出来事や、リーファから依頼を受けたことを告げると、拉致と勘違いしていたアドルとデイズの完全に血の気が引いていた表情にも落ち着きが戻っていた。

もっとも、セブン・ファイバー号の小ささを見たリーファは逆に始終不安そうな表情を浮かべていたが。

しかし、船はこれ以外ほかはない。文明に取り残されたこの街で、ほかのエア・シップなど調達出来るはずもない。この船で白嶺海の中を目指さなければならぬのだ。

「本当に大丈夫なのか……？　ルルカ〓シエル」

セブン・ファイバー号に来てから、少しそわそわしながら何度も何度も同じ質問を繰り返すリーファ。かつて白嶺海を目指し、目的果たせず沈んできた何機もの大型エア・シップを見てきているのだから。

今のリーファは、少し前に大聖壇で見た、年不相応の落ち着き払った表情を浮かべていた少女とはまるで別人のようであった。

しかし、そんなリーファの不安を払拭するかのようには、デイズがその頭の上にポンつと手を乗せる。

「なぐに、大丈夫だって。心配すんな！
小せえが、頑丈だけは一級品だ。雲の塊なんかに負けやしねえよ――」

全く根拠のない一言だったが、今は機械技師の彼の腕と、リア〓グランデを伝えれば白嶺海の中へ進入出来るというフォウルの仮説を信頼しなければならない。

大きな笑い声を上げながらリーファの頭を乱暴に撫で回すデイズだが、機体の窓の外から突き刺さる、お付きとして付いて来た側衛官の痛烈な視線を感じ、慌ててその手を離れた。

「うゝん……なんかまだちょっと不安もあるけど……。
アドル、おっさん。準備の方は出来てる？」

「お、おう。整備の方はバッチリだぜ」

「もちろんです。長期飛行に備えての食料や寒さ対策の防寒具、予備のフィルムも十分だし、カメラのレンズもキレイに磨いておきました。何も問題ありません！」

「それは別にどうでもいいけど……。おじいちゃんも心の準備はいい？」

「うむ……。屋敷を出たときから、既に決心は付いておる」

フォウルの視線は、既に空へ……。雲の中へ向けられている。口調は落ち着き払っているが……。数十年振りの、白嶺海。気持ちが逸っていることは明らかであった。

「それから……」

最後にルルカは、そっとフードの中に視線を送った。

「（つたりめーだろ、おれはいつでも準備オツケーだ！ さつさと出発しよーぜ！）」

いつものように元気一杯の口調で答えるこんにゃく。

誰もが既に、不安や戸惑いを払拭し、未知の世界へと臨む決意は着いているようだ。

あとは……。ルルカの気持ちのみ。

ルルカは目を閉じ、すう〜と大きく息を吸い込んだ。

自分の過去……そして、父の失踪の手掛かりが、そこにある。

恐怖心は捨て去った。

リーファの気持ちも受け取った。

瞳の奥に決意を秘め、ルル力は両の眼を見開く。

「さあ……行くわよ！ 白嶺海！」

その1

故郷の街アストルーズは俗世間から半ば隔離されているような街だった。

しかし、かといって訪問者が全くない訳でもなく、剣聖カミオⅡシエルを慕い街には人間、亜人間わず多くの人々が訪れた。

人間、亜人間の戦争真つ只中だったにも関わらず、両種族が共存するこの街の現状を世界政府が知れば……一体どうなっただろうか。

アストルーズは人間世界から見放されたに違いない。アストルーズが辺境に位置していたことが唯一の救いであつた。

父に感化され、自分たちの世界に戻った者の亜人の中には、亜人世界にもアストルーズと同じような人間と亜人が共存できるような街の創設を目指した者たちもいたようだ。

そんな者たちが増えれば……長きに渡る人間、亜人間の戦争は、終息に近付いていったかもしれない。

しかし、共存の考えを持つ者たちは、この広い世界から見れば、どうしようもないほど僅かな数に過ぎなかった。

アストルーズの街の外れには、大きな川が流れていた。

『ルド川』。

流れが早く、かなり水深も深い川だ。

父や母からは絶対にルド川に近付いてはならないと口酸っぱく言われていた。

まだ幼く、遊び盛りだったルルカたちだが、両親の真剣な言葉を理解し、ルド川の近くでは絶対に遊ぶことをしなかった。

漂流者があった。

ルド川はアストルーズを遠く越え、様々な地方へ伸び続いていたため、他所の土地からの漂流者があってもおかしいことではなかったが、かといってそう滅多に現れるというわけでもない。

街の者たちも当初は皆戸惑っていた。しかし、まだ息のあるその漂流者を皆放つてはおけなかった。

全身に激しい傷を負い、衰弱し切っていたその者に手厚い治療を施し、意識が戻るまで街一丸となって看病した。

特に、その左腕に負っていた傷がもつとも深く、激しかったということだけはルルカも何となく覚えている。

ただ……

それから先のことが、よく分からない。

漂流者が一体何者だったのか。何故アストルーズの街に流れ着いたのか。

その後……一体どうなったのか。

幼い日の記憶は……紅蓮の業火の中で焼き尽くされる。

気付いたときには、ルルカの周りには誰もいなかった。

いつもルルカと一緒に遊んでいた仲のよかったあの二人も、

まるで家族のようだった温かい街の人たちも。

そして……いつもルルカの側にいてくれた、心優しい父でさえも。

もう何も残されていなかった。

ただ、ただ、胸の奥がきつく締め付けられるかのように苦しくて、
どうしようもなく悲しくて……母の胸の中でわんわんと声を上げて
泣きじゃくっていたことだけは覚えている。

一体、そのとき何があったのか……。

思い出そうとしても、心の奥から滲み出る、足が竦み上がってしま
いそうな、どす黒い恐怖心に邪魔をされる。

出てくるのは……ただ、空虚な悲壮感だけだった。

ルルカの中で、ずっと綴り続けてきたページの一枚が……そのとき、
途切れ、消えた。

どれだけ探し求めても、どれだけ追い続けても、もう決して戻る
ことのない一ページ。

消えてしまった父と……途切れてしまった記憶の一ページを探し
求めること。

それが、ルルカが何でも屋となり、世界中を駆け巡っている理由
である。

その2

冷たく強い風が、まるでセブン・フィーバー号を取り巻くかのよう
に吹き荒ぶ。

かつてこれほどまでに、『空が迫る』という感覚を覚えたことが
あっただろうか。

機体が上昇すればするほど、天高く広がっているその白き領域が、
どんどん眼前へと近付いてくる。

不思議と高鳴る、胸の奥の鼓動。

未知の世界へ足を踏み入れることに対する不安と、期待。先代の
冒険者たちは、皆このような高揚感とともに大空へ舞い上がって行
ったに違いない。

不安要素の方が多いはずなのに、それでも自然と心が高揚してし
まうのは、空を愛する者の証なのだろう。

「うおおおい、おいおい！ 大丈夫なのか、ルルカ？ 雲がど
んどん近付いて来るぞ」

その圧巻の光景を目の当たりにして、狭いブリッジの上で思わず
大声を上げるこんにやく。美女がいる光景以外で彼がここまで騒ぐ
のは珍しいことだったが、それも無理はない。

雲に近付けば近付くほど、これまで白い塊にしか見えなかった雲
が、まるで生き物のように大きくうねっているのが分かる。確かに

それは、中に何か生き物が棲んでいるのではないかとも思いたくなるような、壮観たる光景であつた。

「わっ……私に聞かないでよね　！　私だって初めてのことなんだから　！」

こんなにやくが潜んでいるパーカーが吹き飛ばされないよう、全身を抱え込むかのようにして押さえながらルルカは叫び返す。

大きくうねりながら迫り来る眼前の白き雲海を見れば、ルルカもこのままではそこに吸い込まれてしまうのではないかと疑いたくもなつた。

しかしフォウルの仮説通り、リア＝グランデは広大な白嶺海の底を突き抜け、広大な雲の中に続いている。

順調に行けば……おそらく。白嶺海の中に進入出来るはずである。

かつて、このリア＝グランデの頂上部を確認した者はいない。一体、この巨山がどれほどの高さを誇るのか……それはディエル＝ダーナの街が生まれる以前からこの山を守り続けてきた麓の民たちでさえ知るところではなかった。

最悪、白嶺海に入つてすぐ途絶えているという可能性だつてある。もしそうであれば、先に白嶺海へ向かつた空賊たちを追う必要はない。彼らの船も分厚い雲に阻まれ、先代の冒険者たちの船と同じように大破しているだろうからだ。

しかし、それでもルルカたちが白嶺海を目指さなければならなかつたのは、リーファの神託があつたからだ。

『空が落ちる』。

その言葉は抽象的過ぎて、一体何を意味しているのか伺い知ることは出来なかったし、空賊たちの行動と結び付いているという確証はどこにもなかったが、フオウルが教えてくれたディエル「ダーナ」に伝わる伝説には、こうある。

天空竜が死ぬとき、それは空が滅ぶとき……と。

この伝説の信憑性は定かではないが、空賊たちが天空竜を狙っている以上、黙ってそれを見過ごすわけにはいかない。

空賊たちはルルカたちよりもかなり先に先行しているはずである。もしも分厚い雲に阻まれ、白嶺海への進入に失敗したのであれば、その残骸が山沿いに散らばっていそうなのであるが、その形跡はどこにも見当たらない。

フオウルの仮説通り順調に白嶺海の中に進入したのか、はたまた進入は無理と諦め撤退したのか……。

次第に強くなる強風に耐えかね、ルルカとこんにやくはブリッジを後にし、機内に戻った。

「す……すごい！　すごすぎるっ　！！　かつてこれ程までに白嶺海に接近し、その姿を捉えたジャーナリストがいたでしょうか

？ いや、いない！

これはレイナース新聞社史上最大のスクープとなりかねませんよ！
！ 僕は何てツイているんだ！」

興奮気味なアドルの声とカメラのシャッターを切りまくる音が響く。

機内ではアドルが鼻息を荒らげつつ窓にかじり付いていた。窓の外に広がるその圧巻たる光景に対する撮影意欲はあるようだが、冷たい強風が吹き荒れるブリッジにまで出る根性はないらしい。しかし、いくら白嶺海を撮影したとはいえ、こんなに間近で撮影したのでは現像された写真は真っ白であることは明白であるのに、テンションをマックスにまで上げるアドルはどうやらそんなことにすら気付いていないらしい。彼も幸せ者である。

「デイズよ、船の調子はどうじゃ？」

「どうって、爺さん。んなこと聞くまでもねえだろ？
念入りに整備したんだ。快調に決まってんだろーよ！」

「そうかのう……。うゝむ、何やら先ほどから壁や床がギシギシと軋んでいるような気がするんじゃないが……」

「気のせいだ、気のせい！ ボケて空耳まで聞こえるようになったんだよ」

「ば……ばかたれ！ ワシヤの耳はまだイケイケじゃい！」

機内は随分賑やかなようだ。その様子から察するに、どうやら皆、不安など微塵も感じていないらしい。

そのお気樂さにルルカは辟易して溜息を漏らすが、ここまで来たらもう不安に駆られる方が馬鹿らしい……と開き直すことにする。どちらにせよ、もう後には戻れないのだ。

ルルカたちの乗るエア・シップ、セブン・ファイバー号は、空賊たちの後を追ひ、快調に白き雲海の中を目指す。

その3

次第に、遠く……遠く。遙か天高く昇るエア・シップの姿が見えなくなるまで、リーファはその姿を見つめていた。

そうすることしか、彼女たちには出来なかった。

出来ることであればリーファ自身もあのエア・シップに同乗し、彼女たちとともに白嶺海を目指したい。この空の行く末を、ともに見届けたかった。

しかし、領主である自分が混乱の渦中にあるこの街から離れる訳にはいかない。

今の彼女たちには出来るのは、空の女神に対して祈りを捧げつつ、その姿を見送ることだけであった。

やがて、自分たちの願いを託したその船が、白き大海と同化するかのように見えなくなるのを確認してから……リーファはゆっくりと街の方へと踵を向けた。

「戻ろう……。最早我らに出来ることは何もない」

「承知致しました」

リーファに付き添い、ともに街外れまでやって来ていた側衛官が、その後に続く。お忍びで一時的にはあるとはいえ、厳戒態勢が敷かれている大聖壇を抜け出しているのだ。もしも不在が明るみになれば、混乱に拍車が掛かることは必至だろう。

もちろん、まだ不安要素は多々ある。

まず、彼女たちが未踏の地である白嶺海へ順調に進入することが出来るのか。

空賊たちに追い付き、あの少人数で空賊の一団を止めることが出来るのか。

そして……運命に抗い、神託にあつた『空の崩壊』を止めることが出来るのか。

どれも困難なものばかり。これらを同時に解決することなど、不可能に近い。

だが……信じるしかない。剣聖カミオ＝シエルの娘である彼女なら、奇跡を越しうる、かすかな希望を持ち合わせているのだ。

「かの者たちなら、きっとやってくれる。我らは大聖壇に帰り、成功した暁に与える報酬の準備でもしておこう」

「剣聖カミオ＝シエルの娘は何でも屋でしたね。ただで街の大事を引き受けなかったのはさすがに抜け目がありませんが……領主から直々の依頼となれば、街を上げた謝礼を与えなければなりません」

「……食事などでは誤魔化せそうにないな、あの者は。

そうだな……。国宝珠でも与えることにしよう。あれならさすがに満足するだろう。一つずつ用意しておけ。大きさは……お前の誠意に任せる」

「分かりました」

言いながら街へ向かって一步を踏み出した、そのとき、

「……………っ！？」

頭の中に突如として閃く、鋭い雷光と、凍てつく旋風。

何の予告もなしに現れた二つが激しく交錯し、頭の中を蹂躪する。

「リーファ様……？　どうかなされましたか？」

突然蹲ったリーファの側に、慌ててしゃがみ込む側衛官。

「う……………う……………」

そんな側衛官の声も、どこか遠くにしか響かなかった。

激しい頭痛と嘔吐感に堪えかね、その場に蹲ったリーファは弱々しく呻き声を漏らす。

「また……………何か見えたのですか……………？」

その体を側衛官に揺り起こされ、リーファは正気を取り戻した。

突如として頭の中に浮かんだ漠然としたイメージが、次第に鮮明なビジョンとなって現れ始める。

「あ……嵐だ……」

「え……？」

「嵐が、来る……」

痛む頭を押さえ、立ち眩をどうにか堪えながら、リーファはよろよろと立ち上がった。

エア・シップが消え入った空を、ゆっくりと仰ぎ見る。

頭上に浮かぶ広大な雲の領域は、いつもと同じように静寂を保っている。

しかし、リーファの脳裏に浮かんだビジョンは、間違いなく荒天の空を現していた。

この街に嵐が訪れることは、滅多にない。最後に嵐が訪れたのは……果たして、一体いつのことだったろうか。記憶を深く辿らねば行き着かぬほど、それは極めて稀な現象であった。

しかし……神託に誤りはない。嵐のビジョンが見えれば、どんなに今の空が穏やかでも、間違いなく嵐がやって来るのだ。

「空が……荒れるぞ」

この状況での嵐の予感、偶然か……将又、必然か。そこまでは判然としなかったが、空高く舞い上がったエア・シップに異変を伝えようにも、通信手段などこの街にはない。

結局彼女たちには、また空の女神に対して無事を祈ることしか出来ない。先を『見る』ことしか出来ない自分たちの無力さが恨めしかった。

しかし、それでも……。

静かに目を閉じ、両の手を握り合わせ、リーファは天に向かって一心に祈りを捧げる。

「空の女神リーアノンよ……。どうか……。どうか御加護を……。かの者たちに……。幸いを……。」

その4

「（まっしろまっしろ高原で〜 丹精込めたのおれのため〜）
お口でとろとろけちゃう〜）
まったりまったり、はいチーズ！！）」

「……ちよつと、こんにやく。さっきから耳元で変な歌歌わないで
よね」

顫かみをヒクヒクと引き攣らせつつ、ルル力はフードの中のこんにやくをギロリと睨み込んだ。

気流が安定しつつあるのか、それともデイズの操縦技術がいいせいか、セブン・フィーバー号はトラブルもなく順調に白嶺海へと迫りつつあった。

そのせいか、皆の緊張感も次第に解れ始め、こんにやくに至つては人目もはばからず呑気に歌い始める始末である。

舵を取るデイズを除き、アドルもフォウルも呑気に居眠りをこいていたため幸い周りの耳に入ることはなかったが。

当初緩やかな山道続きだったリア＝グランデも、高度を増すに連れて次第に傾斜が増してくる。

反り立つように聳える斜面は、もはや崖といつてもいい。ここまで来たら自力での登頂はまず不可能だろう。

ルル力の苦情に、こんにやくは憮然とした表情を覗かせた。

「（なんだよなんだよ、おれが作った『アイラヴ・チーズの歌』が気に入らないってのかよ！）」

「気に入るも何も……音程メチャメチャじゃん。そんな歌、耳元でお経みたいにずっと聞かされ続けたんじやイライラも募るってもんよ」

「（ったくよー、文句ばっか言いやがって。せつかく暇潰しでもしてやろうと思つたのに……」

それじゃあ仕方ねえ。新曲の『金色美女の歌』でも披露してやっかな！）」

「だ〜から！ 選曲の問題じゃないっての！

あんた音痴なんだから、もう滅茶苦茶な歌はやめて！」

「（おっ……おれの美声をつかまえて音痴だとっ……？！

ばかやろーっ！ ルル力の聞く耳がねえだけじゃねえかつ！

！）」

「なっ……何ですってえ！？」

いつもの下らない言い合いが、まさに始まらんとしていた、そのとき、

ガクンッ
！！

「っ　！！？」

突然、機体の高度が大きく落ちた。バランスを崩し、床に転がるルルカたち。

と同時に、外から何か無数の石礫のようなものが激しく機体を叩き付け始める。

機体に穴を開けんばかりの勢いで降り付ける礫の衝突音が、まるでマシンガンの発砲音のように機内に響き渡った。

「な……何じゃ、何事じゃ　？！」

「まさか、デイズさんが操縦ミスして墜落したんですか　？！」

寝入っていたアドルやフオウルも、その衝撃と音の大きさですすがに目を覚ましたようだ。

しかし、問われても、ルルカにさえ未だ何が起きたのか現状が把握出来ていない。ただただ、激しく揺さぶられる機内で、転がり回らぬよう必死で座席にしがみつくばかりである。

「あ……嵐だ　！　いきなり空が荒れ始めやがった　！」

操縦席から、デイズの緊迫した声が響いた。

気流に翻られるセブン・フィーバー号は、まるで大地震に見舞わ

れたかのように激しく上下左右に揺れ動く。もはやまともに立っていることすら儘ならないような状況であった。

降り頻る雨は、さながら弾丸の如くけたたましく機体を打ち続ける。

「さっきまで、あんなに気流が安定してたつてのに！」

座席にしがみつきながら叫ぶルルカ。先程までの天候は決して悪くなかったはずだ。いきなりこんな大嵐が発生するだなんて、想像することすら出来なかった。そして、ここまで大きな嵐を経験したことは、ルルカは未だかつてない。

「フ……フォウルさん、窓の側は危険ですよ！ 下がった方が……」

暴風は窓を突き破られんばかりの勢いでに激しく吹き付け続ける。アドルは一番窓際の席にいたフォウルを引き戻そうとするが、何故かフォウルはその場から離れようとしなかった。

「ち……ちよっとおじいちゃん！ 何してんのよ！？」

腰を抜かして動けなくなったような様子でもなかったが、フォウルにはルルカたちの言葉などまるで届いていないようだった。ただ、座席にしがみつきのながらも、必死で窓の外を見つめている。

その目に……恍惚とした光を宿しながら。

「同じじゃ……」

「な……何がっ？！」

「同じなんじゃ！あの日、あの時と！

まさしくこれは、シーボルト号を突如襲った大嵐と同じものじゃ！

伝承には、こうある。『天空竜は……嵐と共に降臨する』……と。今日この日、この瞬間……この大嵐が発生したのは、紛れも無く必然！

ワシらは導かれておる……！白嶺海の中へ…天空竜の元へと……！！

天空竜は、必ず現れる……。現れるぞ……！！」

この状況下で、今まで見たことないくらいテンションを上げまくるフォウルの心情などルルカにはまるで理解出来なかった。

しかし……フォウルの瞳は輝いていた。まるで夢を追い求める純粹な少年のように。

すると、突如、嵐に襲われていたセブン・フィーバー号の速度が急速に上がった。

「お……おっさん、どうするつもり？！」

「こんなバカでかい大嵐に揉まれ続けりゃ機体がもたねえ！バラバラにされちまう前に一気に白嶺海の中を目指すぞ！

それに、ここまで来ちまったからには、もう後戻りは出来ねえ……。振り落とされねえように、しっかり掴まってる！」

操縦席から響くデイズの口調に余裕はなかった。体が吹き飛ばされないように踏ん張りながら、必死で操縦桿を操っている。

しかし、機はまるで真っ直ぐには推進しない。

吹き寄せる暴風を前に、どうしようもなく無力でしかなかったセブン・ファイバー号は、気流に押し付けられるかのように、みるみるうちに崖に吸い寄せられていく。

「ち……ちょっと、ぶつかるわよ　！！」

「こりゃ、デイズ　！　白嶺海はもう目の前じゃ　！　しっかり上を目指さんか　！！」

「し……しっかりして下さい、デイズさん　！！」

「ぐううつつ、か……舵が効かねっ……　！！」

勝手なことを言いまくる外野を完全に無視し、必死の形相で歯を食いしばるデイズ。

だが次の瞬間、

「うんっ！！」

一際大きい衝撃が機体を襲った。

一瞬、ルルカたちの体が宙に浮く。

衝撃に堪え切れなかった両手は必死になって掴んでいた座席から離れ、弾き飛ばされたルルカたちは床の上に転がり回る。

気流に弄ばれ続けるセブン・ファイバー号の下腹部は、荒れ狂う暴風に押し付けられるかのように崖面に叩き付けられたのだ。

ルルカのフードの中でうずくまっていたこんにやくの小さな体も、外に投げ出された。

「ぎゃあああああつ　！！　し……死ぬう……　！！
死ぬならせめて絶世の美女の腕の中がいい……　！！」

「こんにやく　！　それなら私の腕の中に飛び込んでおいで　！」

「絶世の美女つつたろ　！　よく聞いとけつ　！！」

「ぬわあ～んですつてえつ　？！　だつたら嵐に吞まれて死ぬ前に、私が絞め殺しちゃう　！！」

メキメキメキ……

しかし……。

転げ回りながらもルルカの両手がこんにやくの体をやっと捕まえた瞬間、周囲に嫌な音が響く。

機を叩き付ける激しい礫の雨音の中でも、その音は不思議とやけにハッキリとルル力たちの耳に届いた。

恐る恐る音の聞こえた方に目を向けると……、先程崖と衝突した機体の床にうつすらと入った、小さな、小さな亀裂。

だが……小さな亀裂は、メキメキという音とともにみるみるうちに大きく広がっていく。

「や……やべえんじゃねえのか……？」

その光景にぼんやりと目を奪われている暇などなかった。

こんなにやくが呟いた、次の瞬間、

じゅっつ　！！

機の外で荒れ狂っていた暴風が、一瞬にしてセブン・フィーバー号の中に侵入し、機内を激しく掻き回す。

激しく吹き荒れる強風を前にして、抗う術など持たぬルル力たちは、弄ばれ、もつれ合いながら、あっという間にその意識までも奪い取られてしまっていた。

その
5

.....

.....

.....

?

気付いたときには、辺がやけに静かだった。

耳がきんと痛くなるほどの静寂の中で、ゆっくり……ゆっくりと、ルルカの意識は覚醒する。

頭はまだぼんやりとしていた。一体どれくらい気を失っていたのか……一体何故気を失っていたのかも判然としない。

先程までルルカたちを襲っていた大嵐の気配は、いつの間にか忽然と消え去っていた。機体を打ち続けた礫の音も、激しい振動も止んでいる。

代わりに……感じるのは、体に漂う不思議な浮遊感。しかし、体を動かそうにも、まるで言うことを聞かない。感覚のなくなった自分の体は今、上下左右どこを向いているのかも分からなかった。

周りには誰もいなかった。こんなにやくも、アドルも、フォウルも、デイズも。さつきまで乗っていたはずのセブン・ファイバー号も見当たらない。

ただ……辺りには何もない白い空間が広がっている。そのただっ広い真っ白な空間に、ルルカは一人投げ出されていた。いや……その空間が広いのかも狭いのかも、ルルカには分からなかった。

あれ……ここつてもしかして、天国？ 私……死んじやったのかな？

朦朧とした意識の中、何となくそんなことを思う。辺りに誰もいないということは、もしかして自分一人だけが死んでしまったのだろうか。そう考えたら、何て自分は運が悪いのだろうか……と、ひたすら悲しくて、虚しい気分に苛まれた。

すると、そのとき……

『ルル力』

未だ判然としない状況の中、ルル力が一人感傷に浸っていると……どこか遠くの方で自分の名を呼ぶ声が聞こえた。

誰……？

声が響く方へと体を向けようとするルル力。しかし体はまるで言うことを聞かないし、よくよく考えてみれば、その声が一体どこから届いたのかもハッキリと分からなかった。近くから聞こえたような気もしたし、頭の中から響いたような気もした。

ただ……ひどく懐かしい。その声にルル力は聞き覚えがあった。

あれは……そう、遠い……遠い日の、追憶の中。聞いていると、ひどく穏やかで、落ち着いた気持ちになる優しい声だった。

『ルルカ』

どこ……？ どこにいるの……？

再度響いた声の主を探そうと、ルルカは必死で目を巡らせる。しかし、どこを見渡せど、どれだけ見渡せど、そこには何もない。ただただ、真っ白な空間が広がるばかり。

『ルルカ』

しかし、声は次第に大きく、鮮明になって聞こえてくる。依然として、声が一体どこから響いてくるのか分からなかったが……しかし、今度は直感で、声の主がどこにいるのか分かった。意図したわけではなかった。だが、自然と体がそちらの方に向く。

相変わらず、ひっそりとした静寂を保つ白い無の空間。

しかし、ゆっくり……ゆっくりと、その中から誰かが姿を現した。
現れたのは男性だった。年齢は四十代半ばほどであろうか。一見どこにでもいそうなごく普通の中年男性であったが、その両の瞳は固く閉じられている。ただ、その口元には優しい笑みが湛えられていた。

その姿を見て、思わずルル力は我が目を疑う。

と……父さん　！？

それは……遠い、遠い追憶の日の中から追いかけてきたものと同じ男性の姿。十三年ぶりの再会となるが、その姿は思い出を頼りに探し続けてきたものとちつとも変わってはいなかった。

父……カミオ〃シエル。

一体何故こんな場所に現れたのか……、こんな場所で一体何をしているのか。分からないことはたくさんあったが、今はそんなことはどうでもよかった。ようやく……ようやく、ずっと探し求めて来た父と再会することが出来たのだ。

無言で二人は見つめ合う。こうして向かい合っているだけで、積年の想いが溢れ出し、胸が高ぶって泣き出してしまいそうだった。

しかし……呼び掛けようとしても、声が出せない。近付こうとしても、体はやはり動かない。

ちょっと手を伸ばせば、もう触れることが出来るほど近くにいるというのに……。喋りたいことがたくさん……。たくさんあるというのに……。

別れは突如として訪れた。

不意に……父はクルリと背を向け、音さえ立てることなく静かに……静かに、その場から立ち去っていく。

その口元に……少し、寂しげな笑みを浮かべながら。

待って　！　行かないで　！

去り行くその背中を引き止めようと、ルル力は必死になって叫ぼうとする。しかし、やはり声は出ない。体も動かない。どうにかしようと必死でもがくが、そうしているうちに、父の背中はどうどん遠く、小さくなっていく。

待つて………ねえ、待つてよ！

心の中での必死の呼び掛けも、届くことはなかった。去り行く父は、ルル力の方を振り返ることすらしなかった。

父さん……

やがて……。

その姿が、白き空間の中に溶け……消えた。

お父さあ ああああ あんっ ！！

その
6

ル
ル
カ
！

.....

ル
ル
カ
！

.....

？

おい、ルルカって！

……父さん？

……ではないことはすぐに分かった。父の声はもつと凛々しいはずだし、何しろ今しがた聞こえた自分の名を呼ぶ声は幼すぎる。

「う……ん」

ぼんやりとした頭を、ブンブンと揺り動かす。

目の前に映る、ぼやけた景色。意識がゆっくり…ゆっくりと現実
に引き戻されるとともに、次第に目の焦点が合っていく。

鮮明になった視界の中に、先程見た……あの真つ白な光景は、も
うどこにもなかった。もちろん、父の姿もそこにはない。そこは見
慣れたエア・シップの中だった。

代わりに、目の前にいるのは先程の白の空間と比べたらどうしよ
うもないくらい小さな、小さな、もこもことした毛の塊。

「あ…あれ、こんにやく？」

「あれ？ じゃねえって。何寝ぼけてんだよ」

まだ状況がまるで分かっていないルルカに対して、目の前の白ネ
ズミ……こんにやくは、やれやれと溜め息を漏らした。

先程まで機を襲っていた大嵐の気配は既に消えている。それどこ
ろか周囲は先程の夢の中と同じようには静寂を保っていた。

みんなの姿はすぐ側にあった。三人とも床に倒れ伏してはいるが、
息はあるようだし、外傷らしい外傷も見当たらない。どうやら気絶
しているだけらしい。

体がズキズキと痛んだ。嵐に揉まれ、機内のそこら中に体を打ち

付けてしまったようだ。ルル力は痛む体をゆっくりと起こし、キヨロキヨロと凹みや亀裂等、破損だらけの機内を見回す。

状況から察するに、どうやら機は不時着してしまったらしい。デイズの操縦技術をもつてしても、さすがにあの大嵐の前ではどうしようもなかったようである。ただ、あれだけの高度から落ちて全員無事だったのは奇跡といっていいだろう。墜落の途中、偶然どこか山の斜面に引っ掛かったのかもしれない。

「どの辺に落ちたのかな？」

「さてなあ……おれもさつき気付いたばかりだからなあ」

「ちょっと様子を見て来るわ。これだけ機体の損傷が少ないってことは、大して落ちてないと思うんだけど」

「ちょっと待って！ おれも行く！」

大嵐に遭遇するまでに機は白嶺海に接近するほど高く舞い上がっていた。もしも地上まで落下していたのなら、セブン・ファイバー号は木っ端微塵になっていただろう。

ルル力は下部ハッチを開こうと試みるが、どうにも壁が変な方向に曲がってしまっているせいで、押せども引けどもびくともしない。

「ぐぬぬぬう……こんのっ……！」

「……ぶはっ！ はあっ……はあっ……。ダメだ……。ぴくりともしないわ」

「おい、ルル力！ こっから出られそうだぜ！」

こんなにやくに呼び掛けられルル力が視線を移すと、壁の亀裂が外に通じていることが分かった。かなり細いが、身を擦ればどうにか機の外へ出られそうである。

ルル力は細い隙間に身を滑り込ませ、どうにか機の外へ脱出する。
……が、そこに広がる景色を一望した瞬間、

「……………え？」

絶句せざるを得なかった。

夢だとばかり思っていた光景が、そこには広がっていた。

辺りが、見渡す限り一面真っ白。

濃度の濃い純白のヴェールが四方に広がり、その隙間を縫うかのようには差し込むおぼろげな日の光が辺りを照らす。ヴェールに反射された光が、その世界の白さをより一層際立たせていた。

夢とただ違っていたのは、上下の感覚がしっかりあるということと、そこに地面がしっかりとあるということ。

「……………」

一体何が何だか、ワケが分からない。先程の光景は、夢ではなかったのか……。鮮明になりかけていた意識が、再び混乱し始める。

「こんやく……ちよつと私のほっぺつねってみて」

「うん、ほらよ」

「いたたたたっ　！　ちよつと痛いわ離しなさいよっ　！！」

「な……なんだよ　！　つねれって言つたのはルルカじゃねーか」

「誰が思い切りつねれって言つたのよ　！！　少しは手加減しなさいよね、つたく……」

ま……いいわ。それよりも、ここって……一体？」

「うーん……地面があるってことは地上なんじゃないのか　？　奇跡的に麓まで生還出来たんだよ」

「ウソ。だったらエア・シップごとみんなバラバラになってるわよ。なんで辺りがこんなに白いのかも気になるし……。ちよつと……降りてみましょうか」

どうやらセブン・フィーバー号は斜面に引っ掛かったわけではないようだ。そこにある地はどう見ても水平である。

ならば……何故ルルカたちは助かったのか。ここは一体どこなのか。

機から恐る恐る一步を踏み出し、地をゆっくりと踏み締めるルルカ。しっかりとした感触が足に伝わる。ジャンプしても、その安定感是不変わらない。

「……………」

思い切って、地面の続く限り遠くまで走ってみる。しかし、

「　　っ　　！！」

少しも行かぬうちに、突然その足に急ブレーキが掛かった。足を踏み締める感触が、突然消えたのだ。地面は……それ以上続いていなかった。

その場にしゃがみ込み、恐る恐る地面の先を覗き込むルルカとこんにゃく。

瞬間、

「っ　　！！？」

思わず、我が目を疑う。

その瞳に映ったのは……空。

嵐に遭うまで常に見上げながら昇っていたはずのリア＝グランデの斜面が、眼下の遙か遠くにまで連なっている。

まるで世界が逆転してしまったのではないか……そう思わせる光景がそこにはあった。

そして……。

ふわり……と、目の前に白い靄のようなものがよぎる。その正体にルル力はすぐに気付いた。密度はかなり濃いようだが……それは紛れもない、雲。

よくよく見れば、白い雲はまるで霧のように周囲のあちこちに立ち込めていた。

そこで……ルル力とこんにやくは思わず顔を見合わせる。ようやく自分たちが置かれている状況、そして……いま自分たちがいる、この場所の正体に気付いて。

『くっ……雲の中だああああああああっ　　！！！！』

その7

「ちょっとみんな！起きてつてば！みんなっ！！」

機内に戻った興奮冷めやらぬルルカは、未だ気絶しているアドルたち三人を乱暴に揺り起す。

「う……うん……」

「いだだだ……。こ……腰が……」

「な……なんだあ……？一体……どうなった？」

三人ともかなり深い眠りについていたようだが、それでもルルカが強引に起こしたせいですぐに意識を取り戻す。ただ、みんな先程のルルカと同じように、現状をすぐには把握することが出来ずに戸惑っているようではあるが。

「起きたわね。みんな、大丈夫？」

「ル……ルルカさん……？」

「こ……腰が……」

「お……おい、一体何がどうなったんだ……？」

まだ意識が鮮明に戻っていないらしい三人は、キョトンとした表情を浮かべつつ周囲を見回している。

しかし、未だ寝惚け眼でいる彼らの手をルル力は強引に引っ張っていく。

「そんなことはいいから、外！ 外に出てみてよ！」

外に連れ出された三人は、そこに広がる景色を目の当たりにした瞬間、ルル力と同じように一様に驚愕した。しかし、現状を理解し事態を受け入れるのはルル力よりも早かったようである。

「戻って来た……。わしはついに戻って来たんじゃない」

フォウルの声は震えていた。

上下、前後左右。どこを見渡しても真っ白な雲に包まれた空間。

ここは……紛れもなく、白嶺海の中。

自分たちが白嶺海の中に辿り着いたのだといち早く理解したのは、ほかでもないフォウル自身だった。どうやらこの景色は、彼が数十年前に大嵐に吞まれた後に目の当たりにしたのと同じでもあるようだ。

恍惚とした表情を浮かべ、感涙を堪えわなわなとその身を小刻みに震わせるフオウル。

しかし、次の瞬間。体の中にずっと溜まっていた何かが爆発したかのように、年も忘れて大はしゃぎで飛び回り始める。

「うつほほほい！！ やった！ やったぞ！！ わしの仮説は間違っておらなんだ！ ついにわしは白嶺海の中へ戻って来たんじゃない！！

……つぐ！ つぐぐぐ……」

だが、すぐに腹を抑えてその場に蹲った。どうやら先日付けられた傷に触ったらしい。本来彼には絶対安静が言い付けられていたはずだが、それを完全に無視してこれだけ動き回れば傷口が開くのも無理のなからぬことであつた。

数十年前にこの地を訪れたフオウルが遭遇したのと同じように、突如として未曾有の大嵐が現れたのは、偶然か……はたまた必然か。

それはルルカたちには分からなかったが、未だかつて誰一人として足を踏み入れたことのない白嶺海の中にこうしてやって来られたのだと認識すると、本当にフオウルの言う通り、何か目の見えないものに導かれているのではないかというような気がした。

「おいおい、じいさん。気持ちは分かるが少しは落ち着けよ。血圧上がるぜ」

興奮の絶頂にあるフオウルをデイズはどうにか宥めようとするが、そんな彼のことなど全く眼中に入っていないかのように、フオウルはやおら跳ね上がるようにして身を起こす。

「ここ……こうしちゃおれんっ！ 早速調査開始じゃ！ この白き世界のどこかに天空竜がいるに違いない！！」

「あつ……！ ち……ちょっと待ちなさいよ！」

ルルカの制止を振り切って、我を忘れて駆け始めるフオウル。その動きは年や怪我を感じさせぬほど機敏である。

「待つて下さい、僕も行きます！ 僕は人類史上初となる白嶺海の内部を……そして幻の天空竜をカメラで捉えた奇跡のジャーナリストになるんだあああつ！！」

猛然とカメラのシャッターを切りつつ、アドルもフオウルの後に続きあつという間に白い霧の中に消えていく。

はあ……と深い溜め息を吐きつつ、ルルカはやたら落ち着きのない二人の背中を見送った。

「ったく、もう。興奮するのも分かるけど……。おっさんはどうするの？ 行く？」

「んや……、俺あ残る。セブン・フィーバー号を修理せにやならんからな」

テンションを上げまくるフオウルやアドルとは対照的に、哀愁たつぷりの悲しげな視線を、ぼこぼこになった小さなエア・シップに送るデイズ。どうやらよほどの機に思い入れがあるらしい。それでなくとも、帰りの足のことを考えれば誰だって後ろ暗い気分にもなるだろう。

セブン・ファイバー号がこの状態では、自力飛行はまず不可能である。ここまで穴や亀裂だらけになった船を直すことが出来るかどうかは定かではないが、フォウルが『機械技師としての腕だけは一流』と絶賛するデイズの技術を今は信じるしかない。

「そつか。それじゃあここはよろしく。私、あの二人に着いてって来るわ。放っておいたら何をしでかすか分からないし……」

「おう、頼んだぜ。特にじいさんの方を……な」

早速修理に取り掛かろうとするデイズをその場に残し、ルルカは足早に消えていったフォウルとアドルの二人の背を追った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8337f/>

LuLu～風の軌跡～ ?幻の天空竜

2011年11月24日18時59分発行